

322

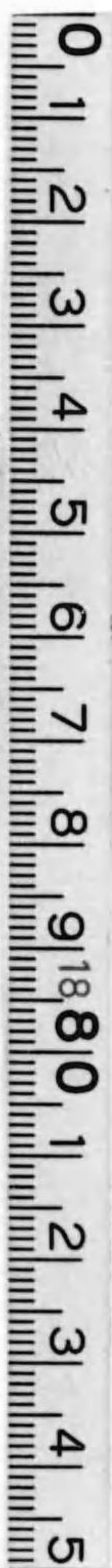
50

大禮記念

上 献

全國兒童模範作品集

綴方 尋常科第



始





322

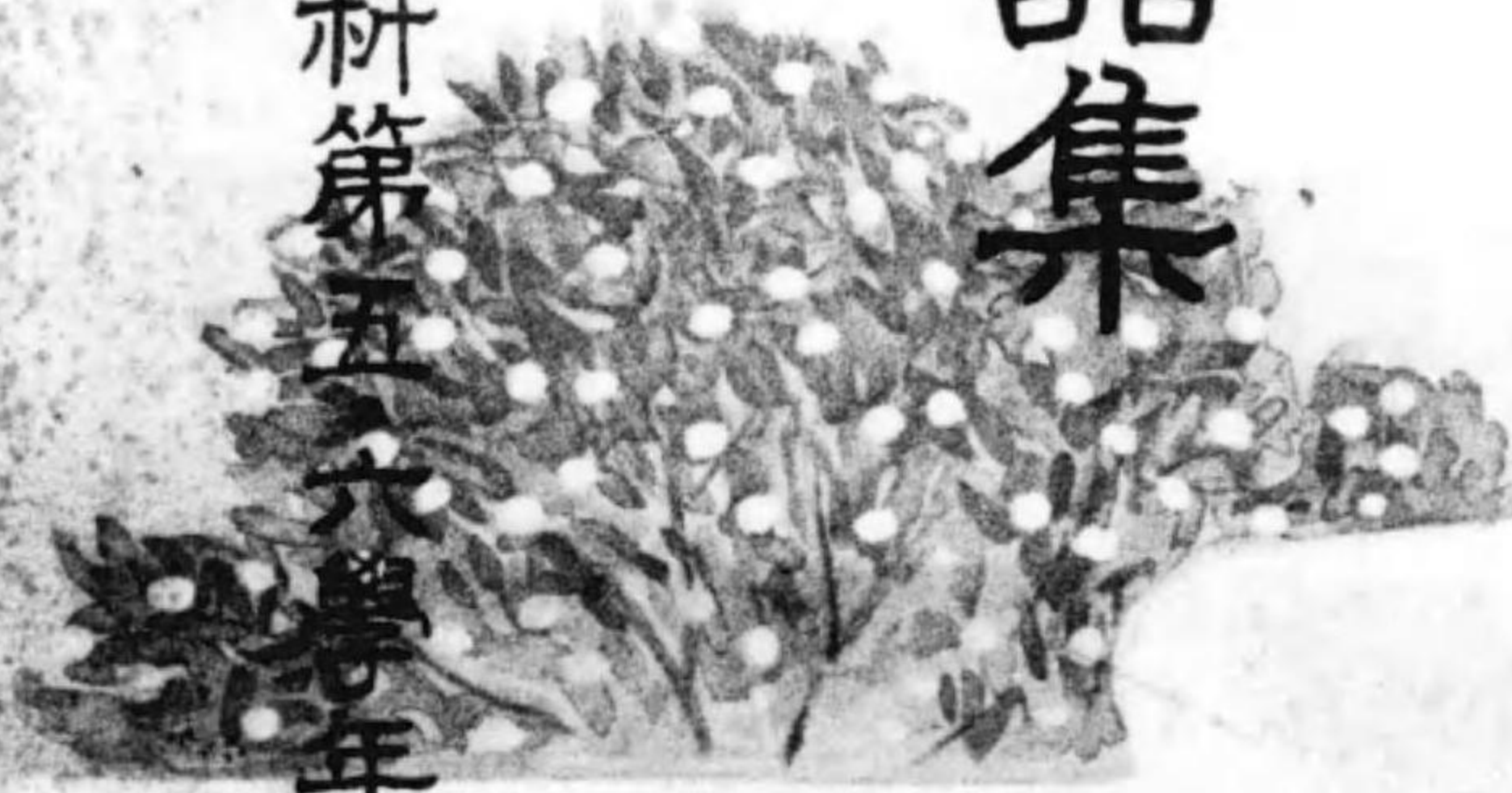
50

大禮記念

上 献

全國兒童模範作品集

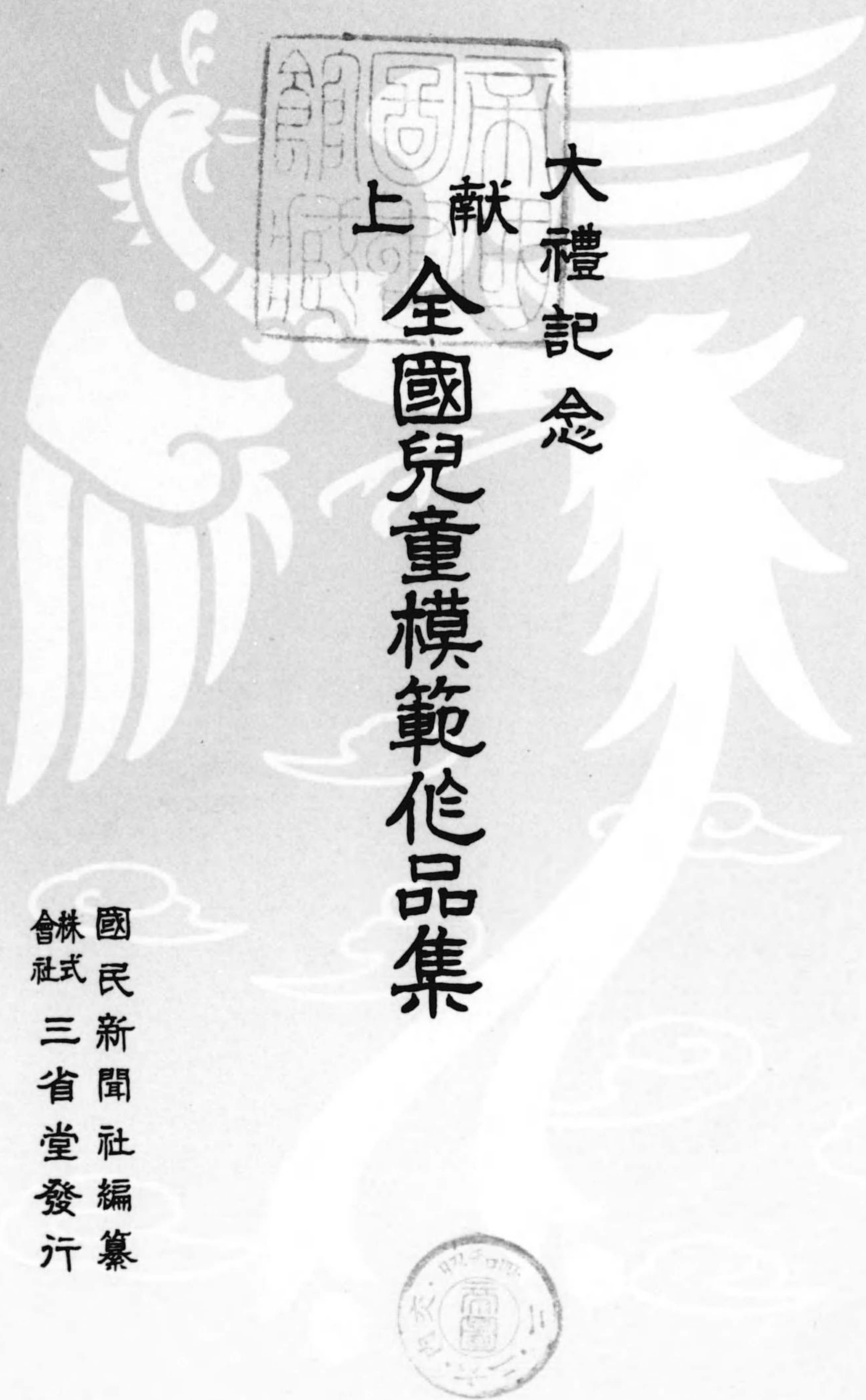
綴方 尋常科第五六年





特 230

424



大禮紀念

上 獻  
**全國兒童模範作品集**

國民新聞社編纂  
 株式會社三省堂發行







大禮紀念全國小學生成績出品中央大展覽會總裁  
海軍大將功四級 伏見宮恭王殿下



德  
天  
作  
明

德  
天  
作  
明

德  
天  
作  
明

臣大内宮  
木一喜郎  
下題字

義總副  
内務大臣  
望月介閣下  
題字

義總副  
文部大臣  
田計主閣下  
題字



## 序

吾が國民新聞社は、本社創立以來、最も教育に重きをおいてゐる。別けても國民教育に就いては、如何なる場合に於ても、本社の全力を盡してゐる積りである。これは決して予一人の自畫自賛でない。全國に於て國民教育に従事せらるる諸君の齊しく認める所である。その證據と云ふではないが、國民新聞一萬號に達したる際、予は先づ自らその基金の若干を提出して、天下の同志に向つて訴へ、其の熱心なる賛同によりて、此に國民教育獎勵會は出で來つた。

而して此の國民教育獎勵會は、故澤柳會長の下に、十ヶ年の間幾多の有益なる仕事を成遂げた事は、これ又た明白の事實にして、その功と勞とは、固より予に於て、聊か自ら居るべきものはないが、しかも會長、會員その他同情者諸君の功勞に至つては、實に多大なるものがあつた。而して今日は上田博士統率の下に、愈その前功を繼續するのみならず、更にこれを擴大しつゝある。

抑も大禮記念全國小學生成績展覽會は、昭和の御代に於て、一あつて二つ無き即位の大禮を記念すべく發起せられたるものにして、斯る仕事は固より一朝一夕の思ひ付きにて出で來るべきものではない。これは多年吾社が國民教育に多大の貢献をなし、且つ多大の干渉を持つてゐるが爲に出で來る事である。扱て此事の實行は、なか／＼容易の業ではなかつた。日本全國一千餘萬の小學生の作品の中より、これを道府縣に集め、各地に於ける展覽會を開き、その審査、撰擇の結果、全國より東京に持ち寄りたるもの凡そ十萬點、その中から更にそれ／＼審査、撰擇して、これを御手許に献上し、又たそれ／＼賞狀を與ふる事になつてゐる。

斯る大なる仕事は首尾よく出で來つたのは、畢竟申すも畏けれど伏見宮博恭王殿下が總裁とならせ給



ひ、文部、内務兩大臣が副總裁となりその他、文部、内務、鐵道省は勿論、全國道府縣の官民及び教育會の協力の致す所、即ちこれを以て吾社の事業とせず、眞に國民的事業として、苟も國民教育に關係を持ち、興趣を有する團體及び個人の同心協力の結果と云はねばならぬ。

固より我が社中にはこれが爲に殆ど寢食を忘れて、十ヶ月以上の時間を此の事に費した人々もある。予は此の機會に於て、それ等の人々に就いて、一言感謝の意を表せざるを得ない。

およそ此の展覽會に就いて、我等の感ずるところは、我が國民教育が、如何に未來の國民の教化に向つて其の效力を及ぼしつゝあるかと云ふ事を立證した事である。中には餘りにその作品の手際がよきを見て、或は小學兒童自身のものでなく、他の指導若くは助力に依つて出來たのではないかと疑ふ者もあつた様だが、予は大體に於て、その疑は寧ろ却つて我が小學兒童の教育の、意外なる進歩、發達を證據立てるものとして認むべきものであらうと信じてゐる。

猶ほ全きを求むれば、種々の注文もあらうが、少くともこの全國小學生成績展覽會は、單に大禮記念と云ふばかりでなく、又た我が國民教育史上に於て、劃時代のものであると云ふべきであらう。

而してその作品が單に内地ばかりでなく、朝鮮、樺太、臺灣は固より、南洋からも、ハワイからも出品せられたる事は、我等にとつて實に快心の極であつた。(昭和三年十二月十一日國民新聞社に於て)

蘇 峰 德 富 猪 一 郎

德富蘇峰先生文章報國茲に四十年右に偏せず又固より左に傾くこと無く穩健中正の道を進んで常に國民の友として其の指導に當られつゝあることは余の平素敬服して措かざる處であり殊に先生の主宰せらるゝ國民新聞が我國國民教育の振興に努力し寄與貢獻せられつゝあることの大なるも亦余の豫て深く敬意を表する處である。

今次 聖上陛下御一代只一回擧げさせらるゝ國家至重の盛儀たる御大禮を奉祝し又之を記念し奉るが爲めに國民新聞社に於ては全國小學校兒童の成績品を蒐集して展覽會を開催し我國國民教育の全般を一瞬の下に俯瞰することを得しめ以て我帝國の將來を負擔する少國民の實力の存する處を示し國運の發展に資せんとするの計畫を樹て之を實行せらるゝこと、なり余に囑するに出品審査の事を以てせられた。

余固より不敏菲才其任に非ざることを知るけれども該事業の蘇峰先生が平素抱懷せらるゝ皇室を中心として國民の思想を指導せられんとする精神に出るものであつて教育上最も意義があり御大禮を奉祝するに於て最も適切なるものたるを信じ敢て驥尾に附し驚鈍に鞭たんことを誓ふた。而して該展覽會が開催せらるゝや獨り内地ばかりでなく臺灣、朝鮮、樺太等の各植民地は勿論南洋、布哇等よりも總ての教科目に涉りて兒童の成績品が出品せられ其の總點數も十萬を超え何れも皆少國民の精神を罩めたる努力の結晶が陳列せられ我國國民教育上空前の大偉觀を現出した。

而して展覽會に在りては此等の出品中最も優良なる成績品を選抜して之を長き邊に奉獻することゝなつたが如斯は實に一千万の小學校兒童の一大光榮たるばかりでなく實に國民教育の名譽と云はなればならぬ。之れに依つて感動せしめられ刺戟せられて兒童のみならず國民教育に従事する人々が國家教育のために一層奮勵努力するに至るべきは明なる所であり其の將來の國民教育の發展に裨益する



の偉大なることは云ふまでもない所である。

更に同社に於ては其の奉獻成績品の作品集を編纂することとなつたが之は洵に我が國民教育の精髓の鳥瞰圖とも云ふべきものであり又榮譽ある小學兒童の記念塔とも云ふべきものであつて其の兒童教育に及ぼす効果の大なることは敢て言を俟たぬ所である。余は審査委員長の任を汚して居た關係上、本書の成るを聞き欣喜措く能はず聊か所懐を述べて序とする。

文部省普通學務局長  
成績品審査委員長

武 部 欽 一 識

昭和四年一月

上 御一代たゞ一度行はせらるゝ御大典を、永久に、且つ有益に而して全日本國民が平等に、均霑し得る記念事業として『大禮記念全國小學生成績品展覽會』は最も相應しきものであつた。殊に、この展覽會の特徵は

- 一、全日本小學兒童一千九十九萬六千七百六十九人（一道三府四十三縣及各植民地に於ける全小學校二萬六千四百二校に就學せる小學兒童全部）一人残らずこれに参加出品したこと。
- 一、出品された成績品は、全教科目を網羅し、從來曾てこの種展覽會において其例を見なかつた修身、歴史、讀方、地理、理科、綴方、唱歌、體操までが悉く出揃つたこと。
- 一、出品成績品の悉くが、その地方色を多分に保有し、且つ尊重されてゐて、各其地方色に伴ふ特徴ある教育の流れが作品の上に完全に現れてゐたこと。
- 一、出品成績品中最大の雄をなしたものは理科、手工、手藝、地理、圖畫等で、中にも手工藝にいたつては大人も舌を捲く程の大作あり、而してその大作の多くは共同製作にかゝるものであつたこと。
- 一、全日本小學兒童の總出品點數は、よく分らぬが一千萬人兒童が全教科目毎に出品したものとすれば、少なくとも一億點を突破したであらう、この多數の出品を各地方地方で嚴重な豫選にかけて篩ひ落し、中央の大展覽會に豫定の十萬點を集約し得たこと。
- 一、中央の大展覽會に集約し得た十萬點の出品成績品に對して、文部省を中心とする學界の權威百十七名より成れる審査委員會の審査に附し、其中より更に約二千四百點を嚴選してこれを

畏くも、  
天皇、皇后兩陛下に奉獻することゝなつたこと。

一、奉獻品外の出品（中央展の）に對しては、審査の結果、何れも優良の成績品のみなるを以て畏くも伏見總



裁官殿下より特に優等の褒状を授與せらるることとなつたこと。  
 斯の如くして、御大典記念事業としての當初の目的は完全に達成せられた終始一貫この大事業の遂行を滞りなく貫徹し得たことは、全く宮内當省をはじめ内閣諸公閣下の絶大なる御援助と、全國各道府縣長官閣下、以下各教育機關の御聲援と、御盡力とによる賜として深く感謝するの外ない、更に株式會社三省堂がこの事業が我が教育界に偉大なる功績あることを認め、義侠的に本展覽會の爲めに、奉獻品の作品集を發兌すべく多大の犠牲を拂はれたることを、茲に併せて謝し置く。(昭和三年十二月二十八日國民新聞編輯局にて)

大禮記念  
 全國小學生成績品中央大展覽會  
 總務部長 田中正之

大禮記念

全國兒童模範作品集

綴方尋常科第五・六學年目次

第五學年ノ部

東京府忠生小學校	梁田浩祺	一
京都市滋野小學校	村井俊子	二
大阪市福小學校	藤川正義	四
神奈川縣正修小學校	山中辰巳	五
兵庫縣明石女子師範附屬小學校	爲田隆穂	七
新潟縣城内小學校	高野一能	九
埼玉縣早稲田小學校	山本純三	九
群馬縣名和小學校	高木朝雄	三
千葉縣旭小學校	中臺三男	三
茨城縣金江津小學校	高橋健一	六
栃木縣泉川小學校	大島チヨ	六
宇都宮市築瀬小學校	秋元實	六
奈良縣櫻井小學校	鴨島ノブ	三
宇治山田市厚生小學校	瀧利民	三
静岡市師範附屬小學校	北村よし子	三
山梨縣小淵澤小學校	宮澤テル子	三
岐阜市白山小學校	山口貞一	三
長野縣北山小學校	篠原耐二	三
仙臺市片平町小學校	阿部美知子	三
福島市第二小學校	福島榮	三
岩手縣宮古小學校	本堂正寛	三
青森縣小湊小學校	本堂正寛	三

秋田縣小坂小學校	村井章	三
福井縣上志比小學校	淺野幾夫	三
石川縣女子師範附屬小學校	吉田進	三
金澤市味噌藏町小學校	鈴木和榮	三
高岡市下關小學校	正村敏三郎	三
鳥取縣高麗小學校	古志仁	三
吳市岩方小學校	稻垣忠子	三
下關市王江小學校	難波忠義	三
和歌山縣師範附屬小學校	田中一也	三
徳島市佐古小學校	山下多喜子	三
愛媛縣惣開小學校	進藤達子	三
高知市第三小學校	大河清流	三
熊本縣第一師範附屬小學校	大平恭造	三
鹿兒島縣中郡小學校	福田茂	三
沖繩縣座間味小學校	宮里ツル	三
北海道卯原内小學校	宮川由雄	三
北海道光小學校	中幸一	三
北海道江別小學校	櫻田美代子	三
臺灣嘉義第二公學校	姜仁海	三
臺灣花蓮港小學校	齋藤英夫	三
臺灣馬蘭公學校	ガヤ	三
南洋薩サイパン小學校	奥山博行	三
布哇リフエ平和學園	島本みつ子	三



第六學年ノ部

東京府豊島師範附屬小學校	安井彌生	一
東京府豊島師範附屬小學校	野間眞弓	四
京都市西陣小學校	岡本淳子	六
大阪市蘆分小學校	三原金敏	七
大坂市平野小學校	酒井忠雄	九
兵庫縣小田第二小學校	江藤咲子	二
長崎縣上大浦小學校	石橋亮一	三
新潟縣中通小學校	柳橋亮一	四
埼玉縣師範附屬小學校	岡田多重子	六
群馬縣高瀬小學校	金澤正美	七
千葉縣高瀬小學校	積田まさ	八
茨城縣新郷小學校	北島龍之助	九
茨城縣靜小學校	淺川春江	三
栃木縣南押原小學校	鈴木美子	三
奈良縣御所小學校	吉原富美子	五
三重縣小原小學校	田口ヒサ	六
静岡縣東山小學校	榛葉隆	六
山梨縣師範附屬小學校	飯竹正彦	六
滋賀縣志津小學校	高岡良輔	七
岐阜縣竹ヶ鼻小學校	木村みち子	七
長野縣今井小學校	鹽原恒一郎	七
宮城縣福岡小學校	山口金兵衛	七
福島縣西方小學校	小松禮三	七
盛岡市仙北小學校	中村キミ	七

目次終

青森縣向陽小學校	竹内みつ子	三
秋田縣大湯小學校	山本一司	三
福井縣小濱小學校	山下マサエ	五
石川縣種谷小學校	中川辰子	七
石川縣津幡小學校	中村豊枝	七
富山縣泊小學校	上杉きく	六
鳥取縣溝口小學校	深田利子	六
松江縣白湯小學校	大川久子	六
廣島縣中村小學校	高橋アサコ	六
山口縣華浦小學校	古谷茂	六
和歌山縣御坊小學校	楠谷富雄	六
和歌山縣鹽屋小學校	木村ヨシム	七
德島市佐古小學校	小川町子	七
高知市第三小學校	島崎利之	七
熊本縣柳浦小學校	熊本利好	七
鹿兒島縣龜山小學校	石神高明	七
小樽市稻穂小學校	河野久美	七
札幌市東北小學校	安西猛	八
沖繩縣古堅小學校	安森静子	八
臺灣花蓮港小學校	守屋久	八
臺灣嘉義第二小學校	胡和	八
南洋羣島ラック小學校	柴崎勝次	八
南洋羣島サイパン小學校	笹本廣	八
布哇中央學院小學校	鈴木秀雄	八
布哇カアラア・カハナ聯合學院	泉文江	九

尋常科第五學年



## 七 國 山

東京府南多摩郡忠生尋常高等小學校

尋 五 梁 田 浩 祺

僕の家の方前に七國山といふ高い山がある。此の間晴れた日の午後友達と二人で登つた。

登り口はじめくとしめつた坂道だ。急ぎ足でのぼつたので、ひたいからは玉のやうなあせが落ちた。山の木の葉は煙草色にそまつて居る。

やがて頂上に着いた。山の上から見渡すとはるかに大山が見え、その肩から富士山がはや雪をいただいて高くそびえて居る。

目の下には黄金色の稻田をへだてて、僕等の學校、僕等の村などが箱庭のやうに見える。ふりかへつて後を見れば足下の谷からは夕飯のしたくだらう煙が細く立ち上り、はるかに原町田の方がかすんで居る。

此の時一臺の飛行機が音も無くとんで來た。立川へ歸るのだらう。羽が一枚だからきつと朝日新聞社のかも知れない。

何所からか山寺のかねの音が聞えて來る。



下山しやうとする時分には太陽は最早沈まうとしてゐて、西の空は赤々とそまり遠山は紫にかがやき何とも言へぬよい景色である。  
僕等は歸るのも忘れて見とれて居た。

## 土用ぼし

京都市滋野尋常小學校

尋五 村 井 倭 子

「倭子、今日は土用ぼしをしようかね。」

お母様がおつしやいました。ほんとに今日は、土用ぼしにちやうど都合のよい日です。ぼてに着物を入れて、

「エンコラサ エンコラサ」

と、かけ聲をかけて、お母様は二階へ持つて上られます。私もついて上りました。おざしきのガラス戸をガラ／＼と明けると、さわやかな風がむしあつい二階をすずしくします。らんかんに、持つて上つた着物をたくさんかけました。お正月に着た着物などを……。

着物をひつくりまはして居ると、赤い小さなおべべが出て來ました。お家にこんな小さなおべべを着る赤ちやんがないのにと、ふしぎに思つてお母様にたづねると、

「それはあなたの小さい時、着てたんですよ」と言はれました。ほんとに、幼い時こんなおべべを着て、遊んで居たであらう自分の姿が、目に浮んで來ます。いつも叔母さんたちに

「お袖のおべべを着て、おちちを飲んでゐるの」

と、笑はれた事などが一つづつ頭に思ひ出されます。幼少の着物を見るのはたのしいものです。いつか大きなくせに、この赤いおべべが着たくなつたので、そつと着て見ると、何のみぢかい／＼服よりも、ずつとみじかいのです。お母様やかねやに、おさるさんの様だと笑はれたので、鏡で見ると、なるほどは笑れるのも尤もと思ふやうな、おかしいおどけた姿でした。

そのうち、又美しい裾模様が出て來ました。さう／＼、これはお母様の御結婚の時に、お父様と一所に寫真にうつしてある着物でした。お母さんも

「是を着た時分には、倭ちやんも芳ちやんも居やしなかつたのねえ、もうこんな物ははでだから、着られやしないけれども、また、あなたがもうぢき着られるね。」と言ひながら、ぼして居られます。私も、あんな大きな着物を着るやうになるのかと思ふと、面白いやうに思はれます。お晝すぎまで、一生懸命お手傳をして働きました。



## 御大禮の日を待つ

大阪市福尋常小學校

尋五 藤川正義

十一月十日、十一月十日。此の日は我國にとつては此上ないめでたい日である。かしこくも我が今上陛下が即位の御大禮をあげさせられるいともめでたい日である。と言ふ事は、かねて先生より承つて早くから指をりかぞへて待つてゐる日である。あゝ早くその日が来ればいゝのに、待つとなか／＼日の立つのも遅い氣がしてならぬ。

謹んで思ふに、萬世一系世界に比なき我國はこゝに百二十四代の聖上陛下を、お迎へ申すのである。我陛下には、三種の神器をうけつぎて、天つ日つぎの御位に登り給ふのである。之を思ふと、祝せずには居られない。東洋のはなれ小島と呼ばれた我國もだん／＼領地が廣くなり、今では亞細亞大陸の一部を占め、文化の進歩も諸外國におくれず、國威は世界のはてまで輝きわたる今日、英明なる陛下を上戴いて、千代に八千代に榮ゆることを思へば、うれしき事とても口や筆にはつくされません。

先生にきくと、十一月十日にはかしこくも天皇后兩陛下、親しく、京都に行幸啓あられて、内外の百官を、お召しになり、おごそかに、大禮の式を行はせられ、なほ御饗宴も催されるさうである。

さればこの日は、片田舎の我が福町でも、家々の軒には、日の丸の旗が勢よく秋風にひらめくであらう。日頃商賣に忙しい、我父兄たちも、菊の花かをる校庭に集つて、遙拜式を行ふであらう。我ら小國民も、學校の式がすんだら、旗行列でもやつて心の底からお祝ひ致しませう。早く十一月十日が来ればよいものに。

## 大洪水

神奈川縣鎌倉郡正修尋常高等小學校

尋五 山中辰巳

「今日は鶴沼の方へ歩いて行かれないさうですよ。」

新聞を投げ込みながらさう云つて、配達夫はかけて行つた。

僕は思はず不安になつた。水で行かれないのだ、きつと道まで水が來つてゐるのだらうと思つて通りへかけて行つた。向ふに二三人集つて、西の方を見ながら何事か話をしてゐる。その人達の所に來て左側の畠を見た時、思はず驚いてしまつた。昨日の畠は今日の池となつてしまつてゐる。そばの百姓家の庭は大分水にひたつてゐる。もう少し雨が降ればゆか位まで來てしまふだらう。河袋の前の道は僕の想像通り水で見えなくなつてゐる。向ふから自轉車が來た。どの位深いのだら



うと思つて見てみると、その人はざうりをわきにはさんではだしてペタルをふんでゐる。大分深さうだ。何しろ道ばたの草の頭だけしか出てゐないんだから。

學校に行く時間になつたので、今日だけ電車に乗つて行く事にした。車中に入ると乗つてゐる人達はみな大水の話ばかりしてゐる。

「ずゐぶん出ましたな。」「さうですなあ、田が水でうまつてゐる位ですからなあ。」ふと窓外に目をやるとすぐ下の田は、さつきの田よりも水が一ばいでどん／＼とどこかに流れて行く。

「さあ、これからはお天氣を良くしてあげますよ。」と云ふ様に太陽は上空でニコ／＼わらつてゐる。片瀬川の鐵橋から下を見下すと、驚く程川幅が廣くなつて川波がより、にごつたきたない水がどくどく流れて行く。

そのとなりの田も川の様子に、ものすごい勢で流れてゐる。いつも一本足で田の中に立つてゐて雀の番をしてゐた、かゝしは罪もないのに水のみなきつた田の中にあをむけにたほされてゐる。その邊の田も皆同じ有様だ、今年はあまり豊作でないだらう。

新聞にも「電車停電。」とか「家屋浸水。」とか「何川増水。」なんて恐い事ばかり書いてある。

新聞に書いてある様に自分の家に水が入つて來たりした者はどんなに困つてゐるだらう。僕等はさういふ目に合はないのだから、そんな人にくらべればどの位幸福か知れない。歸りに通つた時には、一面の川であつた道もいつしか水がひいて、所々水たまりが出來てゐるだけであつた。太陽はカン／＼照りつゞけてゐる。

富士や箱根の雄姿が、大空にそびえてゐるのも近く見える。

## 落し穴

兵庫縣明石女子師範學校附屬小學校

尋五 爲田 隆 穂

果しなく晴れた日曜日のことでした。温室の南側の日のよく當る所で僕はいたづらを始めた。僕は掘れるだけ深く土を掘つてその上に小枝を渡して新聞紙を持つて來て見ると何か忘れたやうな氣持がした。僕は何だらうと思ひながら考へて見ると水を入れのを忘れてゐた。水を入れたら小枝が皆穴の中にまつた。又その小枝を上げて新聞紙をのせてその上に土を置いたがよくわかるのでその上に苔を置いてみたら少しもわからなくなつた。

僕は座敷に居る淳ちゃんにしゆろの實を取りに行かうと言つて温室の南側へ行かうとしたら、しゆろの木はそつちから行けへんと言つたので、しまつたと思つたが、そんなら桃の實を取りに行かうと言つたら、行かうと言つて下りて來た。落し穴の所まで來ると淳ちゃんは、ぼいと飛んだのでしまつたと思つたが、歸りしなにはめてやらうと思つて、桃の實を取つた。歸りしなもまたぼいと飛んだので、しまつた。今度こそはと思つて、もう一度取りに行かうと言つたが、もう行かないと言つたので、今度は純ちゃんをはめてやらうと思つて、純ちゃん桃の實を取りに行かうと言ふと、取つて來て



と言つた。純ちゃん來たらなんぼでも取つて上げると言ふと、そんなら行くと言つた。僕は今度こそはめてやると思つてゐたら、おたして行つてと言つたので、足が無いのんかと言ふと、あると言つて下りて來た。その時お母ちゃん、純ちゃんお菓子を上げやうと言はれた。純ちゃんはちつき飛んで行つてしまつた。僕も行つたら、姉ちゃんは蠶に桑をやるので桑の葉を取つて來ると言つて裏へ行つた。が直ぐ姉ちゃん、ひやあと言つて飛んで上つた。僕は何だらうと裏へ行つて見ると、落とし穴がめげてゐた。姉ちゃん、はまつたと思ふと面白くてしようがない。あんまり笑ひよつたらお腹が痛くなつた。又仕直しようとする、と淺くなつてゐたので掘りよつたら、泥水が僕の顔、いっばい飛んで、顔が泥水だらけになつた。顔を洗つて又しはじめた。やうやく出來上つた。それから米澤のぢさんが來てあつた。僕はもう落とし穴など忘れてゐたら、米澤のぢさんも落とし穴にはまつた。をぢさんは、僕は大分しよわるやなと言つてあつた。

又その穴をしなければほつといたら、せつちやんがはまつた。なんでそんな悪いことをするかとお母さんに叱られて、裏のいちごを取つて食べた。落とし穴は淋しさうにあばら屋の焼け残つたやうだつた。夕日が僕とおとし穴を赤く照らしてゐた。淋しい心で家の方へ歸つた。

## 八海登山

新潟縣南魚沼郡城内尋常高等小學校

尋五 高野 一能

「ぼうや起きられ、今日は登山だぞ。」

枕元でお父さんの聲。

僕はびつくりして起き上つた。

まだ暗かつたが、少しも眠くない。

手早く軽い仕度をした。

初めてはかせてもらつたわらじはぬげるやうな氣がする。

四人の人足に多くのニギリメシや水を背負はせてみんな一所に出かけた。

星のきらめきを數へながら、僕等は約束の場所郵便局の前へ集つた。時計は今三時半である。

一人來た。二人來た。程なくみんな集つたので其の場を立去つた。

話ははづみ、足は軽く、我々一同が里宮についた時は、五時近くであつた。

夜は全く明けはなれ、東の空は白々と太陽が今にも笑顔を見せやうとして、四方の雲をふきはらひ、

山際は殊に美しく見えた。



僕等はこのにてムスビを一つ平げ、山口の人々をまつた。全部揃つた。

二十七人の團體は、案内人を先にいよ／＼一合目より上り初めた。

行つても／＼平である。仲々長い。

二合目へ来た。

こゝで屏風へ行く口と生金へ行く口と二つに道が分かれた。

屏風へ行つた人も多数あつたが、僕等は険しいといふので、生金口から登ることにきめた。じよんじよんならんで歩いた。

三合目には、直經五六米もあるかと思はれる大なる岩が横たはり、上には木が生えてゐた。

「大きい岩だなあ！」

ホーホケキヨ、ケキヨ／＼／＼

ホーホケキヨ。

どこともなく鳴く鶯の聲。

「オ、いゝなあ！」

思はず頭を上げた。なほ鶯は鳴き続ける。

「今頃鶯が、みんなゆつくり登らうぢやないか。」

「愉快だ。」

みんなは歩いた。

やがて四合目。何もかはりはない。

だん／＼険しくなつて来た。上れば上る程道が悪い。

五合目は中々来ない。もういやになつた。木に腰かけて休んでは、又上りつゞけた。

ホーホケキヨ。また鳴いた。

可愛い鶯の聲に勵まされて、ずん／＼上つた。

「五合目。」ほつと一息。

五合目は岩のつき出た下に地藏様が立つてゐた。

僕等はこのでみんなの無事をお祈りして立去つた。

「くさりのある所は、何所だい。」

案内人に聞いた。

「もうぢきだ。もう少し上ればある。」

僕はうれしくてたまらない。

どん／＼／＼急いで上つた。

「オ、水がある。」

「一寸休まら。」

「よし休まら。」

ちよろ／＼岩間をまれ来る水のほとりで足をなげ出し、咽喉をうるほして出發した。



程なく

瀧 !!

断崖よりとび散る水は丁度霧を吹きかけるやう。悉く飛沫となつて消え、大小多数の岩の間をまがりくねつて流れ行く。

まことに生々する。瀧を見下した。

また一だん美しい。

深山の風景は實際見ぬ者にはわからぬ。

ずん／＼上ると 岩の下に「六合目」と刻んだ石が立つてゐる。

「オ、もうぢきだ。六合すぎた。あと四合で頂上だ。」

僕は勇みに勇んで上り出した。

先頭の中俣満君が、力のある聲で叫んだ。

「オーイ 早くオーイ クサリがある／＼。」

「そら上れ。やれ上れ。クサリがあるとよ。急げ急げ。」

夢中になつて歩いた。

「坊さんあんまり急いで落ちないやうに氣をつけらつしやれ。」

案内人に注意された。

それでも僕は急いだ。

「ある／＼クサリが。」

嬉しくてたまらない。

力一つばい引張つて見た。

ガラン／＼／＼幾度も引張つた後

「よろし、大丈夫。」

しつかりつかまつて上り始めた。

角々のある岩。

思つたより楽だ。一つのくさがりが終つて第二のくさり。此所も大して難儀ではなかつた。

次は三つ目のクサリ。

「あぶないからまつてゐらつしやい。」

後にゐた人夫は大聲で叫んだ。

びつくりして僕は立ち止つた。つる／＼すべるやうな岩。少し斜に屏風を立つたやうな足がりのない岩。上つて来た後とはふりかへつて見れば絶壁。足もとがぐらつき出しさうだ。だが早く上りたい。しつかりくさがりにつかまつて、僕は人夫をまたずに上り出した。

急いで来たらしい人夫は、汗だくになつて僕をおさへながら上つた。

大きなくさり、やつとつかまへるやうなクサリ。

恐しいやうな 愉快なやうな 妙な氣がした。



いよ／＼登りつめて、クサリは終つた。

「あゝ愉快。」

平な道を歩いて一同腰を下ろした。

「オ、この見晴し。」

折から太陽の光がキラ／＼と輝き初め、谷間の緑は一そう美しく見えた。殊に初めて見る高山の朝日は實に爽快だつた。

大巻、水尾邊まで一目だ。

高いやうに思つた西山も、此所で見ると小さい岡位だ。いや田の畦位だ。

「オ、汽車が、小さいなあ、おそいなあ。」

誰かが言つた。

僕は見えなかつた。

南から遠く北へ流れて行く、魚野川さへ小川位だ。

縦横細い帯をしいたやうなのが縣道とは驚いた。

白壁の倉が見える。

テーブ細工の家のやうに。

學校は人家の三倍位。下仁田工場がある。其の間に人家が人形の家位に並んでゐる。さつと朝風が來た。

しばらくながめて、また上り出した。

少し行くと左側に大きな岩がある。

三四十米もあらう。有馬大神と刻みつけてある。其の字は上が六尺四方、下が三尺四方だと聞いたが、上から下まで同じ位に見えた。

十數米はなれて右側に、きり立つた大岩があり、其の真上に枝ぶりのよい松が一本ある。覗きの松と傳へられてゐるさうだ。

其の横には生金のお宮があつた。

一同は宮の前にゴザをしき思ひ／＼にかたまつてニギリメシをたべ背負つて來た水を飲んで上りつづけた。

赤土ばかりの坂道を、ずん／＼上るとクサリがあつた。大したことはない。

しかし道はだん／＼峻しくなつた。

右手は屏風を立つたやうな山。左手は崖で一步ふみはずせば千仞の谷。

道はと言へば片足の幅だけ、みんな右手の山に抱きつくやうに、又はふやうにして歩いた。

誰一人として口を開く者はない。

やうやく通り過して少く歩むと平な草原だ。一行立ち止つた所は硯池。大きな足あと見たいな池だ。苔が生えて中は黒綠色。たまりらしい浅い池。棒を入れて見たら、深さ一米もある大分泥深い池だ。

よ／＼「八合目」



「上れ／＼頂上はもうぢきだ。」

急いで行くうちに、屏風口から上つた人々と出合つた。

「おやッ。道がたへた。この岩の上を行くのかい。」

「あゝそうだ。其所を上るのだが、岩がかかるから氣をつけて上らつしやれ。」  
僕が眞先にならうとすると

「まあ急がぬやうに。一人づゝ上つてからでないと思ふ所がないから。」  
と注意され、其の難場を事なく越して案内人の先きに、どん／＼よち上つた。

「オーイ」

突然、下の方で人夫の聲。

「はてな？」

「道がちがふ／＼、そつちへ行つちやだめだ。こつちだ／＼。」  
やつと上つた道を足早に引返した。

「どつち？」

人夫は笑つてゐる。

「どつちへ行く？」

「お前たちがあまり早く上つてあぶないからだましたんだ。」  
「なあんだ。馬鹿々々しい。」

後れた人をまち合せ、一同揃つてからなほ上りつゞけた。

「九合目。」

「オ、！ 名に負ふ千本槍!!」

一同小おどりした。

僕は足が地につかぬ程身の軽さを感じた。

「ばんざ——い。」

然し豫想ははづれた。

千本槍があるかと思つたに、日かげもなく、かなり廣い平地で、小さなアタンブキの家が三軒ある  
つきり。

上つてつきあたりがこもり堂、中のお宮、其の隣は物を賣る店で人がゐた。

なつかしいやうな氣がした。

一行は荷物を下し、ゴザやカサをぬぎすて、いよ／＼峻しい頂上へと歩を運んだ。

崖へ出た。一歩々々足に力を入れて下りて行き、かけ落ちさうな赤土道を通りぬけ、大岩小岩の間  
をはつて話に聞く花立岩の所に出た。

此の邊は角々の岩山で、何所を見ても千仞の谷。

誰もこんな所で悪い考を起す者はあるまい。頭の中まですみきつたやうだ。

三方きり立つた岩の一方には、せまい道がある。そこに有名な花立岩があるのだ。



先の尖つた、ぼろ／＼にかけさうな岩、二米位あるか？  
其のそばで谷間を見た。

のぞいただけでも目がまひ、足がぐらつきさうだ。  
一步ふみはずさんか、千仞の谷へ真逆様。

「この岩の上はどの位ある？」

「さあ！ やつと兩手をつく位だらう。」

こんなせまい岩の上で、しかも恐しい此場所で、大崎の校長先生が鯢鉾立ちをしたと聞いては、うそと疑ふのも無理はない。

其所から又、岩を傳つて奥へ行くと、道が二手に分かれてゐる。先づ左手へまはつた。此所は海なら半島といひたい位つき出た所で賽の河原と教へられた。

石をたくさんつみ上げた中に、六七十粒位の地藏様が、坊主頭ですはつてゐた。  
其の向ふに、石膏細工の小さい地藏様があつた。

無意識に手を合せ、まはれ右で歩き出した。

ガン／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

ガン／＼／＼

鐘なる。

ぎゆつとして前方をにらんだ。

「釣鐘だ……」

こんな山奥に。

ガン／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 先き行つた人が盛に打ちつゞけてゐる。

「頂上!! オ、頂上だ!!」

「イヤァー すばらしいながめだ。」

僕は不動の岳の頂上に立ち上つて叫んだ。

萬歳!!

天皇陛下萬歳!!

あたりのきれいな空氣がピリッと動いて四方の山が皆叫んで居るやうに、コダマになつてきこえる。

## 僕は蚊である

埼玉縣北葛飾郡早稻田小學校

尋五 山 本 純 三

僕はある所のどぶの中に生れた。

毎日／＼小さいからだをぶら／＼させておどりあるいてゐた。水の中には、僕等にうまいごちさうたがくさんあつた。僕は早く大きくなつて、外へ出て見たくてたまらなかつた。その中に、だん／＼



體がふとつて、僕等はおにぼらふりといはれるやうになつた。

或日の夕方の事である。僕等はたくさんの兄弟たちとおもしろくおどりをおどつてゐると、急にあたりが暗くなつて来て、蛙君がさわがしくなきはじめた。まもなく、大粒の雨はぼつり／＼とふりだした。やがてほんぶりになつて、ざあ／＼とはげしくふる。蛙君はます／＼なきだす。おかげでどぶの水はいっぱいになつた。

雨は少したつとやんだが、なんだか水がかはつてゐてつめたい。へんだと思つて、あたりをみると僕は池に流されてゐた。池の金魚君が僕達を見つけると、大きな口をあけて、正面からつき進んで来た。やがてばかりと、一口やつたかと思ふと、そばにゐた兄弟の一匹はみるまにやられてしまつた。今度は僕をおひかけてきた。僕はひらりと體をかはして上にあつたふさもに取りついて、ほつと一息ついた。こんなことは、なんだあつたかしのない。金魚君の爲に僕等のなかまはずいぶんやられた。

其の中に僕はだん／＼大きくなつて、このおそろしい水からはひ上る事が出来るやうになつた。

いよ／＼その日はきた。僕は水草にとまつて西の空をながめた。空は赤くなつてゐて、僕達の見さんがかきざりなくとんでゐる。僕はいつとぼらうかと、時のたつのをまつてゐた。あたりはうす暗くなつた。いよ／＼飛ぶとなるとうれしくてたまらない。僕は一、二、三、で飛び出した。ようし今度は人間君の血をたくさんすつてやらうと思つて、飛んであるくと、或家にやつて来た。其の家ではちやうど夕飯がすんで、庭先にすゞみ臺を出してすゞんでゐた。僕は其の中で一等ふとつてゐる人を見つけた。其の人はあつがつてまつばだかになつてゐる。はじめて血をすふのだからわく／＼する。僕

はちゆつと針をさしこんだ。此の時、其の人はぎゆつとうでに力を入れたので、針がぬけない。これでは血をすふ所のさわぎではない。いのちがあぶない。やがて力をゆるめられたので、大急で針をぬいてぶ／＼とにげ出した。僕は一つよい事を教へられたやうな氣がした。今度はなんでもねるのをまつてゐる外はないと考へて、しばらく障子にとまつて休んでゐた。やがて其の男がねむつたので、背中の手のとどかぬところをみつけてのみはじめた。まんぶくになるほどのんでも、ねむつてゐるから平氣だ。其の夜はそれですました。

あくる晩は、やはりすゞみ臺を出してゐた。僕は皆の星の話を聞きながら、太郎さんの首の所にすひついた。すると出しぬけに太郎さんの大きな手がひゆうと、僕の所にとんで来た、其の指先が僕の足にあつた、僕はびつこをひきながらにげかへつた。そして、ざしきの方へ行くと目の前に白い煙がぼらつと立ち上つてゐる。僕は不思議だなあと、思ひながら見てゐると、其の煙が僕の方へよつて来たので、其の煙をすふと急に目がまわつて頭がぐら／＼して来た。僕の體はだんだんよわつて来る。呼吸もだん／＼くるしくなつて来た。なんだかおそろしいやうな氣がする。



## 私のおぢいさん

群馬縣佐波郡名和小學校

尋五 高 木 朝 雄

私のおぢいさんは、よく私たち五人の孫をかはいがつてくれました。

おぢいさんは、お寺につとめて居りましたので、どんな寒い日でも、毎日出かけて行きました。そうして夜おそく私たちがねる頃になつてから歸つて来る事もありました。

たまにお寺で何かもらつて來ても、自分では少しも食べないで、私たちに分けてくれました。そして少しのひまでもあると、私がおぶつてゐるあかんぼうを私からおろして、自分でおぶつて私にあそべと言ふのでした。

何だか私を一番かわいがつてくれるやうな氣がしました。

けれどもかなしいことには一昨年十二月床についてしまひました。前にうつしておいたおぢいさんの寫眞を大きなぐにしました。それを見た時この顔のやうな元氣な顔がもう一度見られ、ばよと思ひました。そしておぢいさんの顔を見ると、かなしくなつて庭へ出てしまふ事もありました。

昨年七月七日ちやうどたなばたの前のはんなくなつてしまひました。私は青くやせてしまつたおぢいさんの顔とがくとかわるがわる見て泣きました。

今でもがくを見ると、おぢいさんを思ひ出してかなしくなる時もあります。

## 父のけが

千葉縣印旛郡旭尋常高等小學校

尋五 中 臺 二 三 男

先月の十四日の晩の事であつた。

僕たちは、父が大和田へ行つてゐなかつたので、母とご飯を食べてゐると、正夫さんとこの小父さんが來て、

「今、このうちの大将（父のこと）が轉んで骨をぶつかいたから知らせに來た。」

と言ふので、僕たちはびつくりしてしまつた。母は、

「何うして又轉びなどしたのだらう。」  
と心配さうな顔をする。僕は、

「お父ちゃんにはあはて者だから、かけ出しでもしたのかしら。」

と思つた。今まで楽しくご飯を食べて居たのが急にさびしくなつてしまつた。正夫さんとこの小父さんはしばらく話してゐた。

其の中に父は歸つて來た。顔をしかめて、痛さうに手を頭へあてゝゐた。



「なんだ。ことづけしてよこしたのに迎へにも来ない。」  
と父は言った。

父は今日、大和田まで用たしに行つた。そして四街通まで歸つて来たが、停車場の前で持つてゐた杖につまづいて轉んだ。その拍子に運悪くコンクリーの道に肩をぶつけて骨を折つた。然し父はそれを知らずに起き上つて、落ちた帽子を拾ひ、肩に手を當て、見ると、肩が段違ひになつてゐるので、驚いて骨つき醫者の所へ行かうとした。そこへちやうど正夫さんとこの小父さんが通りかゝつたので、ことづけを頼んだのださうだ。母は、

「醫者は居ないのかい。」  
とさくと、

「明日の記念祭の踊りに行つて居なかつた。」

と父は言った。そして正夫さんとこの小父さんに、

「すみませんが、呼んで来てくれませんか。」

と頼んだ。小父さんは提灯をつけて出て行つたが直に歸つて来た。停車場まで行つてそれから自転車で行つて来たのださうだ。

「御苦勞様でした。」

と母がお禮を言ふと、

「今行き違ひになつた所だつた。」

と小父さんは言つた。母が、

「ぢやあ、もうぢき来るでせう。」

と言つてゐるうちに醫者は来た。僕は、早くなほればいゝがなあと思つた。醫者は肩を見て、

「ああ、この骨ははすにかけてしまつた。これは下手な人がやると片輪になるか、なほつても五月位もかゝつてしまふ。よほど上手にやらなければよくなほらない。早くなほつても一月半位はかゝります。」

と言ふ。父は痛がつてゐる。醫者は藥箱をそばによせて、藥を出して肩にぬつた。それから小父さんにも手助つてもらつて、醫者と母と僕と四人がかりでそこをもんだ。醫者が骨を見つけてくつつける、と、こつんとはづれる。父は其の度に痛さうに下をむいてしまふ。僕は父の顔を見てゐられなかつた。母もほんとに苦しうな顔をして肩をもんでゐる。

正夫さんとこの小父さんは、九時の貨物列車の荷を下ろさなければならぬと言つて歸つて行つた。うちの中がひっそりしてしまつた。

母に寝なと言はれたので寐たが、寐ても父のことが氣になつてなかく眠られなかつた。

翌朝になつて母が、昨夜はあれから十二時過ぎまでやつてやうやく骨がついたので、板をあて、ほつたいを巻いて、醫者は歸つたと話した。父はよいかゝつて寐たさうだ。

その時から二十日ばかりたつたので、今では少しは手も使へるやうになつてゐる。



## 魚つかまへ

茨城縣稻敷郡金江津尋常高等小學校

尋五 高橋健一

私は泥まみれの手を、田の水たまりの中にゆるとさし入れた。すると  
がてん、がばがば、がば!

私は早合點して

「うまいぞ大きいぞ、まづまづゆつくり取らう。」

とひとり言を言ひながら、よく仕度をして手をさし入れると、今度は

がば、がばがばん、ばてんばてんと陸へはね上つてしまつた。それを一寸見た時、何のじょう大き  
かつた。私は誰もゐないのでかう口から出てしまつた。

「いいやろやろ、皆んな俺とつちもろぞいいやろやろ」

そして又手を入れると、今度は手へぐよぐよとぎつこがさはつた。私はそれを陸へかき上げた。

ざあ ざあ びちよびちよ びちよ

とぎつこどもは 嬉しさうにダンスでもするやうにさわぎ廻つてゐる。私はその中で大きいのを拾  
つて箆に入れた。後に残つた小さなぎつこは多分ひぼしになる事だらう、と考へるとかはいそうにも

感じたが、もつと先へ行くとらんと取れるだらうと思つて面どらくさくなつた。先へ行くと誰か歩い  
たのか小さな足あとが自分の足もとから、ぞろぞろと續いてゐる。何の氣なしにその小さい足あとと  
くらべて見ると、自分の足の方が大きかつたので思はずニヤリとして後をふり返つて見ると、曲りく  
ねつた足あとが自分の足もとへ來てゐる。深く入つたのはやはらかい所で、浅いのは少しかたへ所だ  
らう。

それからちよいと側にあつた小高い畠へ上つて、そこらに水たまりはないかと思つた。すると  
どぜう屋の下の田にあつたは あつたわ ちぎれ雲のやうにあつちにもこつちにもちよいちよいあつ  
た。其の時私は

「あつ そだ ようし」

とらなづいた。それはかうである。海保君等がどぜう屋の田にらんとゐるから今日取りに行く。  
行く! たつた二字です。この二字がずるいやうですが、私には大變都合が悪いのです。

「ちえッやんなつちやつたな、ひとりだからいいがな」

この私の心は皆さんも想像出來ませう。それで私は海保君等が來るまでにはあの所にゐる魚を皆ん  
な取つてしまはふ、とひどい事を考へたのです。それで私は箆に入つてゐる四五匹の泥まみれの鮎を  
ぢつと見つめて、一目散に駆出したのです。そして、ぐぢや〜と田の中へ入つて、一生懸命つかま  
へたのです。泥がはねようが、着物がぼつたにぬれやうが。―がば〜

突然大きいのが勢よく手にさはつた時、ハツとして足がふるふるやうでした。



「はははあ、つかまへちやつた。やるやる」と  
嬉しいので思はず聲がでてしまった。後で氣がついてなんだかひとりでにきまりが悪かつた。それ  
で今度は唱歌をうたへながら又取り初めた。その時突然

「健一、とつたかあ」  
と海保君の聲つづいて

「健一——」

晃君が向ふの道を駆足で来る。私は嬉しいのですけれども何んだか變な氣がしてならなかつた。

## 麻 ぬ き

栃木縣下都賀郡泉川尋常小學校

尋 五 大 鳥 子 三

やとひもくる、みんなそろつて麻島へ出かけた。男も女もみんな身輕な姿になつてやつてゐる。向  
の方でも、こちらの方でも、二三人で二十本ぐらゐ持つては

「おいしよ、どつこい」と、力をこめてぐつとぬく、その根の土を足でおとし、それを麻きりばう  
ちやうで切つてわきにおく。あせをぼたぼたたらしながら、よごれたうでと次郎さんがひたひのあせ  
をふいてゐる。麻島の中からは、むつと青ぐさい香がとんでくる。やつてゐる人の顔はみんな眞赤で

ある。

「さぞあつかうなあ」と、私は思った。

二段歩もある島がだん／＼とはかどつて行つた。お午のほうになつた。お午やすみには色々の話が  
でる。

「ぼんもすぐだなあ、あと五六日だんべ、」

「おめいはまた、今年もおんどとりか、きいきごゑでちやうしはずれのこゑだよ。」  
みんながどつとわらつた。



僕の夏休——繪日記

宇都宮市築瀬尋常小學校

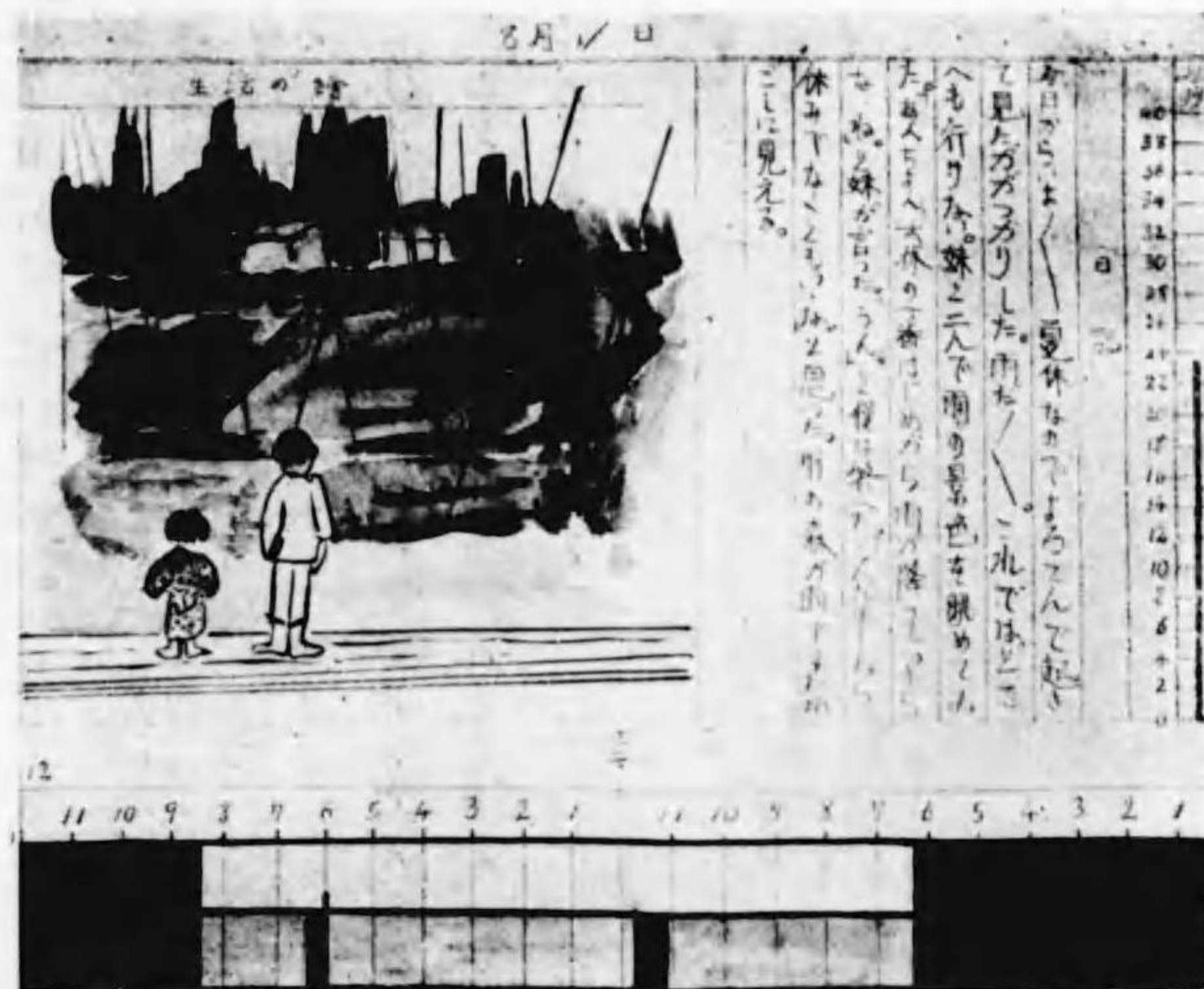
尋五 秋 元 實

八月一日

今日からいよ／＼夏休なのでよろこんで起きて見たががっかりした。雨だ／＼。これではどこへも行けない。妹と二人で雨の景色を眺めてゐた。「あんちゃん。お休の一番はじめから雨が降つてつまらないね。」と妹が言つた。「うん。」と僕は答へた。「こんな事なら休みでなくともいいな。」と思つた。前の森が雨ですだれ／＼に見える。

八月二日 (以下全部挿畫省略)

この日記をどう書いてよいか中々出来ない。昨日から心配してゐる。しかし今日はいくらかよく書けた。それは天氣が続いてゐて曇と雨が一寸あつただけだから。だが残念なのは今日ももう二枚無駄にしまつた。ほんとに先生にすまない氣がする。これからは一生懸命にやらうと考へてゐる。



八月三日

雨が降つてゐる。雨にぬれて大へんと思つたのだらう。前の家の屋根の杉皮がちよつとでてゐる所へ猫が雨やどりをしてゐる。何んだかさびしさうだ。僕はかはいさうに思つた。

八月四日

明日けんじゆつの試合だ。今日はそのけいこをした。すゞしい木の下で「おめん。」「こて」とやるのは氣持がよい。この分では明日はまけないぞ。明日が早くくればいいなあ。

八月五日

僕はきんぢよのきいちゃん・正ちゃん・坊や・僕・弟・友ちゃん・常ちやんとけんじゆつをやつた。「やあつ。」「やあつ。」かけると一しよに打ち合ふ。正ちゃんも仲々強い。僕も負けたくないから一生けんめい。しまいにはあせびつしよりになつてしまつた。兩方がへと／＼になつておしまひ。

八月六日

こう雨ばかり降つてゐると、物がじめ／＼して困る。又昨夜は前の家の人が「三十五年目のぼうふうがくるぞ」といつた。ほんとうだらうか。僕は心配でならない。

八月七日

昨日「三十五年目の暴風がくる。」と聞いて心配だつたが、

今日は何事も無い。この分ではうそらしいな。一日中くもつてゐてねむくなるやうな日だつた。

八月八日

僕は今日なんの楽しみもなくすごした。心はなんとなくしや／＼して来る。夜になる。ねる。つまらない事だ。今日僕は魚取りに行つた。あまり面白くなかつた。楽しみもなく。

八月九日

今日は日本晴だ。晴れると僕の心まで晴れる。よい氣持ださつそく魚取に行つた。今日は面白く取れた。十時頃の強い日光が四つでにふり掛る。ふなが三四匹も日光にうろこを光りかがやかしてゐる。

八月十日

家にゐてもあまりたいくつなので晝過ぎはばんばへあそびに出かけた。日光がかん／＼と道をてらしてゐる。砂利が白く光つて見える。生ぬるい風が吹いて来て氣持が悪い。とこやの店にはお客さんが氣持よささうに腰をかけてゐた。

八月十一日

夏の午後の日光が路ちを照らしてゐる。僕は方々のしんる



るの家へ御中元くばりをした。一ばん始めに小さい南へ行つたら、南では今ひるだつたのでたくさん人がゐた。これには僕も閉口した。皆んなで二十人ばかりゐる。それらの人が一月に六びやうの米をくふといふ。たまげたものだ。

八月十二日

朝から暑い夏の日だ。あまりたいくつなので十銭もらつてかぶきの教育映畫デーを見た。やきつくやうな午後だ。太陽の光線は強く地面をかん／＼と照らしてゐる。ふだを賣る入口には子供がたくさんあつまつてゐた。

八月十三日

一日中よい天気だ。暑い日だ。夜とうふやの正ちやんと、ぼんをどりを見に行つた。多くの人は元氣よくをどつてゐる。歌をうたふものもあれば、やぐらでは「どんどこ／＼とんどん」。氣持よく御本丸をにぎわせていく。見物人が周りに黒山のやうだ。

八月十四日

「こゝを通らせな。」言つて金ちやんの家の水車の前を通る。中庭へきて見ると武男さん・ちいちゃん・しげちゃん・安ちやんなどが水合戦をやつてゐた。武男さんが手で勢よく水をか

けると、あつといふ。こんどは武男さんが水をひつかけられる。だん／＼面白くなる。

八月十五日

お晝過ぎは雨ばかり降つてゐた。僕はどこへも出掛られないのでつまらなくてしかたがない。家の中で少年俱樂部九月號を見てゐた。外では雨がひつきりなしに降つてゐる。一人であるときびしい日だなあ。

八月十六日

夏の日だ。今日は水車の川ほしなので朝から川はにぎやかである。僕もすくつた。とつたのは、さこ一匹、なます一匹、ぎんぎよ二匹、がながら二匹、全部で六匹取つたわけだ。うなぎをすくつてあみの中から「すうつ」とにげられた時はがっかりしてしまつた。今でもうなぎの形が目につる。

八月十七日

午後の雨上り。まだ黒い雲が動いてゐる。やがて雲の間からびか／＼と日光がさした。まだぬれてゐた草や木や、屋根をてらしてゐる。僕の心までびか／＼と光るやうだ。

八月十八日

宇都宮いきから上野いきまでのきつぷを買つた。汽車に乗

つた。さて東京へ来て見ると大へんにぎやかである。電車が رفتつたと思ふと自動車がかかる。自轉車がかかる。巡查が「とまれ。」進め。」大聲はりあげてゐる。目が周りさうだ。

八月十九日

今日は東京大久保の人と國技かんに行つた。雪が降る。氷すべり。「すう、さらさら／＼」雪が降る。そばへ、いつて見ると、せんぶうきに掛つたよりすずしい。氣持よし。外のかこひまで氷で出来てゐるのはことに宇都宮などない。

八月二十日

今日も又續けどほしに東京見物した。遊就かんのよろひ・刀・けん・乃木大將の洋服・明治天皇の御めしもの、又よしつね、よりともらのよろひなど、又飛行機など珍しい物はかり。武田信玄のよろひ、加藤清正のはたなど見ては勇しくなつた。

八月二十一日

夏の日だ。暑い／＼夏の日だ。温度だつて三十度だもの。太陽はかん／＼と下界を照らしてゐる。にこ／＼しながら「今日は一日天氣にしてやるぞ。」と。太陽がありがたいな。だが暑いにはへいこうだよ。

八月二十二日

友だちもない。外は暑い。いやになつちまふなあ。本を読み始めた。だん／＼面白くなつたので一日中本ばかり見てゐた。ほかには何んにもない。

八月二十三日

せみが鳴いてゐる。今晚は大久保館に行つて活動を見る筈だ。夕方になつた。なんだかばかにねむたい。だが活動にも行きたい。「そんなにねむいのに行つたつて仕方がなからう。」と言はれて思ひきつてねてしまつた。

八月二十四日

大久保館の活動見に行つた。實にゆくわいである。あ鐵血だんつうのの橋の上でしよいなげ「どしやん」と川の中へ落された。僕がなげたやうに氣持がよかつた。

八月二十五日

今日も東京見物だ。高い大きい家が道の兩がはにすうつとならんでゐる。この家は宇都宮の下野新聞社より高いだらうか等と考へて見た。僕はきよろ／＼しながら歩いてゐた。家へ歸つてくると眼がへんだつた。

八月二十六日



「今日は傘のふくろはりを手傳つてごらん。」とをばさんか  
らいひつかつた。お客さんの僕もさう毎日あそんでばかりも  
ゐられない。はだかになつて手傳ひをした。始めの中は心配  
だつたが、やつて見ると、思ひの外やさしい事だ。

八月二十七日

東京から宇都宮へ歸つた。「宇都宮。」えき夫の聲に久しぶり  
で宇都宮の地面をふんだわけだ。夏の光が方々の屋根をてら  
してゐた。あゝあの汽車がなつかしい。

八月二十八日

今日こがのをばさんが来たのでばんばへ行つた。第一ばん  
に二荒さんにさんけいした。をばさんは手を合せて一生懸命  
におがんでゐる。僕もだまつておぢぎをした。

八月二十九日

古河のをばさんが歸るといふので停車場まで見送りに行つ  
た。お客さんがかへるのは何んだかへんな氣持だ。今日は大  
へんつかれたので、早くねむつてしまつた。

八月三十日

今日も水あびのけいこに行つた。もうすゐぶん泳げるやう  
になつた。僕はうれしく無やみにおよいで見たい。この分  
で田川位およげきれると思つてゐる。

八月三十一日

夏休も今日きりだ。あしたは一月ぶりであの學校へ行くの  
だ。皆んなは眞黒な顔をして學校へ出て来るだらうか。僕は  
この休中東京へ行つたが組の人はどこへ行つたらう。行くと  
いろ／＼面白いお話もあるだらう。休みが終へるのはつまら  
ないが何んだか早く學校へ行つて見たい氣もする。

## たのしい御大典

奈良縣磯城郡櫻井尋常高等小學校

尋 五 鴨 鳥 ノ プ

今年は何といふ御目出度いうれしい年でございませう。

四方の山々がみんな紅色に染まる頃、あの神々しい京都御所におかせられました盛大なる御大禮の  
御儀式が行はせられます。私等は此の有りがたい御大禮の御式を眞心こめてお祝ひ申し上げなければ  
なりません。凡ての日本國民は此のうれしい十一月をどんなに待ち遠い事でございませう。十一月こ  
そ私たちの天國でございませう。その天國の花ぞの中を遊びたわむれる子鳥の様にゆくわいにたのし  
くお迎へする月でございませう。としよりも、若いものも、いいえもつと／＼野べの草木、そして凡べ  
ての動物が、たのしい御大典をむねにひめてほほえんで居ります。私は今東からのぼりそめる赤い赤  
いお日様に、御大典をたのしくむかへられる様においのりをいたします。



## 一秒間

三重縣宇治山田市厚生尋常高等小學校

尋五 瀧 利 民

だるさうだ。持物が重さうに見える。彼等は砂をけつて歩いてゐる。實にだるさうである。僕も父も其の中の一人だ。今多くの大人や子供が海水浴を終えて歸る途中である。僕は海の方を振りかへつて見た、未だ多くの人々が泳ぎ遊んでゐる。

持つてゐるバスケットが、往きの時より重く感ずる。それは中の物が水分をふくんだ爲でもあらうが、それよりも身體の疲れの爲にさう感ずるのであらう。

「瀧君……。」突然後から聲がかつた。ふと振り向いて見ると、宇仁田君が女持ちの大きな蝙蝠傘を持つて立つてゐる。姉さんを待つてゐるのだらう。僕は莞爾と笑顔を見せた。宇仁田君も莞爾と笑つた。前を見ると父がもう叢一つ向ふの白い道で僕を待つてゐられる。「これは……。」と思つた時、僕の足元に砂煙がたつた。と、同時に茶色のしほれた花のつつじや、緑色の小さな草等が、ほんの一瞬間であつたが、眼下に展開した。再び足元に砂煙がたつた。ちやうどその時バスケットの角が右足の膝へゴツンとぶつゝかつた。「チツ、チチ痛い。」……お父さんは平氣で「飛ばなくてもよいのに……、ちやんと道があるぢやないか。」と言はれたが、矢張り痛い。僕は残念で仕方がなかつた。

つた。

途々父が「先刻のは誰?。」とお聞きになつたので

「宇仁田君……。姉さんと一しよに來たのだらう。」と答へた。父と僕は白い砂煙をたて、停車場に向ふ。父が「利民、ことによると三時半の汽車に乗れるかも知れない。」と言はれたので(豫定は四時二十六分二見發の列車)父に「今何時……。」と問ふと、父は「えー、三時二十八分……。」乗るのだつたら走らねば間に合ふまい。」とおつしやつた。「さうしたら後二分。お父さん走らう……。」父と僕は四十……否五六十米ばかり離れた場所から、バタ／＼と走りだした。

機關車の先が見えてゐる。早や降りた人の姿が改札口に見えて來た。もう四十米ばかりで驛だ。此の驛は停車時間がわづか一分である。……もう凡そ三十米……、もう二十米……、十米……やうやく驛内に這入つた。

走りながら驛の時計を見ると、今正に三時二十九分三十何秒……。幸ひ二人とも往復切符であるので、すぐ改札口を通りぬけた。改札をする人が「もう後二十秒」と言つたのが氣にかゝる。地下道の段を下り、再び段を登りはじめた時、「おい、もう乗り後れだ。乗るのなら早く……。」見ると汽車を降りた二三人の大人、悠々として僕の登る段を降りて來る。何とかブツブツ僕を嘲る様に言ひながら……ふと後を振りかへると父の姿が見えぬ。「ハッ。」と僕は頭から冷水を浴びせられた様に感じた。……次の瞬間、僕は「お父さん。」と呼んだ。父の姿が僕の登つて來た段の下に見えた。其の時發車合圖の笛が「ピリピリピリ……。」お父さん、早く……。」僕は無我夢中で叫んだ。……危い



所で僕と父は乗ることが出来た。……汽車は動かぬ……。再び車掌の笛が鳴った。汽笛一聲汽車は轟然と動き出した。二見の町を後に……。

たゞ一秒……。その一秒がどんなに我等を驚かし、又救つてくれたか。たゞ時計の振子が、コチツ、コチツと左右に動くそれだけの間ではあるが……。

## と け た 心

静岡市師範學校附屬小學校

尋 五 北 村 よ し 子

ふとしたことから三人の氣が合はなくなつてしまいました。

私も氣持がわるく、あやまらう、あやまらう、と思ふのにどうしてもいつもあんなに、仲よくしてゐたお姉様、やさしいお姉様なのに「ごめんなさい」といふことが出来ませんでした。私は心の中でどんなに、どんなに、なげいたことかわかりませんでした。出さうになつてもどまできると、どうしてもつかへてしまふ。

何がこんなにおさへてしまふのでせう。私のあやまらうとする心を恥かしさがきつとおさへてしまふのでせう。

私はたゞ、いつもやさしいお姉様とこんな事で氣を合はなくしてしまつた事が、おそろしいおそろ

しい心火事と思ふ、なんだかほしをつたふなみだがとまらないのでした。

心の火事は人には見えないでせう。でもその心が姿に現はれた時はどんなにみにくいものでせう。心の中におこる小さな火事は、やがてその人をやき、大きくもえてゆくお話を、わたくしが小さい時日曜學校でうかがつたことを思ひ出します。

こんな事をした時、なほ自分のおそろしい罪のことが澤山考へられてくるのでした。

あゝそう、お母様のお言葉に、私達兄弟は五人ですから、五本の指で一本不自由をしたら五本ともものくるしみでせう。

一本のさすは五本のさす、どの指とくべつなく、そして五本がお互にたすけ合つて用をしたなら、なんでも出来てゆくでせうと。

私は一番小さい小指、小指でも五本の仲間として、立派に役立たせていたゝかなくてはすまなかつた。早くおわびをし様と、一人三疊の間でペンをとりました。

「お姉様、やさしい中指と紅指のお姉様、かんにんして下さい。小指の私はほんとにわるいことを云つてしまいました。わたしは自分の心をつくつく考へてなぜこんなきない心がおこつたのでせう。わたしが、一つ年をとる度に、心もよくなつて行くはずなのに、のびる心はよいことが少いのですもの

これから、きれいな水を心にやつて、美しくのびてゆくことに、つとめます。お姉様方も、いろいろお教へ下さい。もう今度は、清々した心持になりました。あやまつて……。あの雨の後のはれて



氣持のよい日のやうに。

お姉様二人に

と書きました。

よし子

其の夜はいいお月様でした。神々しい姿と、自分の心がくらべられてたまりませんでした。わたしはお姉様からのお返事をたのしみに早く安らかな、夢の國にゆきたいと、床につきました。

あやまつた後の清々しさは、まもなく私をまどろませてくれました。

あくる日の事でした。小さいお姉様が、

「よし子ちゃん、よし子ちゃん」

と言つて、私をお庭につれてつて下さいました。

「ねえ、よし子ちゃん、かんにんしてね。それからこれね、大きいお姉さまのお手紙よ。」

お姉様のお聲はかすかにふるへてゐました。私の目からも亦涙がにぢみ出て、よくよめませんでした。そのレターペーパーにはなんとやさしい文字があらはれてゐたでせう。

よつちゃん

あなたも泣いてゐたのね。私はあなたたちの心を思ふ時、私のいぢけた心をどうしてあやまつていかかわからなくなつてしまふのです。

ね、よつちゃん、仲よくしませうね。そしてこんな姉さんでもなんでもいつてちやうだい。姉妹だもの。そしてみんなえらくなりませうね。心が立派になつたらいつも清々したよい子で居られるで

せう。そしてお父さん、お母さんが安心なさる様にしなければすみませんね。よつちゃん達はいつもきつと一人であるではないでせう。そして悲しい時だつて決して一人では悲しんでゐるのではないの、わかるでせう、私達は力を合はせて少しづつでもいゝ心を持つようになりませうね。

今日のおくりもの、心からのおくりもの、あれをみるたびに、いゝえ、今晚のお互の涙をして目に見えないけれどなんともいはれない感じ。そしてバンド、エンゼルと、白い象、私共の胸にしませうね。むねのおくらに。

ではきつと、仲よくね、きつと、いつて、私にわらう心をおこしたら、あなた達しかつてちやうだい。こわくはない。決して、正しいものはいつとも勇氣が入り用です。

もう今頃ねてゐるでせう。何んのゆめかしら。

可愛らしい

姉より

よつちゃん

私はしばらくじつと心をしづめてゐました。姉と妹との心のとけ合ふ、あたゝかい感じをわたくしはつくづく尊く、うれしく味はせていただけました。そしていつまでも、こうして仲よく、一日、一日を、よろこびに迎へよろこびに送ることが出来る様にと自分に念じました。



山梨縣北巨摩郡小淵澤小學校

尋五 宮澤 テル子

二三日前のことであります。私は學校から歸つて、ひさしぶりで圖案を書きました。丁度二枚しくじつて、三枚目にやうやく上手に書けましたので、それはく大喜びで、えのぐをぬらうと思つて、本箱へさらとえのぐを取りに行きました。歸つて來てほんとうに驚きました。それは私のるすに今年三つになる妹が來て、私のやうやく書いた圖案をくしやくにまるめてしまつたのです。

だがいくら力を落しても仕方がない、何も知らない子供のことだからなあとあきらめてゐましたがふと一つ妹に世話をやかせようといふ、つまりぬ心を起しました。そして私は其のまゝ机にうつぶして泣くまねをして、指の間からそつと妹の様子を見てゐると、妹は悪い事をしたと思つたのか、今にも泣きそうな顔をして、くしやくにしたづがの紙をながめてゐました。

私は悪いことではあると思つたが、一段聲をより上げて泣いて見ました。すると妹はこまつた様な顔附きをしてだまつて奥の方へ行つてしまひました。それから二三十分間は圖案でむ中になつてゐましたが、ふと妹のことを思ひ出したので、そつと足音をしのばせて奥へ行つて見ましたが、奥の間は

しんとしてゐて物音一つしませんでした。ふしぎに思つて妹は何所へ行つたのだらうと、あちらこちらをさがしましたが見當りません。おしまひにそつとおし入れの戸を明けて見ておどろきました。

妹はふとんの上になつておぼろしく眠つてゐたのです。目の周りがうるんでゐるばかりか、ふとんまで涙でぬれてゐました。

其の時私は妹がかはいそうになつて來たので、眠つてゐるすみやんに、小さな聲で

「すみちやんかになね」と、言ひました。そして又新に書きつゞけてゐると、妹がねごとのやうに

「ねえちやんかになよう。ねえちやんかになね。」

と、二三次つゞけざまに言ひました。

私はつくづく悪いことをしたと思ひました。

### 鶏肉を買ひに行つた時の事

岐阜市白山尋常高等小學校

尋五 山口 貞一

お母さんが

「貞一鳥肉を買つておいで。」

とおつしやつたので出かけようとする時、



「なるべくよいところを。」

とおつしやつた。電車賃を貰つて弟をつれて伊奈波から電車にのつた。郵便局前で降りて「鳥精」へはいつた。

家の中はぶーんと血なまぐさい空氣がたゞよつてゐる。

「上等三十錢。」

と言つた。

はかりのそばにはやはらかい肉や卵の様なのがある。羽や皮をはがれて死んでゐる鶏は青くなつて手足をだらんとたれて居る。人間がこんなに皮をはがれたらどんなであらふと思ふとぞつとずする。表の籠の中で鶏がきゆうくつそうにこつこつとないてゐる。僕は

「かはいそうにもうじき殺されてしまふんだ。」

と思ふと同時に

「なぜ人間は野菜でがまん出来ないんだらう。肉なんか食べずに。」

と思つた。此所の主人は殺されてぶら下つてゐる鶏を下して腹のあたりをぶすりつとつきさした。血がかたまつて出て來た。とても其の場面は見てゐられない。僕は思はず顔をそむけた。肉を切つて目方をはかり、ついで

「はいどうぞおまたせしました。」

と言つてくれた。

いそいで電車に乗つた時ほんとに鶏がかはいそうでならなかつた。人間はなぜ罪も無い生物を多く殺すんだらう。家へ歸つてしばらくするとじりじりつと鶏のあぶらのとける音がしてゐた。

## 土蜂掘り

長野縣諏訪郡北山小學校

尋五 篠原 耐 二

夏休の或日本晴のよい天氣の日の事であつた。空にはとんぼがまるで僕等が野球でもして居るやうに面白さうに一ぱい飛んで居た。

其の日私と見さんとお辨當をしようつて土蜂掘りに行つた。坂上からお宮の方を見た時お宮のわでの方の栗の木に栗が一ぱいなつて居るのが目に見えた。見さんに話すと「今年は栗のなつた年だ」と言つて又あるき出した。栗平の坂を上ぼつて一家屋の所を通つてだん／＼上ぼつて行つて僕の家の中山と言ふ水掛の所にかひつける事にきめた。先づ辨當をしろして木にしばらくつけた。見さんが「とんぼを五匹取つてこい」といつた。取つて來た。蜂をかひつけて一番先の一回はま綿をしばらくつけなうやつた。二回目の餌をこしらえて居ると蜂が來てぼうになつた。さあ來た一回で見つけてしまえと見さんが言つた。見さんが餌をぼうの所にやると蜂はすぐそれにくひついた。しめた物だと言つて放した。蜂は始は見さんの手の平で、ま綿をくひ切つてゐたのでま綿を廻すと蜂は一だん高くまひ上つて



水掛の向ふのかやで出来てゐる廣い土手の所に急におりた。行つて見るとなる程其所にあつた。へま一つ巢だ景氣はいゝ物だと僕が言つた。場所へ歸つてえんしうを持つて來た。火をつけた。えんしうがおひると見さんが、かまで土手をまるく切つた。そしてそれをおこして見るともう蜂はよつてころになつてゐた。さしわたしが二十五cmもある位な巢でした。もうお晝頃だつたのでお辨當を食べた。食べて一休して又蜂をかひつけに見さんが行つた。又かひつけて來て一回目は又ま綿をくはせなんでやつた。今度は遠の蜂かなかくこなんだ。すると其の中にも來た。見さんが餌をやるとそれに飛つた。それ又しつかり追よと見さんがいつた。今度の蜂は、先ののより早くまひ出した。川をこえ、やぶの上を通つてなか／＼おりなんでもう／＼なくしてしまつた。又來て餌をこしらえてゐると來た。「やい早くこしらえろ」と私が言つた。こしらえてやると又飛つた。今度はめつけろといつて放すと又まつてさつきと同じ所をまつて行つた。また蜂をなくしてしまつた。又歸つて來て餌をこしらえてゐると來た。くひつかせて放してやつた。すると、又同じ所をまつて行つて向ふの落葉松の土手の所えおりた。又一つの巢景氣はいゝものだといつて又歸つてえんしうを持つて來て又掘つて來た。へま二つ巢掘ればいゝに家えいじやといつて歸つて來た。家へ來たら誰もいなんだ。

## 月の明るい夜

宮城縣仙臺市片平町尋常小學校

尋五 阿部美知子

青いやうな月の光が靜かに流れてゐます。

「あらきれいなお月様ね。」

「ほんとにね。まるで銀いろの鏡のやうだわ。」

私たちは二階の手すりにもたれて、あたりを、眺めてゐました。

妹や弟は安樂椅子にかけられたお父様の手にぶらさがつて、いろんな事を言つてゐます。

空には美しく澄んだ何だか心がありさうなお月様が光つてゐます。

あのお月様にも、やつぱり地球のやうに山も川もあるのだと思ふと、何だか不思議なやうな氣がします。

「あらみつちちゃんの影があんなにおほきいわ。」

妹は不意にとんきやうな聲を出しました。

「ちいちゃんだつて。」

私は月から目をはなしていひました。



お父様がへんな形をすると、影もへんてこにうつつた。  
「まるでおばけみたいね。」

妹はにこ／＼笑つてゐます。

時々涼しいそよ風が吹いて来ると、妹や弟は

「おほ涼しい。」

と言つては喜んだ。

櫻の葉は月の光でうす白く見えましました。

廣瀬川は静かに音をたて、流れてゐます。向の川岸には人が立止つて、川の中を見てゐます。お月様はきつと、あの美しい姿を川の中にうつしてゐるのでせう。向の大年寺の山々は静かに、じつと、物を考へてゐるやうです。

「あたしも寝るわ。」

妹は言ひました。

「そう、そんなら階下へ行きませう。」

私はかう言ひました、けれども又あの空を見上げました。空は廣く美しかつた。私は夢の中にあるやうな、何とも言はれないよい氣持になりました。

空はどこまで廣いんだらう。空にはどんなにいろんな物があるだらう。あのお月様もお星様もみんな空の上にあるんだ。私はこんな事を考へました。

「早く行きませうよ。」

妹が言つたので、私はやうやく空から目をはなしました。

床にいつてからも、二階で見たあの涼し静かな景色が目の前に見えて来るやうな氣がしました。

今もお父様が一人でお月様を見てゐらつしやるかしら、お月様はやつぱりやさしく美しく光つてゐらつしやるかしら、などと思つてゐるうちにいつか眠つてしまひました。

## 磐梯登山

福島市福島第二尋常小學校

尋五 晶

榮

僕等の少年團は、キャンプの一日を利用して磐梯山に登つた。先づ、若松の町から、土津神社に行つて参拜し、そして、登山口に向つた。金山口の側の家で、金剛杖を賣つてゐた。僕等は、この登山口から登つた。少し行くと、まがりまがつた坂道が、足もとからうね／＼とつゞいてゐて、僕等は、やがてしげみの中に入つた。むされる様にあつく汗は瀧の様に流れる。きりがわいてきた。まもなくきりがはれる。又白まくを引く様にきりが来た。ふと先頭の方で、馬返しだと叫ぶ聲がした。僕等は急に勇んだ。やがて馬返しについた。そこで一休みして又出だした。きりはますます深くなる。しかし僕等は皆元氣で一生懸命登つた。やうやく、一合目天の庭についた。それから二合目三合目と過ぎ、



一時間もかかつてやうやうのことで四合目弘法清水についた。僕等はここで晝飯を食べたり清水を飲んだりした。清水の前の立て札に攝氏六度華氏三十六度と書いてあつた。

ここで一休みしてゐる内に、あの深かつた霧も、いつのまにかだん／＼うすくなつて、時折りはからつと晴れてくる。さあこの時と勇みに勇んで出發した。四町半ばかり登るといよいよ頂上についた。下を見下ろすと、目下に五色沼や檜原湖小國沼などが繪の様に見える。遠く白雲の上には吾妻山の高峰さい見えて來た。天狗岩も見え出した。この壯大な景色。この壯快な氣持。僕等は只々兩手を舉げて我知らず萬歳と叫んだ。

## 僕の郷土

岩手縣下閉伊郡宮古尋常高等小學校

尋五 福 徳 正

宮古／＼何と云ふよい名だろ……。これが僕の郷土である。

西は閉伊川、街道によつて盛岡市に連なつて、南は山田町、北は田老、東は宮古わんをへだて、太平洋にのぞんで居りますから、いろ／＼な、海産物がたくさんとれます。最も、とれるのは、いわし、かつを、まぐろ等であります。大漁の時に、大漁旗を立てて、大漁歌をうたつて、港へはひつて來るのは、何ともいはれない見ごとなものであります。

其の時は、男も、女も、夜も、晝も休むひまもなくいそがしくあります。此の魚は、自動車や、冷蔵船で、盛岡市や、東京方面に送られます。

今年の春からは、ていき船がさんばしによこづけになつて、大そうべんりになりました。小學校は二つあつて、水産學校も、女學校もあります。

夏の朝、早く起きて海のかなたから、まんまるい朝日がきら／＼と上ぼるのは、何ともいわれないよい心もちがして、宮古に住んで居るのが、ほんとに幸福だと思ひます。

## 鈴木君

青森縣東津輕郡小湊小學校

尋五 本 堂 寛

鈴木君は僕と同級です。顔は長く目は圓く大きくてせいの高さは又級中第一です。そしてほんとうに、かつばつで元氣でいつも先生から男らしいと言つて、ほめられます。

過ぎ去つたことを思ひ出して見れば私と鈴木君の仲がいろ／＼頭に浮んできます。一年生の時に僕と鈴木君と同じ机に竝んであさらひをしました。其時どうしたものか毎日のけんくわなので、先生にはなされてしまいました。或日鈴木君がころんでいたくしたことがあります。其の時僕は「いいあんばい。はらんばい。だんごのしよ。」といつて、はやしましたら鈴木君は泣きながら僕へかゝつてきま



した。僕はかゝつても負けるものだから一もくさんに逃げて、とうとう鈴木君をのがれました。其のあくる日僕と五三郎君とけんくわをしました。僕は負けさうになつたので、思はず強い鈴木君を思ひ出して、鈴木と呼びました。其の時鈴木君が走つて来て僕を助けてくれました。此のやうに毎日けんくわをしました。又とても仲がよくてありました。今ではめつたにけんくわをしないが一年や二年の時よりも、ずつと仲がよくりました。僕は何と言つても鈴木君を大すきです。

## 父さんの釣り

秋田縣鹿角郡小坂尋常高等小學校

尋五 村 井 章

僕がふと目を覺ますと 家中がざわ／＼音がするので 見ると父さんが、魚釣りに行く所だつた。何所へ行くかと聞くと 側で母さんが『東京へ行くのさ』と 笑ひながらおつしやつた。僕はじよう談だと思つたので『じよう談でせう』と言ふと さうですと笑つていらした。僕は知らずにまた目をつぶつてあつた。するとガタ／＼といふ音がするので見ると 父さんが來られた。聞くと豊口の店の前まで行つて待つたが 誰も來ないから戻つて來たと言つて 悲觀された様な御様子でした。そして釣の服を脱いでゐると、『村井さん』といふ聲がした。同時に『はい』と言ふて室を出て行かれた。

すると『行きませんか』と いう聲『さあ』といふ聲も聞へて來た『じや行きませう』と、いつてにこ／＼してはいつて來られた。『豊口の所で待つてゐますぜ』と いふ聲が聞える。父さんは急いで又服を着て出て行く所だつた。母さんが『戸を閉めてお出で』といつたので 出て行つて閉め様とすると、父さんが門の所まで行つて 此方を見て『行つて來るよ』といはれた。雨が少し降つてをつたので かつばのような物を着て かぶつたあまひこが少し小さい、その上夏帽子だつたので たいそうわきが廣がつて見え 又その上物を手に持つてりゆうくさつくを背負つてゐたから 何だかどろぼうか何かのように見えた。

父さんが見えなくなるとすぐに戸を閉めて家にはいつた。其夜僕は一つの籠に鱒が五匹はいつてゐて もう一つの籠には一匹のたゆめを見てゐた。翌日の夕方父さんが未だ來ないので 心配になつて出たり入たりしてまつてゐた。長い夏の日もすつかり暮れてしまつた。父さんが來たらをこしてもらふ約束して床についた。

僕の肩を引張る者がある『父さんが來た』と いはれて もつくり起きあがつて 流場の方へ行つて見ると 大きい鱒が澤山置いてあつたので、何匹取つて來ましたかと聞くと、五十匹からあるといひました。

僕はしつかり眼を覺まして仕舞つて 釣る時の事をお聞きした。先づ石油罐の中に魚の腐つたのや色々な物を入れて湖水の中にその罐を入れると、小さいえびが澤山はいる。このえびをいち／＼皮をむいて、針の先につけて釣るのだと 教へて下さいました。お話を伺ふと僕も急に十和田湖まで行つ



て釣つて見たくなりましたので、次の日曜日に連れて行つてと願つたが、今度々々といつてゐられるが仲々連れて行つて下さらないで今朝お聞きしたら、なんのこと來年でなければ行かないとの事で、僕はがっかりしてしまへました。

## ひるから

福井縣吉田郡上志比尋常高等小學校

尋五 淺野 幾夫

雨がしよぼ／＼と降る日の晝から一生懸命に勉強してゐると、わけの知らない今年六才になる弟が來て、昨日買つてもらつた算術帳に大きな人の顔を書いて、だまつて行かうとした。

僕はそばにあつた本で、ものもいはずに後から弟の頭をばしつとなぐつた。弟は「わつ」と大きな聲を上げて泣きだした。

泣かすつもりでなぐつたのでないから、又しかれると大へんだ。お父さんは何處に居るかと思つてそつとしやうじの間から店を見たが、さいはひ店には誰も居なかつた。ほつとしたが、お父さんが來ると又何時かのやうにひどくしかられる。どうかして弟を笑はせてやらうと思つて面白いことをして見せたが、なか／＼笑はない。僕はほとんど困つてしまひには、お父さんの帽子をかぶつてしりをふり／＼へんなかつこをしてあるいた。弟は急に「ハアハア……」と笑つたので、僕も思はず「アハ

ハ……」と笑つた。

僕の心は何だからくになつた。弟はやがてはたにゐるお母さんの所へ行つてしまつた。

僕は勉強を始めた。

しばらくすると、店の方で足音がしたのでひやりした。「お父さんかしら」と思つてびく／＼しながらしやうじを指につばきをつけてすこしやぶつて店を見た。するとそれは弟であつたから安心した。弟は桃をうまさうにたべて居る。ほしくてたまない。しかし泣かしたのだから「一つくれ」といはれない。だまつてこらへてゐると、弟は中へ入つて僕のそばへ來てなほうまそうにたべてゐる。僕はたまらなくなつて「少しくれ」といつたら「いや／＼」といつて外へ出て行つた。

先に泣かさなかつたら桃をくれたのに、短氣を起して悪かつたと思つたがもうしかたがない。僕は力なく机に向つて勉強を續づけた。

## 室堂の一夜

石川縣女子師範學校附屬小學校

尋五 吉田 進

これ程澤山着物を着こんでも、ヂクヂクと一種異様な寒さが身にしみる。此所は白山室堂の一室、石を積んで固めた壁、小さな高い窓。それが何となく原始的な感じをいだかせる。そして此所が海は



つ九千八百尺、文明といふものから、ぬけ出し、大きな自然といふものにいだかれてゐるといふ感じがピンと頭にひびく。

眠らうと言つたつて眠れない。色々なことが頭を通り過ぎて行く。隣の室のがやつく聲がばかに耳にひびく。……………

いつの間に眠つたかわからない。目をさました事はたしかだ。時々まきの火がヂリ／＼と不快な音を立ててもえ上る。うす暗い、舊式なランプの油がトロ／＼ともえて、室の中をぼんやりと照らしてゐる。

まだ早いらしい。僕は重い戸をひきづつて外へ出た。

ひゆうーと寒い風が耳をかすめた。空にはチラツチラツと星がまたゝいてゐる。雲がちぎれるやうに飛んで行く。

## 夏 休 み

石川県金澤市味噌町尋常高等小學校

尋 五 鈴 木 和 榮

茂り合つた青葉のかけでヂイ／＼蟬の鳴く此の夏休みの一部分を私は東京ですごした。

ポーといふ汽笛の合圖で上野驛へ着いてから私にはすべてが珍らしかつた。あのシャンデリアの輝

く銀座の通り、あの高い三越のバルコニーに上つて見た廣い東京市街の眺め、私はすべてが夢の様に思はれた。今尙頭にはつきりときざみつけられてゐるのはあの神々しい明治神宮である。静かに自動車ですべるコンクリートの参道のその兩側は樹木が生ひ茂り石橋の下には清水の様な美しい流れがあつた。

道は白い小じやりが一面にしきつめてある。大きな鳥居をくぐつてふと目の前を見るともう拜殿であつた。美しい水で手を洗ひ口をすすぎ心から参拜した。神々しさにうたれた私は自然と心が清くすみ切つてゆく様に感じられた。明治神宮にお参りしたことはいつまでも忘れられない思ひ出である。

## 立 山

富山縣高岡市下關尋常小學校

尋 五 正 村 敏 三 郎

立山の空に聳ゆる雄々しさに  
ならへとを思ふ御代の姿も

嗚呼なんと氣高いお歌でせう。私はいつも前の庭に立つてあの青空高く聳えたつ立山や劔山を眺めては、いつかあの山のあの雲の上まで上つて見たいと思つて居た。そうした時にはきつと此のお歌を高く歌ふのであつた。



丁度昨年の夏、お父さんや兄さんと立山に登り、三ノ越のお歌の碑前で、神官から色々とお話を聞いてからは、一層お歌と共に立山がなつかしく思はれる。此の頃朝夕はるかに立山の霊峯を望むとき私の體には自然の強い力が湧いて来る。

あゝ立山。私の立山。

立山は昔から名山として世間に知られてゐるが、殊に近年日本アルプス登山熱が盛になつてから、中でも秩父の宮様が雪の立山ヘスキ―をかつてお登りになつてからは、一段と其の名聲が四方に擴つて年々登山者はおびたゞしいものである。朝日があかあかと雄山の社頭に照る時、三千米の頂上に立つて近くから遠くへ、遠くから更に遠くへと限りもなく打ち續く山の波を見た光景、實に壯大なものである。

こうした立山を中心に、國立公園の計劃あるを聞いては、郷土のほこりを喜ばずに居れない。

今や昭和の大御代。而も今秋天皇陛下は尊き御大典の禮をあげさせ給ふ。陛下がかつてお詠みになつた立山のお歌、此の空に響ゆる雄々しさに習ひながら我等は常に智徳を磨き、昭和の大御代の姿の將來幾年も重ねて、いやましに榮えまさんことを此の目出度き秋にあたつてお祈りして止まないものである。

## イ　ン　キ

鳥取縣西伯郡高麗尋常小學校  
尋五　古　志　仁

『ハッ』と氣がついた時はもうおそかつた。

疊の上には青いインキが次第々々にひろがつて行く。僕は此の疊はまだ新しいのだと思ふとよけいにしかられるやうな氣がする。

僕はそつとインキをぬぐつて見た。青いインキは手のひらについて又疊の上におちさうになつたのでいそいでえんがはへでて手をふつた。すると青いインキの粒は飛んで行つて向ふの眞白な壁に二ツも三ツも一しよになつて、斑紋を表した。『しまつた』と思つたが仕方がない。いそいで雑巾で、ごし／＼と疊をふいて大方みんなぬぐつた。

そのかほりに向ふの壁にはインキの粒がべた／＼ついてゐる。

今しも沈まんとする西の山の赤い夕日が壁を照しそこに青いインキのあとがてん／＼とのこされて見える。



## 御大典を祝し奉る

廣島縣吳市岩方尋常小學校

尋五 稻垣忠子

大阪毎日新聞に入れられて來た兩陛下の御尊影を、母がお床の上に掲げて下さつたのは今年の五月の事でした。其の日、學校から歸つた私は、思はず禮拜しました。

五年になつてから國史を習ふやうになつた私は、天照大神のお話を聞いて、天皇陛下はあんな立派な神様の、御あとつぎでいらつしやるので、御徳が高くていらつしやるのだとつくづく思ひました。二千五百八十八年まあ!! なんと長い歴史でせう。

きつと私等の祖先も神武天皇の御家來となつて悪者御征伐の御供を申したに違ひありません。それからどんなに長く御恩を受けた事か。我等國民八千萬は、一人残らず此の御恩をよく知つてをります。

陛下は十一月十日高御座に御登り遊ばされて、國民の此の心をきつと御覽遊ばします。其の時日本國中にとゞろく萬歳の聲が世界のはてまで鳴りひびくでせう。

あゝ!! 其の中に小さいけれど心からの私の聲も交るのです。

## つばめ

下關市玉江尋常小學校

尋五 難波忠義

ばたく。

「つばめだ。」

前の電線にとまつた。

どうしてかばたくといつまでも羽をふるはし口をうごかしてなにかんてぬる。目をきよろくさせ、ときどき後を見る。

その内どこからともなくひゆうとまた一羽とんで來てとまつた。先のつばめはちよつとびつくりしたやうにくびをまげた。

まもなく揃つてとびたつた。きもちよさそうにひゆうととんで行つた。僕もつばめになつて世界ま

んゆうをしたいと思つた。

雨あがりの朝で、電線がキラ／＼光つてゐた。



## 散 髪

和歌山縣師範學校附屬小學校

尋五 田 中 一 也

僕の内のはたに、よくはやる理髪店があります。

僕は何時でも其散髪屋へ行つて、頭をかつてもらつて居ます。或日の事でした。

僕は何の氣もなく、お母さんの所へ行くとお母さんが僕の頭のぼう／＼と生えたる毛を見て、「散髪して來なさい。」

とおつしやつたが、僕は散髪がきらひであつたので、「さ、——晩に行く。」

と言つて其晝はやら／＼散髪をのがれた。

晩に「言はれへんかいなあ——？」

と思つて心配して居つたらお母さんがひよつかと思ひ出した様に、

「あゝそらや、散髪屋へ行つてお出でなさい。」

と言つたのでいやであつたが、お父さんが歸つて來てあるので、何事もやう理くつ言はず出て行きか

けたら二郎が。

「僕も連れて。」

と言つたので、

「連れてやら」

と言つてぶん／＼おこつて門を出た。

空には星がきら／＼光つて居つた。

二人でぶら／＼歩いてやら／＼散髪屋へ入りこんだ。ごうと戸を明けると、床屋のおぢさんが誰だ

と言ふやうにひよこつと後を向いた。

入ると外の店より電氣が明るく又光が鏡にうつつてまぶしいやうであつた。

ふは／＼とした腰掛に腰をおろしたら、どこともなしに何んとも言へないよい氣持がした。

僕は窓から外の、電車や自動車の走つて行くのを見て居た。

外は中のやうに、暑くはなく涼しい風が音もたてずに僕の顔をさはつて居つた。

そこで呼吸運動を二回したら大層氣持がよくなつた。

そして今度は又ふわ／＼とした腰掛に腰をおろしたら、前のいすの上で、そつてもらつて居る者が

僕等程の年頃で丁度幼稚園で一所であつた佐々木君に似て居るので僕は佐々木君とどならうと思つた

が、どなるにもこんな澤山人の入つて居る店では風が悪いと思つてこらへて居つた。

すると其の子が終つたと見えてむつくりと立つ上つた。見て見ると、



果して佐々木君であつた。

佐々木君と僕とは「おい君」と言ふやうにあたがひに久々であるので兩方笑顔をしながら話合つた。僕は何んとなしにあの幼ない時の事を思ひ出した。

そうしてものと學校の事も言ひたかつたが言ひきれず僕の番になつた。

「ぼんお出で。」

と床屋の若主人が言つた。

僕は佐々木君に、

「失敬。」

と別れの言葉をかけた。

そうして僕は散髪をするいすに腰をおろした。間もなく戸棚から白いエプロンを出してぼんとなつた。鏡にうつつた僕の顔は丁度朝鮮人のやうであつた。

そこへあちらの戸が開いて主人がたばこをすば／＼とすひながらやつて来て若主人に、

「ご飯。」

と言つたのでかはつて僕の頭をかつてくれるのは見習の小坊主であつた。

前のいすでえらさうな紳士がゆう／＼と腕をくんでそつてもらつて居る。

「チョッキン／＼とはさみがなり出した、間もなく手をさかにして毛をかり始めた。」

見習だから下手で毛を引いていたくてたまらないがいたいと言ふのも風が悪いと思つてこらへて居つたがたまらないので口をどかと思つて物を言はうと思つても、又言ふ氣にならない。

其上僕がいたくなつてくるとよけいに頭を動かすので毛が肩に入つてうじや／＼するやうでのみにかまれてる様で仕方がない。

早くあのやはらかいはけではいてくれればよいのにと思つてふと鏡を見ると小坊主は一生懸命に鼻くんくん言はせながらやつて居る。

僕は小坊主をにらんで下手なくせに此小坊主め——、と思つて口をしばつた。

小坊主もあんばい出来ないと思つて情なさうな顔つきであつた。

すると間もなくすんだと見えて戸棚からはけを持つて来る時若主人が戸を明けて出て来て、

「どれかれてあるか。」

と目玉を下に向けて息を僕にかけながら、

「ここたりもつとはちよよ。」

「そんな事であくか。」

「チョッキかしてみな。」

と言つてじまんさうにちよき／＼始めた、まるで僕は手本のやうだ。

今度は前とちがつてちつともいたくはなく又きれいに出来た。

やはらかい毛の物で首の所をはきながら前かけをばづした、それから二三分まつて顔をそつてもら



ふのは本當の主人ですい／＼とそつてくれた。

僕はよい氣になつてねこんでしまふやうになつた。

頭を洗つてもらつて外に出ると寒くて又何か忘れたやうな感じがした。

二人で内に着いた、そして早速お母さんの所へ行くとお母さんは、

「美しなつたね。」

とおつしやつた。

## 愛日會

徳島市佐古尋常小學校

尋五 山下多喜子

晴れた空をかすかに白い雲が飛ぶ、ほんとうに秋です。

心よい朝風がひやりと顔をなでます。もうすがれたらしい朝顔が大分葉をしぼらしてゐますが、それでも花だけはなほ元氣に五つ六つ今日もさかうとしてゐます。

櫻の病葉がはら／＼とちちて白銀のくものすにかかりました。あゝ秋が來ました。風の音にも秋の音がする、しつかり働ませう。

今日は掃除當番です。まだ早すぎると思つたが學校へといそぎました。町はどの家にもうち水がす

がすがしい。學校の前のなつかしい愛日橋の橋の面もしつとりしめつて、てすりにふれるとひやりとします。早秋だ今年も半ばすぎました。愛日を名にあら私の學校には早誰かの手によつて校門校庭等にははうきの目が見事に入つて、うち水さへされてゐました。足あとが二つ三つ。

教室の窓の下に白い服が見える。みんなはうきを持つてせつせと掃除をしてゐます。はうきの先からパツ／＼としめつた土煙がわづか上りました。汗ばんだ顔が赤く見えます。

「おはようおそくなつてごめんなさい。」

「いいえ、私達も今來たばかりなのよ。」

といそいでばけつを持つて水道へ行つた。

手に持つたひしやくからは銀色の玉が四方へとびます。ポブラが朝風にさや／＼音を立ててあせばんだ肌をひやりとなでます。

ポブラの葉が風にゆられて葉裏をかへして白く光る。

サイレンがすみきつた朝の空氣をふるわせて高くはるかにはてもなくひびくと、その校舎のかけ、その間から生徒が運動場にはせあつまつて來ます……千六百人……女子服しもふりの男子……入みだれた生徒生徒、それがしぜんに白は白、しもふりはしもふりに見る間に正しく整頓され誰一人としてささやくものもなく校長先生諸先生のあこしを待つてゐます。

花やかであつたしぎやうぜんに引きかへて……生き／＼したはちきれそな静かさがあどづれました。さちんと時間をまもることゝ話をするものがないこと、これが千六百人のめいめいが何のくつた



くもなく實行します。すなはち我校愛日會の他に類のない事が見られると當々先生がおぼせられま  
す。でも私はこれは誰にもこの生徒にも出来るがあたりまで、出来ない學機があるのを不思議に  
思ひます。やがて引きしまつた顔の校長先生はじめ、にこやかな先生がそれ／＼受持の組の前におつ  
きになる。私等の身はますます／＼引きしまる。  
「敬禮。」  
號令がひびくと一せいに天皇陛下の御眞影を拜し奉り、萬ざいを心の内でのり、次に心を清め目  
をつぶつて反省をいたしました。  
幸にはづかしい行もありません。

「まごころこめて勉めませう。」

「すべてにしんせつをつくしませう。」

「自分の事は自分でしませう。」

を心の中でくり返しました。

やがて校長先生のすんだおこへはしんどした廣い運動場にすみからすみまでひびき渡ります。そう  
していつも何事もしんけん努力するやうにはげまして下さいます。それがめい／＼の心にくひ入つ  
てつよくひきしまり、次にすらりとした、勝浦先生のお姿が壇上にはれタクトに千六百人の目が  
集る。一揮「時は金てふ愛日の」といふ校歌が人々の眞心のシンボルの如く力強く流れてやがてそれ  
が元氣一ばいの朝會體操につゞくはちされそうな元氣に心も身もすみきつてくる。これから我々の力

強い學習は出發します。

## 秋の夕暮

愛媛縣新居郡惣開小學校

尋五 進 藤 達 子

明日の理科は何を習ふのだらうと思ひながら本を開けて見ると、きのこだ。けれど、私は何所にあ  
るか知らない。一つねえやんを連れ出さうと思ひ話して見た。直に心よく承知してくれたので、二人  
で氏神様へと向つた。

皆の遊び場所として可愛がられて居る廣つばに白と黒の牛が、私達の急がしい様子も知らないやう  
な顔をして、よだれをたらしてゐる。今少し前に耕した畠を子供がふみまはつて居る。本當に吞氣さ  
うだ。豚も相變らず、きたないかつこうをして「ぶら／＼」といやな聲を出して居る。狭苦しい日常  
りの悪い小屋だ。餘り可愛さうだ。豚もいやになつたのだらう。

學校の運動場に来ると、急にひどい風がさつと來た。

櫻の葉は、ばら／＼と音をたて、落ちた。私の洋服や、ねえやんのもともまでも吹きとばさうとし  
た。「お、寒。」正ちゃんはおふとんに包まれてぬくさうだ。にこ／＼顔で前のお山や、廣い運動場を面  
白さうに、ながめて居る。



叢の中の細道には、すしきや、黄色いおみなえしや、いのこづちなど、色々な花が咲亂れて居る。線路に來た。大分土地が高い。木の植わつて居ない、學校の運動場も、何だか寒さうに思はれる。此の線路道こそ此の頃は通らないが、前には遠い端出場から、汽車に乗つて、通つて來たのだ。本當になつかしい。もう一度だけ、向ふから、通學したい氣もする。けれど遠い所から、來て居る人の事を思ふと、私達はしあはせだ。

知らぬ間に、坂の前に來て居た。木はこんもりと茂つて、大きいすきまなどはなかつた。けれども私はきのこ取に來たのだ。二人で大きい目をして山の傍をさがして行つた。ねえやんは、早少しとつたといふ、私も一心になつて山の近くによつて通つた。やうやく線香だけといふのが見つかつた。ねえやんなんかは笑ふだらうが、私にとつてはうれしかつた。少しづつとつて行くうちに、氏神様の傍まで來た。木はもり／＼と茂り、誰一人通らない静かな中を二人きりで歩く。本當に神々しい氣がした。ねえやん達は、月に二度必ずお参りして居たのださうだ。やはり端出場の事を忘れないやうに、ねえやんもなつかしいのだらう。上に上ると、青黄色い廣々とした、たんぼが見え、空は、夕日にもえ、今にも日は西の山へ落ちようとして居る。思はず心の中で、「あゝきれいな夕日よ」と叫んだ。川の水はごうごうと音を立てながら、流れて居る。本當に何とも言へない静けさだ。

山を下り始めた。所々の柿の實が、少し赤みをささうとして居る。大分暗くなつた。家の傍まで來ると、省線の汽笛が静かさを破つてさびしく聞えた。

## 水泳試験

高知市第三小學校

尋五 十 河 清 流

「どぶん／＼」と、皆勇ましく飛び込んだ。水は思つたよりぬるく、水たまりにでもはいつて居るやうな氣がする。皆一列になつてたるのまはり廻りながら圓形を泳がいた。

それは去る九月十日の正午から、僕等五六年生のために風光うるはしき孕灣で行はれた水泳試験の時の事である。ぬき手を切つて泳いでゐると先生に「ながく泳がなければならぬから。」と注意された。應援してくれる人たちがたくさん居るので、調子にのつてどん／＼前の人をぬいて進むと、昨年の五籽試験に取れた六年生が、「こらぬいたらいかん。ついて來い。」と言つた。何だかえらさうにも聞えたが、またそうかもしれないと思つた。流れて來たごみをよけてゐて何回も水を飲んだ。鏡川のように流れもなく水もそれにすんでゐなかつたから大へん泳ぎにくく思つた。先生が氷砂糖を口へ入れて下さつた時のおいしかつたこと。餘りだったので、一寸たるへすがると、また先生が、「たるへすがらないやうに。」とおつしやつた。

しばらくして陸を見ると、もう木村君や山中君其の他の友だちがたくさん上つてゐた。僕も止めたかつたが今此所で止めるとあの白帽に赤すぢ三本黒すぢ一本が付けられない。そう思ふと負きらひの



僕は止めるにも止められなかつた。ふだんは弱虫で泳ぎも餘り出来ないと思つてゐた甫君がまたがんばつてゐるのを見て、僕でもやれんことがあるものかと、強く自分の心をはげました。其の時甫君が後から、「お互にがんばらうのう十河君。」と言つてくれたのには、僕は千萬の援兵を得たよりも強味をかんだ。

また先生に氷砂糖をもらつて、あふ向になつておよそ半廻りぐらゐ泳ぐと、何かこつんとぶつかつた物がある。誰だらうと思つて、頭を上げた拍子に思はず水を一ぱいごちそうになつた。しほ水の味で氷砂糖の味が一時にきえてしまつた。ぶつつかつた物とは見るとそれはさつきのたるであつた。陸の方から山崎先生がもう五分と言はれた時、思はずほつとした。やがて上れのあひづに陸へ上つた時は、足もとがふら／＼してへたばつてしまひそうだつた。だが、五軒の試験にとれたかと思ふと、僕の胸は喜びにをどつた。甫君も最後まで辛棒してゐた。

三ばいのあるあめ湯の味はかくべつで今でもとても忘れる事が出来ない。空には午後の日光が強く水面を照してゐた。

## 人の力

熊本縣第一師範學校附屬小學校

尋五 大 平 恭 造

中食してゐたら、高等科の人がやつて来て、

「オイ、みんな加勢してくれ、青桐の木を倒すから。」

と言つた。僕は思つた。「運動するのにじやまだから倒すのだな。」

すぐ仕度して運動場へ出た。日はかん／＼と照りつける。空にはちぎれ雲が飛んでゐる。温室のガラスにあたる日光が反射して、強く僕の目を射る。

みんな集つた。青桐の大木に綱引の大きな綱をしつかとく／＼りつけた。花田先生の合圖で引きはじめたが、なか／＼倒れない。後には花田先生までも加はつて、一生懸命引いたけれど、やはり大木だけあつて、梢を前後に振るばかり。前の方の者は自分のせいので二倍半も綱に引上げられては、どしんとしりもちをついてゐる、それにつまつついて後の人が倒れる。

いくら引いてもびくともしないで、根の方を少しほつて、みんなで引いたら、少しづつゆれ出して来た。それで僕等は勇氣百倍。

「やあさつきのかたさうちだ。」



と又も一生懸命に引いたから、根本の地が少しぐらぐらし出した。花田先生が、

「こんな大木でも、みんなの力で倒れるのだ。」

とおつしやつた。僕等は先生の言葉に元氣ついて、エイサ〜と力を合せて引き出した。

その時、後藤先生が窓から顔を出されて、

「五年あつまい。」

とおつしやつた。晝の時間がはじまつたのである。僕等は教室にはいつた。晝を書いてゐたら。

「みし〜、ど〜ん……。」

と、はげしい音がした。青桐の大木が倒れたのである。僕は晝を書きながら、僕たちの様に力の弱い者でも、みんな力を合せると、どんな仕事でも出来ないことはない。」と思つた。

## 観 兵 式

鹿兒島縣鹿兒島郡中郡尋常高等小學校

尋 五 福 田 茂

「あゝ、くたびれた。」と一人言を言つて腰をおろした所は練兵場の草原であつた。

幾萬とも数知れぬ觀衆は、練兵場の廻りに黒べいをきづいてゐる。僕等も多くの觀衆にまじつて、觀兵式の始まるのを待つた。花火が秋晴れの空にボンボンと上ると、觀衆はそれに目を引かれてゐる。

る。緑の練兵場には、がいせん祝の氣分が満ち〜てゐる。突然何所からともなく美しいラツバの音が聞えて來た。はつとして耳をかたむけると、それは兵營の中から一隊の兵が步調高くラツバに合して式場へ近づいて來るのであつた。

間もなく聯隊旗を先頭に門を出て來た。へりだけになつて、數知れぬ戦功をかざる聯隊旗が秋風にはためいてゐる様は何とも言はれない。兵隊さんが足を上げて歩く度に銃劔や、サーベルがきら〜とかがやいて目もくらむやうである。しばらくの中に兵隊さん達は、廣い練兵場に次ぎ〜と整列された。カーキ色の軍服姿が、ずらりと緑の草原に並んだ様は、まるで赤べいかと思はれるやうであつた。

全部の整列が終ると、すき通るやうなはつきりとした聲で聯隊長の「捧げ銃」の號令がひびいた。場をうづめる人の目は一せいに聯隊旗に注がれた。同時に強くもやはらかなすき通るやうな、美しい君が代のラツバの音が廣い場内に満ち、あたりの山々にひびいた。僕は頭の上から冷水をあびせられる様な、ぞうとした氣持に打たれて、まるで夢見るやうな氣持であつた。兵隊さん達を始め數知れぬ觀衆も同じ氣持か、さしもの練兵場は水を打つたやうにしんとして、息の音さへも聞へない。その美しいラツバの音が何所となく消へていつて、はつと吾にかへつた時、僕の目には涙がわいてゐた。いつか習つた讀本の「軍艦生活の朝」の課に「軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は……。」といふのを思ひ出した。

それから規律正しい閱兵や分列式の勇ましい様を觀た時、「兵隊さん達はえらいなあ。僕もやがては



兵隊さんになるのだ。」と思つた。

## 夕方の濱邊

沖繩縣島尻郡座間味尋常高等小學校

尋五 宮 里 ツ ル

いつものやうに濱邊に出ると、鯉船には大りようのしるしの眞赤な火がついて居ました。私は鯉船がかつをとつて来るのを見たら、なんとなくうれしくあります。しかし、家の組合の船は、まだかへつて來ませんでした。

御日様は、まだおちてまもないが、西の空では赤黒い雲が、だん／＼なくなつて白く光つて居ました。今まで鯉船を待つ人でにぎやかであつた濱も、所々に黒い人のかげが見えるばかりで、だん／＼静かになつて來ました。小さなおとをたてて沖へ出て行く小舟は、夜の魚つりに行くのでせう。北の空はすみきつて北斗七星もよく光つて、此の間おそはつた通りの、ひしやくの形をしてゐた。あゝ北極星もよくわかります。ふと東の空を見ると、すぐ遠く那覇に居る姉さんの事を思ひ出して、今頃姉さんはなにをして居るだらうかと思つて來た。私は夏休には毎日姉さんと一しよにたきぎをとつたり、家の手傳をしたりしましたので、今でも姉さんが「つるちやん」と呼ぶやうな氣がします。夏休がすんでからもう二十日餘もなるのに二三日前までも一しよにあそんだやうに思はれます。ぼんやり

すはつて居る間に、のこつて居た人だちもかへつてしまつて、廣い濱はほんとにさびしくなりました。私は急にこはくなつて、たつて歸る時には遠くの方から、船のおとがきこえて來ました。

## 小 雀

北海道網走郡卯原内尋常小學校

尋五 古 川 由 雄

ある日の夕方 弟の喜四郎がとなりの秀夫さんからやつと歩ける様になつた小雀を貰つて走つて家に歸へりました。そうしてすぐに籠にわらを敷いて、その中に米を入れて裏の木の下につるしておきました。小雀は、こはさうにキョロ／＼とあたりばかりを見て、米は少しもたべませんでした。弟達の歸つた後で、私はどうするかと思つて馬小屋にかくれて居ると、親すゝめでせう、二羽のすゝめが飛んできて、其の木の上に止つてあたりを見て居ましたが、人の居ないのをたしかめると、小さい虫を落してよこしました。けれども小雀はたべもしないでキョロ／＼あたりばかり見て居ました。私はなんだか、かはいさうな氣持になりました。それでそつと放してやらうと思つて、籠のところに行つて静かに小雀を出して、足の糸を解いてゐると、運悪く喜四郎が來ました。私はさつそく籠の中に入れて、知らんふりをしてゐましたら、弟はだまつて籠をつかんで小雀を見てゐましたが、間もなくにつこり笑つて歸つて行きました。



こうして 時々きて歸つて行く弟のことを思ふと 放してやりたくないやうな氣もしましたが 籠の中にならざるまづてこはさうにキヨロ／＼あたりを見て居る小雀を思ふと かはいさうでどうしてもはなしてやりたいやうな氣がしてなりませんでした

いきなり籠から雀を出して 足の糸をといて静に土の上にはなしてやると さつきの雀が木から飛び下りて来て 先になつてトン／＼とはねて行く その後を小雀は よろ／＼しながらビィ／＼と鳴いてついて行きましたが、二三間行くと親すゝめは すこしはなれた前のやぶの中へバット飛んで行つてしまひました 残されたる小雀は 一そうビィ／＼と鳴いて 小さい羽をはたきながら あせつて前のやぶの方へ行つてゐます 家の中から親雀と 小雀をじつと見てなんとも言へないうれしさに包まれてゐた私は 又かはいさうになつたので一層やぶの中までつれて行つてやろうと思つて、裏に出してみると ビィ／＼とつゞけ様に鳴いてゐる小雀のすぐそばに 一匹の大きいねこがにらんで、いまにも飛びつこうとしてゐました 驚いて「シッ」と大きい聲を出して走り出すと、同時に猫はとびついた ハッと思ふ拍子に「キュッ／＼」と鳴き聲が耳のそこまで通る様にひびきました 私は小雀をくはへて行く猫の後姿を見送りながら ぼんやり立つてをりました

## 草刈り

北海道茅部郡磨光小學校

尋五 中 幸 一

四時間目の授業が終ると先生は『これから皆で草刈りをしませう』とおつしやつた。これは今度引き越して来た假教室はお寺で境内はなか／＼廣いが夏草がいやに茂つてゐたので、僕達は皆で刈りはらつてきれいに遊び場をつくらうといふのです。

昨日からお話があつたので 皆は喜んで持つて来たそれ／＼の道具を取つて身仕度する。僕は草刈鎌、山田君は力が強いので唐鍬、これは地ならしも兼ねようといふのだらう。中津君はこまざらひ、若松君はもっこ、これは刈つたものを集めて捨てる役目、其の外色々な物を持つて寺前の廣場に集つた。

男生は三十人、女生は四十人。先生はそれを二手に分けて 前進隊と後方隊とにされ『前進隊は刈り組、後方隊はかたづけ組』とおつしやつた。僕は前進隊、やがて僕等は一列になつて號令を待つた。『さあ始め!』で一同元氣よくバサン／＼ゴッソ／＼。僕の鎌はあまり切れなけれど隣の坂本君に負けたくないので大いにかんばる。見る／＼うちに一間程進む。丈けののびたよもぎやいたどりは、ばさりばさりとたふれる。これが敵兵だと思ひながら力を出すとまつたく愉快だ。むがむ中でや



つてゐるうちに、もうよ定の所が近くなつてゐる。一寸安心して後を見ると後方隊も一生けん命だ。『刈り方止め!』の號令がかかった。刈れた刈れた、まるで廣々とした野原のやうだ。こんな廣場になると思はなかつたが、刈り上げて見ると大したものだ。僕達も後方隊に手つだつて又一ど骨折りをした。かたづけた後はまた格別氣持ちがよい。約一時間半で全くよ定を終へた。先生はうれしさに『おかげで三百坪の運動場が出来た』とおつしやつた。

う さ ぎ

北海道札幌郡江別尋常高等小學校

尋五 櫻 田 美 代 子

私の家には白と茶色のうさぎがかつてある。

それは此の春、お父さんが私と妹に、買つてきて下さつたのだ。

それからは毎日毎日草をやるのが樂みで、朝早く起きて、青草をつんで、うさぎの箱の中へ入れてやつてうさぎがおいしさに、もくもく食べるのを私はだまつて見てゐる。

そのうちにうさぎは大きくなつた。

八月七日の日だつた。

いつものやうに、草をやりに行くと、白い方のうさぎが、やはらかいわらの中に子をうんでゐた。

私は前から子のうまれるのを、まつてゐたので、大それたうれしかつた。

二三日してから行つて見ると、わらの中で、もくもくと元氣よく動いてゐた。

よく見ると四匹いた。

その中三匹は白で一匹は茶であつた。

親うさぎがそばへ行くと、小うさぎはよちよちとできて、親うさぎのおちちにぶらさがる。

少し飲ませるとうるさがつてびよんと、とぶ。

小うさぎも又さがして行く。

うまれて二週間もたつと、かはいいい目もあき、すこしばかり草を食べるやうになつた。

それからは一日一日とだんだん大きくなつた。今ではもう親うさぎからはなして、別の箱に入れてある。

赤い大きな目、眞白い長い耳、小さな口、そしてやはらかい青草を、おいしさに食べてゐる所は、いかにもかはいらしい。



## 暴風雨

臺灣嘉義第二公學校

尋五 姜 仁 海

一昨日の午後風がはげしくなつて雨も降り出しました。お母さんは「後のきものを早くしまひなさい。」といはれました。私は早くきものをしまひました。その晩になつて電燈が消えてしまひましたので勉強をすることが出来ませんでした。いよ／＼朝になつていろ／＼の仕事をしてから本をもつて學校へ来ました。途中に風が一そりはげしくなつてこうもりかさがふきとばされるほどのはげしさでした。先生の家の前のみぞは水が一ぱいになつて道に水がたくさんたまつてゐるで川のやうでした。學校へ来ると友だちは少しばかり来ました。學校の人でも暴風雨のことばかりいつてをりました。しばらくすると先生もいになりました。先生は圖畫をしたいものほしてもよいとおつしやひました。しばらくすると校長は先生に何かお話をしました。しばらくするとけいこがないといふことが分りました。私は早く本をつゝんで家へかへりました。かへる途中にかうもりかさがふきとばされてしまひました。家までかへると帽子きものをかはつて足を洗ひました。四時頃おかあさんのお使に電土を買ひにいきました。いく途中やかへる途中にぐわいとをふきとばす位のはげしさでした。すこし勉強してからねました。よく朝になつて學校へ来ました。あちこちにもかきねや木などがたふれ

てをりました。九時には雨も風もすつかりやんでゐて日が出ました。

## 大暴風雨

臺灣花蓮港尋常高等小學校

尋五 齋 藤 英 夫

ひゆうー、と風が吹いて来る、ざあーと一しきり雨が窓にうちつける。

「低氣壓はどこだらう」

「さあどうなつてきたのだらう」

「ルソンか石垣島か」

「この間マアシャルやカロリンからでもおこるとならつたじやないか」

「そうだ、南洋諸島からでもおこるとならつた」

「ひどくなるだらうか」

「ひどくなるだらうか」

「さあどちらに低氣壓は進んでゐるのだらう」

「臺東の沖からまがつて北西へ進んでゐるそうだ」

「ちや花蓮港もおそはれるぞ」



と、組中の者はてんでに、ぎろんを言ひはつてゐる。見る／＼うちに大暴風雨となつた。

風はますます／＼吹きまくり、室内はだん／＼暗くなる。一風一雨毎に恐怖の念におそはれ、學校でも以後を心配してか、早くかへる事を命ぜられた。家にかへつても恐しさのため、そは／＼して落ちつかない、夜の八時頃は暴風の絶頂だ。めり／＼／＼と音が、風雨の中に聞える、さあ何の音だらうかと、思ふまもなくがつたんと何かとたんにあたる。

へいはたふれる、もつかはおれる、ばよ／＼は風前のともしびのやうにふら／＼だ。  
びんろうじゆはね本からたふれる。

叔父さんはくびを左にまげたり右にまげたりしてさも心配さうにしてゐられる。

九時頃は風も大分おさまつた。

雨もこぶりになつた。叔父さんはくわい中でんとうをもつてどこかへいつてしまいました、しばらくするとかへつていらつしやつた。

そして、「とたんはみんなやられた」と、おつしやつた。「どこですか」と、問ふと、「えんとうのそこだ」と、おつしやつた。

それからやつと安心して叔父さんをはじめみんなはねむりに入つた。

朝學校に来て見ると、昨日風に吹きまくられた、まめがきのおちたのをわい／＼さわいで、みんなはさわいで、とつている。

がじゆまるの葉や、ねむの木枝などで、そこらはうづもつてゐる。授業がはじまつてもわい／＼

さわいでまじめにきくものが少ない、その中先生がひどくなるかもわからないからとおつしやつて、二時間かへして下ださつた。

そこ、とたんがとんだ家は何げんもあつた。その日にかぎつて風はひどくなかつた。

實に生れて初めてあつた、大暴風雨であつた。

#### 追記

昭和三年九月五日から九月六日の間にあつて大暴風雨であつた。私として生れてはじめての恐しい暴風雨であつた。これに感じてありのまゝを綴りました。

## まんごう

臺灣臺東廳馬蘭公學校

尋五ガヤウ

私は臺灣の果物でまんごうが、一ばんすきで、又一ばんおいしい果物だらうと思ひます。

まんごうは卵を横にひらたくしたやうな形をしています。熟しないうちは青くて熟するにつれて黄がかつてきます。

外皮がみんな黄色になつたときは外皮が手で容易にむぐことができます。

肉は黄色で汁がたくさんあります。中には大きな種があつてそれからたくさん筋が出てゐるので



肉と種がなか／＼はなれません。

食べるときには肉を口につけて上のやはらかい肉と汁をすいとります。その味はなんとも言はれない芳ばしいかほりと味ひがします。

内地人はまんごうが臺灣の果物で一ばんきらひと言ふ人もありますが私はいくら食べても足りない程すきです。

### 御大典ヲ待ツ

南洋廳サイパン尋常高等小學校

尋五 奥山博行

去年カラ待ツテキル御大典ハモウ後二ヶ月ニセマリマシタ。私共ノ學校デハ此ノオ目出度イ御大典記念トシテ此ノ間保護者ノ方ガ毎日鍛ヤ鎌ヲ持ツテ來テ立派ナ學校園ヲコシラヘマシタ。其ノ學校園ハ運動場ノ南デ其ノ中ニ小山ガアツテ椰子ノ木ノ外ニ色々珍シイ木ガ植エラレテアリマス。小山ノ上カラ見ルト美シイラウラウ灣ガ目ノ下ニ見エ、左ニタツポーチヨウガヨベバ答ヘルバカリニ近クソビヘナカ／＼ヨイ眺メデス。コノ小山ノ頂上ニヤガテ御大典記念碑ガ立テラレルノダサウデス。

又御大典ノ時ニハ私共ノ學校デハオ祝ノ運動會ヤ旅行列等ガアリマス。其運動會ニハ保護者ノ方ヤ青年ノ方々モマジラレルノダツウデ私等ハソノ日ハドンナニオモシロイダロウト思ヒマス。シカシソ

レヨリモモットウレシイノハ其ノ日ノ萬歳ヲ三唱スルコトデス。私ハ毎日指折リカヅヘテ御大典ヲ待ツテキマス。

### 日本の友へ

布哇加哇島リフエ平和學園

尋五 島本みつ子

加哇島リフエから手紙をさし上げます。御地の冬はずぶんお寒いさうですが、こちらは年中暖かで何時も美しい花がさいてゐます。この頃はピンクシャワの花ざかりです。この花は日本の櫻によくにてゐると先生がお話しになりました。

私は毎日この地の公立學校と日本語學校に通つて居ります。どちらも五年生です。公立學校では午前八時から一時半まで、日本語學校では午後四時から五時までおけいこが御座います。公立學校では國語・算術・歴史・地理・書方・りか・料理のしかたなどを習ひ、日本語學校では讀方・話方・綴方などを習つてゐます。

私はあなたにはじめて手紙をさし上げるのがほんとうにうれしう御座います。

どうか日本の様子をお知らせ下さい。

皆さまによろしく。さようなら。



尋常科第六學年

五月二十九日  
石井ハル子様

島本みつ子



あ　る　心

東京府豊島師範学校附属小学校

尋六　安　井　彌　生

「ニャーオ。」

と一聲なくと、もうだき上げられてゐるか、なでられてゐるかしてゐる幸福なうちの猫。

「ニャーオ。」

と一聲なくと、みんながきたながつて、

「あつちへおいき。追ひ出すよ。」

と、つめたい言葉をかけられるかはいさうな野良猫のドブ。

きたないドブがうんだ二匹の雄が、あんまりきれいで可愛いものだから、お隣りでは、子供だけを養つて、親は、子供のごはんを食べてゐても、おひだすのです。

私はドブが又、外へ出されてゐるのを見て、つくづく、何てむごいことだらうと、ドブがかはい相でたまらなくなります。

けれど、やつぱり、うちの可愛いきれいな玉の方をどうしてもひいきしてしまふのは、どうにもならないのです。



お腹のすいてゐるドブには何もやらないで、お腹のあまりすいてゐないうちの玉には、おいしいお魚をやつたりするんです。

そんなのを、まのあたりみてゐるドブの心はどんなでせう。いちがきたないのでもなく、ぬすみをするのでもなく、只、顔がみにくいのと、毛色がわるいのだけが理由なのではありませんか。

しかも、子供は一匹ともかほもいゝし、毛色も美しい故に、養つて貰つてゐるのです。

どんなに、心がいやしく、ぬすむ猫の卵であつても。

私はドブが、きらひです。

同情心はあるけれど、やつぱりすき腹をかへて、玉のごはんを、おどおどしながら食べてゐるのを見ると、腹が立つてきて、つまみ出してしまふのです。

……が……私は後で、

「ア、かはいさうだつた。お腹がすいて、どんなに、えんりよしながら、食べてゐたのだらう。」と、深く後悔するのです。

わかつてゐたつて、あまりにきりやうがわるく、毛色がきたないのを見ると、只それだけで、きらひになつてつまみだす、私の心は、何といふ、いやしい、いけない心なのでせう。

そのくせ、ドブは、いゝ猫なんです。

もう年とつてはゐるけれど、やさしくつて、おとなしくつて、一つもわるい心は持つてゐないので、前、うちで、ごはんをやつてゐたから、コッコと、玉のごはんを食べて行くだけのことです。

まして、おとなりは、かはいゝ自分の子がゐる所です。そこへドブは、はいられないのではありませんか。

かはいさうなドブ。

いつもお腹をいっぱいにしてゐて、きれいな首わに、鈴と迷子札をつけてもらつてゐるうちの玉と、どんなに差があるでせう。

人間といふものさへなければ、二匹の差は、年の多少と、容色のことだけです。

そこへ人間がはいつてくると、二匹の差を、倍にも三倍にも、生活上に及ぼすまでにしてしまふのです。精神上にも。

考へれば考へるほど、私は、この人間の心が、浅ましくつて、いやになるばかりです。

私はわかつてゐても、その心をさへつて、ドブのことを愛する事ができないのです。

あゝ、ドブちゃんよ。かはいさうに。

さらはれても、わるい心なんかは起さないでゐて下さい。

今に私は、よい子になつて、お前を愛して上げるから。



## 姉を待つ夜

東京府豊島師範學校附屬小學校

尋六 野間 眞 弓

固く、鉛筆をにぎつて、さつきから宿題をやつてゐるが、まだ終らない。めんだうくさい計算の所だ。いや／＼鉛筆を走らせてゐる。

一輪ざしにさしてある野菊の花が、そうつと、私のお帳面をのぞきこんでゐるやう。

大きい姉様は、さつきからお仕事をしてゐらつしやる。母様もお茶の間で何かコト／＼させていらつしやる。小さい姉様はバザーでまだ學校からかへつて來ないし、一番さわぎやの小さい兄様もお友達達のところへ行つてしまつて、家の中はほんとに、火のきえた様な淋しさだ。

おまけに、外では今朝から降り出した雨に、風さへくははつて、ものすごいほどの音を出してゐる。誰もゐない、お部屋のすみに一人ですわつてゐると、赤々と、燈がついてゐても、目に見えない眞黒な物から、からだ中をおさへられてゐるやうな氣がして、少しの物音にも「ドキッ」と胸にこたへてくる。でも、私のお机の上に緑の着物をきたいたづら兒のキュービーちゃんや、ちよこんとすはつて、私の心を、ちゃんと知つてゐるやうなかほをしてゐる。その顔を見ると、こわい心などはどつかへな

くなつて、つひおかしくなつて、まるくふくれたほ／＼つべたを、えんびつのしんで、そ／＼と、つゝいて見る。でもやつぱりおんなじかほをして、すましてゐる。

二三度つついて見て、又宿題をやり初める。

ふつと、小さい姉様のことを考へると、なんだか心配で仕方がない。だつて、姉様はまだかへつてこないのだから。いつも、仲が悪いといつても、やつぱり姉さんだ。もう六時なのに……。おそくなるとは云つてゐたけど。

だん／＼心配になつてくる。

私、姉様すきなんだからか。もし、姉様が、居なかつたら、やつぱり私は、淋しいんだ。姉様が、ゐらつしやるので、私はどんなにたすかつてゐるか。いつだつたかも、私が母様にずい分、ひどくしかられた時だつた。姉様は私にかはつて母様にあやまつて下さつた。私は、姉様孝行かも知れない。けれどそれ以上、姉様は妹孝行だ。私のことなら、大がいなんでもきいて下さる。

などと、いろんなことを思つてゐる。机の上の電氣カバーの先が、かすかにふるへてゐる。外の雨は、さつきよりも、強いぐらゐにふつてゐる。

「カラコロ／＼」。足音がきこえてくる。姉様かしら。い／＼／＼。姉様はくつをはいてゐたのだから、あんな足音ではありません。ほんとに、だうしたのかしら。電車にひかれたのかしら、まさかそんなこと……。

ほんとに、早くかへつて下さればいいのに。



お姉様。早くかへつてきて頂戴——。

## 我家の上棟式

京都市西陣尋常小學校

尋六 岡 本 淳 子

今日は我家の上棟です。

「ヤツチャ、モットヤレ、マダ——」。

太いロープをたぐりながら威勢のよい手傳人が拾二三人面白い調子で掛聲をかけると其の度毎に周圍五尺長さ四間もあらうと思はれる木がグツ——とゆれながら上つて行く。

歌聲のあいま——に監督が大聲でさしづしてゐるのが耳につく。

「あぶないッ」。

お母さんに呼ばれた。今つり上げられて行く棟木の下をくぐらうとした私は大聲にしかりつけられたので思はず後へよつた。

手傳人だけでも二十七八人の大勢でずい分にぎはしい事です。やつと一つが上げられると又一つの棟木が歌聲に合わせておどりながら上つて行つた。そしてそれ——一定の場所に打ちこまれた。その大きい木ばかりに氣をとられてゐる間にちやんと家の骨組が出来上つてゐた。

からだ一面赤銅色の手傳人達は顔もからだも汗びつしよりになつて肩で息をしてゐる。

「さあ次は大黒だ」。

監督さんの聲で三十七八尺の大黒柱が手傳總がかりでヨイシヨ——と運ばれて来た。

「ヤツチャ、モットヤレ」。

たくさんの手傳人の手が太いロープをたぐりだした。上では五六人の大工が柱の見當を取るのに聲をからしてゐる。

七時すぎにお父さんの手から清め塩がまかれて目出度く棟上の式が終つた。歌ひ手の口から威勢のよい音頭が歌ひ出されると拍子木の音も晴れやかにいよいよ棟上式の踊が始まつて行く。

真赤な夕日が出来上つた、我家の骨組を美しく照してゐた。

## 雄辯大會の感想

大阪市蘆分尋常小學校

尋六 三 原 金 敏

その日は来た!!

全關西小學校優勝雄辯大會の日は!!

漸く一米四〇に足らない者が堂々と中央公會堂の壇上に立つて思ふ存分辯を振つた。その日は七月



一日だった。僕は先生に連れられて公會堂に入った。その廣いこと、聴衆の多い事、先づ第一に僕の膽に水を浴せた。あの壇上に立つのか!! そして話すのか? と思へば恐しくなつて来る。プログラムは狂ひなく進んで僕の登壇を待つ。狼が迫るやうだ。

その時、演壇の一隅から僕にとつて非常の氣味の悪い言葉が聞えた。

『私の崇拜せる英雄く』と題されまして蘆分小學校の三原金敏君を御紹介致します。』

僕は夢中で聲を聞き、そしてその時の僕が僕で無いやうに感じた。

聴衆の顔がはつきり見える迄は何をしたかどうしたのか判らなかつた。けれども悠々と登壇したらしい。何くそ負けるものか!! 男だ!! 終りまで立派にやつてやる!! と元氣を出した時分は大分話してからであつた。

大勢の聴衆!! そして壇上の僕!!

色々の氣持が息をつぐ時に頭の中を走つた。

雄々しく叫び終つて拍手に送られ降壇した時始めて僕であることを感じた。

先生が「よく出来た」「お茶でも一つ飲め。」と言つてお茶を注いで下さつた時何かなしに熱い涙が出た。

その後も僕と同じやうな辯士が入れ代り立替りして愈々最後の表彰式となつた。

その時餘り感じも起らず、たゞ「入賞出来たらなア」と言ふ感じが心の中を一度走つただけであつた。入賞者の中に僕の名はなかつた。一時悲しく思つたがすぐに嬉しい感じが湧いて來た。満足し

て人の入賞をほめてゐる内にも又申譯がないと思つた。然し幾千の人々の前に立つて僕の思ふ事を堂々と述べたことはほんとうに愉快だつた。この喜びと満足は僕だけにしか判らない尊いものである。

よく先生から

「倒れて後已む」と教へられた。

さうだ!! 僕は倒れて後已んだのだ!! 自分の力のすべてをつくして!!

だがしかし倒れても僕は再び起きるのだ。

あゝ雄辯大會は悲しかった。恐しかった。

そして嬉しくもあり男らしくもあつた。

ほんとに僕の生れてから得た一番尊い大きなよい経験だつたと思ふ。

## 奉祝の下相談

大阪市平野尋常高等小學校

尋 六 酒 井 忠 雄

初秋の空は青々と澄みきつて、日は、ほがらかに照つてゐる日曜日の午後であつた。僕はお祖父さんと、お庭の掃除をしてゐると「今日は。」と聲をかけられたので、頭を上げると、増井のおぢさんで、にこ／＼してやつて來られた。お年寄二人は縁先へ腰をおろされたかと思ふと、そろ／＼お話が始ま



つた。僕は掃除をしながら聞いてゐた。

増井さん「もう御大典も近いな。」

おぢいさん「うーん、もうぢぎだ。これで私どもは御大典には三度だな。」

増井さん「また町内でも何か賑やかな飾りものをして、祝はなければならぬ。何がよからうか。」

おぢいさん「うん提灯か。」

増井さん「さうだな。やはり提灯と旗がよからう。」

と、うちのお祖父さんと、増井のおぢいさんと、たえず笑をたへ、煙草をすばく飲みながら、語り合つて居られる。氣樂なものだ。そよ吹く風はなんとなく心持がよい。

増井さん「今年は随分京都は御大典で、賑はふことだらう。」

おぢいさん「そらそうだらう。何百萬といふ人が集るんだから。」

増井さん「紫宸殿の萬歳旗つて奇麗なものか。」

おぢいさん「わしもまだ見たことはないが、何でも赤い錦に萬歳と、かいてあるそうな。」

増井さん「結構なことやな。御大典がすんだら拜觀に行かうか。」

おぢいさん「それはそうとして、田中首相が天皇陛下の御前で萬歳といふのを一度聞きたいな。」

増井さん「そりや、今度ラヂオで聞けるそうな。元は陸軍大將だからえらい聲だらうな。」

おぢいさん「ラヂオつて、お互に、長生すると、珍しい事を聞いたり、見たりすることが出来る。」

増井さん「長生すると徳だ。ついよけいな事を話して、お掃除のおぢやまをした。そんなら提灯の事

は夜集つて相談することにしやう。さよなら。」

おぢいさん「それがよからう。わしは町内へふれまはつとくは。」

増井のおぢいさんは、いそ／＼歸へつて行かれた。御大典の來るのは、お年寄も喜こんで、待つて居られる。あとには、赤とんぼが、眞赤な、葉雞頭の上を愉快そうに飛び廻つて居る。

## 大島の女

兵庫縣川邊郡小田第二尋常高等小學校

尋六 江藤 咲子

今にも降り出しさうな空合に氣をもみながら、虫干の後片附けを手傳つて居ると、「御免さつせ御免

さつせ。」と訪なふ聲がするので、玄關へ出て見ると、見知らぬ女が立つてゐました。

年は三十位で、髪は無造作に束ねて古い手拭をかむり、身には紺緋の襷はぎの筒袖をひざまで位に着、背には大きな風呂敷をせほひ、にこ／＼と立つてゐます。私を見て「椿油入らない」と言ひます。之をお聞になつたお母さんがめづらしいと思ひになつたのでせう、しばし止めてお話をなさいました。

「貴女は何處の人ですか」と聞きなされると「おらは大島から來たのだ」と言ひました。おらと言ふ言葉やその言葉のなまりのおかしさに、私はふき出したくなりました。けれどもあの話に聞いた大島、



太平洋の中の離れ小島からはる／＼来た人と思へば、何んだかなつかしい人の様に思はれました。女は早口でいろ／＼の事をしゃべりました。「おらが村は椿油と漁とで生活してゐる。何でも頭にのせて運んだが、今ではこちらの様になふやうになつたとか、殊に「老人や婦人は村に居て油を製造しおらの様な女や(その女は早く夫に別れて子供一人をつれて獨身生活をしてゐるとの事)若い男女は六七人隊を作り隊長の指揮に従つて行商に出一年中一ヶ月位しか島に居ない」との事でした。私は其の子供の事を考へて見てなんだが淋しい可愛さうな氣になりました。おかしいのは何んでも様をつける事でした。お米はまるでない所だそうで「おらがこの間様社宅様の奥様から油様の代りにお米様をいただいたので送つておいたが、さぞや皆が喜んだ事だろう。」と如何にもうれしうにほ／＼喜んでおました。「おらはもう五六年もこちら様へ来るから、北野中學様や實科女學様に大そう可愛がつてもらふさ、女學様の女先生様は何時も大島の女は素顔がきれいで親切だと言つてほめて下さる。」と、得意さうにしてゐました。それからお母さんが着物のお話を聞きなされると、「此がおらの嫁入した時の着物だ。」と言つて昔を思ひ出す風に着物をながめてゐました。長い話の後島の女は「さようなら又來年もよろしく」と言つて出て行きました。

私はじつと其の姿を見送つてゐる中に、色色の事を考へさせられました。「あゝたとへ島とは言へあの人にはなつかしい故郷だもの一年に一月の外は皆他郷の空で暮す事は實につらい事だろう。殊に暑い夏の日寒い冬の日、旅から旅への行商はどんなにか苦しい事だろう。でもあの質素な姿、やさしい心根を思ふと、人々はきつと島の女に同情する事だろう。この邊の人は常でさへ白粉をこゆくぬり、

長い袖の着物を着、日傘をさしてゐるのに、結婚式でもあの風とは同じ人間でありながらも、此なにも違ふものでせうか。そうして私共の自由な米でさへ、不自由だと言ふ大島、何となく可愛さうに思ひました。あの女は今頃何處を廻つて居るものやら、來年來る事が私はほんとに待遠く思はれます。

### 御大典御儀式模型見物の記

長崎縣上大浦尋常高等小學校

尋 六 石 田 進

六年生一同は先生にみちびかれて南座に向つた。今年十一月あげさせられる御大典御儀式の模様を見るのかと思ふと非常にうれしかつた。

南座には整列してはいつた。なんとなく場内はひつそりとして嚴な感じがある。見物人は各組に分れて其組々には洋服を着けた人が熱心に話をされてゐる。みんなよく話を聞いておられる。場内には前面に紫宸殿、高御座や儀式のありさまをうつしたものがおかれてある。左の方には高御座の大きいや五節舞の模型がおかれ右の方には大嘗祭の模型がならべられてある。悠紀主基の二殿もおかれてある。

僕もしばらく見とれた。やがて僕達の番になつたのでみちびかれて左の方に向つた。そして五節の舞の由來や大御座のことについて熱心に話を聞いた。それから前面の紫宸殿其の中に入れられてゐる



高御座についても話を聞いた。この高御座に兩陛下がお登りになると七千萬國民がみんな萬歳を三唱されることも話された。其の時僕は思はず胸がおどつた。そして心で萬歳をさげんだ。此の紫宸殿を中央にはさんで右の方に右近の櫻左の方に左近の橋があり前面の兩側には偉い方々が昔の服装をしてならんでゐられる。其の中央に人が立つてなにかよんでおられる。この方は七千萬國民を代表して祝詞を申し上げる内閣總理大臣の方ださうだ。其の後には種々の色彩をほどこした旗や昔の武器がいかめしく並んでゐる。僕はその一つ一つの話を聞きつゝこのおごそかな美しい場面にとれた。やがて右に向つた。右には大嘗祭の模型である。こゝでも熱心に話を聞いた。やがて歸る番になつたから整列にかゝつた。僕はなんとなく今一度話を聞きかたつた。名残をとどめて歸路についた。僕はその路今度の御大典はさぞかし賑であらうと考へた。そしてこんな御代に生れた自分を幸福に思ふと共に天津日嗣の無窮を祈つて心で萬歳を叫んだ。學校についた時は淋しかつた。今でもあの場面を思ひ出すと心がおどるのである。

## 髪を刈る時

新潟縣南蒲原郡中通尋常高等小學校

尋六 柳橋亮一

「さあ刈るよ。」と、お父さんはバリカンを手につちながらおつしやつた。もう仕方がないので、

私は「ア」と答へて眼をつむつた。

冷たいバリカンがひやりと頭にさわると、ギジャギジャと音がして髪が切れ、少しづつ膝の上へ落ちて来る。

「痛いか。」とお父さんが仰つたが、我慢して「いたくない。」と答へた。然し時々チクリチクリと引張られるので、髪を引き抜かれる様だ。其の度毎に首をちぢめる。

デヨリッデヨリッと髪をこすり合せる様な音がした。と同時に思はず私の首はちぢんでしまつた。まるで力一ぱい引き抜かれた様な氣持がした。「痛ッ」と大聲を挙げたので、家の人達は皆聲を出して笑はれた。「駄目だい、お父さんは下手だから」と、怒る様に云つて下を向いた。お父さんは「お、これは」と笑ひながら仰つて、「もう半分後はすんでしまつたよ」と鏡を私の眼の前にさし出された。所々黒くなつた頭が寫つて居る。私は苦笑ひしながら、「早くやつてよ。」と云つた。

間もなく、「さあすんだよ。」と云ふ聲に眼を開けた。と今まで耐へてゐた涙が一度に下臉を越してサッと流れ出たので、恥しさのあまり上を向くことが出来なかつた。



## つんぼの爺や

埼玉縣師範學校附屬小學校

尋六 岡田多重子

夏子の家には夏子が生れる前から一人の忠實な爺やが居た。それはつんぼで齒が一本もなく頭はてかてかに光つて大へん可愛くて誰からも爺や／＼と可愛がられてゐた。朝は誰よりも早く起きてみなが起るまでにはもう庭のすみからすみまできれいはかかれてゐる。夏子の家の裏の方には野菜や草花などがきれいにつくられてある。これはみな爺やのたんせいであるが爺やはいろ／＼のおいしい物や美しい花があとから／＼出きるたびに自分の子のやうに可愛がつてにこ／＼しながら手入れをしてゐる。

此所は東京の郊外、荒川にほど遠からぬ所で夏は、はるかに見渡すかぎりの青田がすぐ目の前からつゞき、冬は雪のかんむりをいたゞいた富士のおごそかな姿が見える。まだ所々にわら屋根の百姓家さへ見えるがそれでも最近ぼつ／＼と新しい文化式の家も建てられて都の人もだん／＼移り住んでくるやうになつた。

夏子の父母も爺やがほんとうにすきであつた。つんぼの爺やは時々とんちんかんな事をして皆を笑はせた。或日夏子の母はいちごの手入れをしてゐる爺やの後から「ぢいや御苦勞だね。つかれたでせ

う。お茶にしてはどうだね。」といったが聞えない。二度も三度もいったがやつぱりだめ。そばにゐた夏子は土を拾つて爺やの足もとへなげた。爺やは驚いて立ちあがつた。そして後を向いた。夏子は茶をのみまねをして見せた。はじめて爺やはうなづいて齒のない口を大きくあいて「あははは。」と笑つて頭をさげた。夏子は小さい時から爺やが唯一の友達であつた。夜になると足を洗つて座敷へ上つた爺やによくおとぎばなしをきかせてもらつた。しまいになるとだん／＼ねむくなつてお話が夢のやうに遠くなると爺やはそつと床へつれてゐつてくれる。

お山の雪がとけてお花が咲いて又大好きな苺がなつてきた。花畑も美しく色どられた。爺やは熱心に毎日くはをうごかしてゐる。

## 岩夫のね顔

群馬縣多野郡鬼石尋常高等小學校

尋六 金澤正美

すや／＼と母のかいなに抱かれて寝てゐる岩夫のね顔を見て思はずほ／＼ゑんだ。今まで僕と遊でゐたのにもうぐつすりねてゐる。

なんとつみのない顔だらう。時々夢を見るのか、かはい／＼聲をはり上げてなにか言ふ。僕は岩夫がかはいくてたまらない。そつとやはらかい米の餅みたいな小さい手を静かにさわつて見たがつい力が



はいつたのか急に「わあつ。」と聲をたて、泣き出した。母が「ほらくく。」とせ中をたいてゐる中に又しもねむつてしまつた。

あゝなんと無邪氣な姿だらう。だんく深くね入るのか呼吸がかすかになつた。しばらくじつと見てゐたがまだこわい夢でも見てゐるのだらう。折々手足をぢぢめ、かるくこふしをにぎつて、息を止めたりながくしたりする。又度々すゝり泣をしたり、笑つたりしてゐる。

母は僕と一しよにこれを見てゐたが、思ひ出したように次の如くいつた。

「小さい子供はうぶすな神がついてゐて夜になると泣かせたり笑はせたりするのだ。」と、ほんとうに、そうかも知れない。見れば見るほど美しい顔をしてゐる。あゝ何とかはいらしいこと、岩夫のね顔。

## 天盃をいたゞく私のお祖父さん

千葉縣市原郡高瀧尋常高等小學校

尋六 積田まさ

今年のお目出たい御即位式にあたり、八十歳以上の年寄りには天盃をいたゞくとの事である。うちのお祖父さんは八十四歳なので、其の仲間にはいつたのを大層喜んで、毎日く指を折つて楽しんで居る。お祖父さんは中々丈夫で去年まで毎日草履を賣る程澤山造つて居た。その草履はまだ澤山残つて

居る。去年友達の草履を造つてやつたら其の家の人は「珍しい年寄りが造つたのであるから有難くしてはけない」と言つて神棚へ上げてあるさうだ。私がお祖父さんに話したら大變喜んでアハハ——と笑ふばかりであつた。お祖父さんは指を折る度に「おれは天盃で御大禮の祝の酒をのみたいがそれまで此の世へ居られるかどうか」と言ふので、私が「お祖父さんは今そんなに丈夫で居るのになどうしてそんな事があるものですか、もう五六年は大丈夫ですよ」と言ふと、涙を流してアハハ——と笑ふばかりである。

## 中禪寺まで

茨城県猿島郡新郷小學校

尋六 北島龍之助

八月十八日僕等三人は日光へ行く爲に朝早く家を出發した。胸には嬉しさでいつばいで、自分は歩いてゐるのか歩かないでゐるのか少しも分らない。

やがて栗橋に着いた。まだやつと起きた頃でションとしてゐる。おぢいさんと見さんは「あゝ熱い」と言ひながら汗をふいてゐた。

停車場に着いて見るとまだ誰一人來てゐない。

時々驛内の電話が思ひだしたやうにデリデリと音を立てゝゐた。時計を見ると汽車の來るまで



はあと十五分ある。僕はうれしくて、腰をかけてゐられない。あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてゐた。

やがて「下り日光行」と呼ぶ聲がしたので、僕が一番先頭で三人で外へ出た。

それから二三分待つと汽車が来た。汽車は思ひのほかこんでゐた。窓を開けて顔を出すと涼しかった。汽車は氣持よい夏の景色の其の中を眞一文字に進んで行く、まもなく古河驛を通過し北へ北へと進む。

小金井に來た、何時か見さん達と櫻見物に來たことを思ひ出してなつかしい。少し行くとかんべうがたくさんつくつてあつた。見さんに聴いたら「此所等一體はかんべうの産地だ。」と言つた。なんだか急に暗くなつたと思ふと雨が「ざあ／＼」と降つて來た。これでは日光山へ上れないだらうと思ひながら空模様を見つめてゐると又やんだ。

石橋を過ぎて宇都宮に着く。人口七萬餘栃木縣の縣廳や又第十四師團があるのは此所かなと思つた。五分ぐらゐで發車した。

二十分位たつたと思ふと今市に着いた。おぢいさんが

「私等がよく此所に來て材木を買つたものだ。」  
とおつしやつた。

其所を出て汽車は杉並木にかゝる。昔川越の城主松平正綱公の献上した物で今から約三百七八十年前に植ゑたとのことだ。天をつくやうな杉が何本もゾーツと續いて道を暗くしてゐる。

僕等の目ざす日光の山が或は北に或は南に見えるがくれする。

いよ／＼日光に着いた。僕等三人はめい／＼荷物を持つて急いで下りた。雨が降つてゐるので、電車に乗つた。

「チンチン」と音がすると走り出した。杉並木を過ぎ日光の町を通つて神橋の所に出た。大谷川の流ががらがうと物すごい音をたて、流れてゐる。

神橋は朱ぬりの大きい橋で昔勝道上人が大谷が渡れないで困つてゐると突然一匹の大蛇あらはれて向ふ岸へ行つた。上人は驚いておそろしく渡れずゐると、不思議にも山菅が落ち大蛇をかぶせてしまつた。そしてやうやく渡つたといふ傳説があるのもここだと思つた。橋を過ぎて田母澤御用邸の前に出た。電車の中には學生がたくさんゐる。皆テントと米などを重さうにしよつてゐた。やうやく馬返についた。

電車を下りてすぐ自動車に乗つた。いよいよ日光山へ上りはじめた。あんまりあぶなつかしいので目をつぶつてゐた。自動車でもよく上れると思つた。

やがて中禪寺に着いた。雨は止んだ。木立の中を進んで行くところ／＼といふ音が聞えはじめた。おぢいさんが「華嚴の瀧だぞ」とおつしやつたので僕等はかけだした。

直下四十丈中禪寺湖の水が流れて此所に落下するのである。其のながめは壯觀といはうか豪壯といはうかどうして筆や口には言はれない。がう／＼と百雷が一時に鳴るやうな音を立てて落ちて行く。着物がなんだかしめつぽくなつた。多分落ちるしぶきの爲だらう。



其所を出て大きい赤い鳥居をくぐつて町に入った。二階や三階の家がツーツと立ち並んでゐる。宿屋らしい。町の後には男體山が高く天にそびえてゐる。中禪寺湖の水はきれにすんで西方の山々を倒に影をうつしてゐる。

おぢいさんが「お晝を食べやう」とおつしやつたので橋本といふ旅館の二階に上つて晝飯を食べた。

## 水 引 き

茨城縣那珂郡靜尋常高等小學校

尋 六 淺 川 春 江

太陽はまだ廣い田圃を分けへだてなく、白い光で照して居た。

コトコトとかはいい音をたて、田の中へ水が落ちて、それが丁度する込まれる様に稻の向をぬうて次第にひろがつて行く。稻は葉末をゆらく／＼させて、いかにも満足さうでした。近頃めつきりなほつて来たのですが、今日はいつになくよい稻になつたやうに見えます。「かうしておけば一パイに引けるわ。」と思つて少し黒味をおびてゐる程青々した田の面から目を離しました。

すんだ「かなかな」の聲は夕方の静かな空氣の中にひびいて、いかにも涼しさうにきこえて來ます。田圃の上を渡つてくる青い風の間際に、馬方の唄がきこえて來る。多分丘の向ふ側を通つてゐるのでせう。山の下べりをこごみがちにかごを背負つて行く二人の人は、多分草刈の歸りらしい。やがて

それも見えなくなりました。その時ポーツと瓜連の汽笛がひびいて來ました。

日は何時の間にか沈んで、遠くのみだけ赤く映えてゐました。「あゝ。水はどうしたらうか。」私は夢からさめたやうに、田の下の方へ行つて見ました。丁度水は一番下の田まで入つてゐました。「そうだ。もう歸らう。」と思つて歩き出しました。自分の仕事を果した軽いよろこびを感じて、歩いて行く道草には、もうつゆが下りた様にしつとりしてゐました。

薄白い夕もやが静かに流れて、村田の杉森がぼんやりうかび出した。坂下の一軒屋に豆の様な灯がうす赤く光つて居ました。

## 私 の 弟

栃木縣上都賀郡南押原磯尋常小學校

尋 六 鈴 木 キ ク

私の弟は宇一郎といつて誠にきかんぼうです。それでおぢいさんがゐないといつては何時までも泣き続け、お菓子がないといつては又泣く。私の家では非常に困つて居ります。或日のことおぢいさんの後についていつて田のふちに遊んで居りましたが、どうしたことか、田の中につつばいつて泥だらけになつて來て「母ちゃん」といつて泣き出しました。母はすぐ着物を取りかへてやらうとして編の着物を持つて來た。ところが「よい着物でなくてはいやだ。」といつて前よりも一層泣き出しました。



お母さんも困つてよい着物を着せてやりました。ところが間もなく川へ行つてびしょぬれにして來ました。お母さんはおこつてしかりつけました。其の時ちやうどお父さんが歸つて來ましたが、家の中へ入るより早くびたりとなぐりました。それでお母さんは可愛さうになつたのでせう。寢床につれて行つて寢せて來ましたが、それでも困つたやうな顔をしてこんな我まゝな子供では後にえらい人にならないだらうと一人言をいつてゐました。

又或る時はお父さんの帳面に色々なものをむやみに書き付けました。お父さんは何處へ行つてゐたのか、夜おそく歸つて來ました。あくる日それを見つけてました。其の時宇一郎さんは晝寢をしてゐましたが、間もなく起きて、ねむさうな顔でお父さんのそばに行きました。けれどもお父さんは何ともいひませんでした。夜になつてから子供全體茶の間に集りました。其の時帳面を出して「これはたれか宇一郎か」といひますと首を下げてしまひました。それきりお父さん何ともいひませんでした。お母さんと同じやうに誠に困るといつて首をかしげてゐました。

それで時々「齒がいたい」などといひながら、お菓子お菓子といふことがあります。しかし小さい子供をとても可愛がります。赤ちやんなどが行くと、お母さんからお菓子をいたゞいて來てくれる程です。さういふ時には可愛いが、いたづらをしたり我がまゝをする時には自分の弟でもおこりたく又くやしくなります。

こんな子供では後にどんな人になるだらうかと私まで考へます。

## 御大典と國民の覺悟

奈良縣南葛郡御尋常高等小學校

尋 六 吉 原 富 美 子

我が大日本帝國は世界に比類なき國體を有して居る。神武天皇が橿原の宮にて御即位遊ばされてより、二千五百八十八年の間皇統連綿として天壤無窮である。又我國家は一民族たる大和民族よりなり、其の宗家は天照大神の系統たる皇室である。従つて君長、人民との關係は父子の如く、寒夜に御衣を脱がせ給ふた事や、高き家に登りて、「民安かれ」と、思召された事等は即ち其の君臣の情の現れである。今回、

今上天皇は第二百二十四代の帝王にましまし、大正天皇の御跡をつぎ御位につかせ給ふ。御かしこい、今上陛下が我が國を治め給へば、我が國威は益々四海に鳴りひびき、世界第一の強國となり、八千萬の臣民はことごとく眞の君臣一體を意識して、益々忠君愛國の精神を發揚するであらう。殊に我が大和は皇祖發祥の地であるから、此の土地に生れた者は、能く建國の精神を心に體し、益々君の爲國の爲に、眞心を盡す心が必要である。



## 幸 福

三重縣一志郡小原尋常小學校

尋 六 田 口 ヒ サ へ

さうです。

去年の秋でした。

美しく着飾つてゐた山もだん／＼とはだかになつて涼しかつた風も急に冷氣を覺える様になつて來た頃でした。

その頃私は一寸した病氣がもとで、長い間學校を休んで藥をのんでゐました。病氣は肋膜炎でした。肋膜炎がどんなに恐ろしい病氣か知らない私は、いつもの齒痛みとか、腹痛位のものと思つてゐましたので割合に平氣でゐました。

それでも仰向けに寝てゐて、自分の腕の青白く細つて行く手首のあたりを握つて、ぢつとみつめることが度重なる様になつて來ました。すべてが枯れて、落ちて、土になつてしまふ。散つて行く木の葉の一枚一枚をみつめてゐました。

時には枕もとにある雑誌の様なものもみました。いつか先生が文の鑑賞の際賞感といふお話の時に「寝つゝ讀む本の重さにつかれたる手を休めては物を思へり」といふ句をはなして下さいました。

私はこの句を思ひ出す度に、自分の腕をみつめました。すき透る程青白い腕の中にうす氣味の悪い程血のくだがビク／＼と動くのを見て、大切にしていゐた金魚が死んで行くとき、尾のあたりをビリビリと動かした事を思ひ出して、悲しい淋しい氣分になりました。

それ程私は一寸した事でも悲しく物を考へる様になつてゐました。けれども學校の事は少しも思ひ出しませんでした。それでも先生が、とき折見舞に來て下さる日を待つてゐました。

いつも先生は「なにぢきに治るよ」とおつしやつて下さるのでした。少しづつあつた紅葉もみんな散つてしまつて、冷たそうな太陽が西の山に入らうとしてゐる頃でした。

フラ／＼家をぬけ出した私は、家の前のダラ／＼坂を下つて行きました。そこら一面は稲田です。もう稲はみなかりとられてしまつて残つてゐるのは泥にまみれた切株でした。

道は真直に前の山の方に通じてゐます。私はそこに腰を下して何のめあてもなくボンヤリ眺めました。田の中には刈り取る時、ふみにじられた稲の穂が一本落ちて雀がそれをあさつてゐました。

雀が俄に飛び立ちました。私はそばに學校に通つてゐる山本さんがやつて來られるのに氣が付きました。

山本さんは黙つて笑つたさきりすぎて行きました。後をぢつとみてゐた私は又ぼんやりと稲田の畦道を歩いてゐました。



うつむき勝に歩いて行くと、いろ／＼な小さな蟲が目につきました。どの虫もどの虫も元氣よく私の足音がする度に逃げて行きます。何故逃げるのだらうか、やつぱしこんな虫けらでも命が惜しいのだ。寒い冬が来、眞白に降り積る雪の下ですごすこんな虫でも……。私はうす暗くなつた道を一人とぼ／＼歸つて来ました。

自分ながら元氣づいて来たのを感じながら……。

それから一年私はみちがへる程丈夫になりました。

御即位の御大典が行はせられるのも、十一月とき々、私は過ぎ去つた苦しい事を思ひ出すことに丈夫で御大典の式をともし、壽ぐことの出来ることを非常に幸福だと思つてゐます。

## 生れてから今まで

静岡縣小笠郡東山口小學校

尋六 榛 葉 隆

### 一 弱かつた一歳の頃

僕の一ツの頃は、體が弱くて、毎日泣いてばかりゐたさうだ。れかしてもろく／＼寝ず、せんべいや、西洋菓子をくれても、少したべるばかりで乳をのましても多くはのまないで、泣いてゐたさうだ。

お母さんは仕事が出来ないので、守やをやとつておぼはせて、仕事をせつ／＼としたけれど守やが、大變遊びたがりて、僕をおぼらと、すぐ外へ出て遠い川まで遊びにいってしまふ。お母さんが乳をくれる時だと、思つて家へくると、守やはどこいつたのか家中さがしてもぬす、とう／＼お母さんが外へさがしに出

る始末であつたさうだ。

### 二 父のなくなつた二歳の頃

こゆうふうな世話をしたかひがあつて二歳の時は、大分僕の體が丈夫になつたさうだが、其の中に、今度はお父さんが病氣にかかつたので、お母さんはお父さんのかん病を夜晝し、その上僕の方も少し氣をつけねばならなかつたから、お母さんはかんご婦を、一人たのみ、お父さんの事は一切かんご婦に、委かせたけれど、お父さんの病氣はだん／＼重くなるばかりだつた。お母さんは時々お醫者へお父さんの事をききにいつたが、ようだいは、餘りよくない。今まで一人の車引に藥を菅沼さんへ取りにやつたのだが、まにあはなくなつて、それから日坂の馬車屋の與作さんにたのむ事にしたさうだ。

毎日々々朝八時半に頼む事にしたが、あまり毎日々々藥取りをたのむので、馬車屋の與作さんの馬が僕の家の前へ来れば與作さんが馬をとめなくてもひとりとどまるやうになつたさうだ。

けれどもお父さんの病氣は藥がきいて呉れなかつたと見えて、大正六年〇〇月〇〇日にと／＼なくなつて、二度とあへない旅路に上つていかれた。

お母さんや、姉いさんはどんなにか悲しんだ事だらうに、僕はその時はまだたつた二歳で、悲しい事も、うれしい事も、知らないから、泣いてゐたか、おこつてゐたかしらないが、お母さんは、お念佛の時や、四十九日、又一週忌や、二週忌には僕をかゝへてどんなにか思ひ出された事だらうと今でも思ふ。

### 三 中耳炎を病んだ三歳の頃

お母さんは、その悲しいのをかまんして、あとに隠だけとは、一生懸命僕を育てて立派な人にしたとい、世話をした下さつた。

其のかがあつて三ツの頃は二ツの頃より少し丈夫になつて来たけど、お母さんはなほ一生懸命に僕を世話してくれてゐると其の最中に、僕は中耳炎になつてしまつた。

餘り泣くので、お母さんは心配して、耳を見たら耳の中がふつくりはれて、今にも耳の穴がふさがりさうだつたので、針みた様な針金に綿をつけて其の先に藥をつけて、耳の中をがし／＼やつてうみを出さうとしたが、出ないので、とう／＼お母さんは、鳥田の耳をせんもんにしてゐる醫者の所へいくと、醫者が「これはきつと中耳炎であらうと思ひます」といつて、すぐ又言葉をついで、

「後二日たつと、うみが出るから」といつたさうだ。

お母さんは僕をおぶつて家に歸り、僕を寝かして二日のたつのを待つてゐたが、その間に僕の耳の穴を見たり、體の熱を檢温器ではかつて見たりして、僕の體の様子を心配してゐたさうだ。

やがて二日がきた。

お母さんは僕をおぶつて暑い八月の最中を、僕の家から一里の山坂を堀之内へかよい、堀之内から汽車にのつて、毎日々々鳥田の耳醫者へかよつたさうだ。

一番初めの日手術をする時は耳の中へ熱い藥を入れた、其れがじゆく／＼といつて今にも耳の中がこげさうにいたかつたのだらう、僕があたりたけの聲を出して泣いたので、醫者や、お母さんが、大へん笑つたといふ事だ。



その日の手術はすんだ。

耳の中へ白いだつしめんを入れてうみが流れ出ないやうにして、此の日の手術はおはつたさうだ。

それから又汽車にのつて、金谷のえきを通り、長いトンネルへ入つて堀之内へ来て、又そこからお母さんは、暑いのに僕をせほつて堀之内の近道を、歸へつたさうだ。

こんどは島田の醫者へ行く日が一日おきとなつたので、お母さんは餘り仕事をする日がない。

一日行く日がいけく早くなつたのだが、お母さんは、毎日僕をおぶつて、堀之内から島田の醫者へ通つた。

かういうふうに通つたかいがあつて、二週間目にはきれいなほつた。

このときはお母さんも大そううれしかつたさうだ。

僕も耳の中がさつぱりして、氣持がよくなつたと見えて、それから毎日ふとんの上で笑つたり、お菓子をたべたりして、遊そんさうだ。僕が中耳炎になつたおかげで大分お金が減つたので、お母さんはそれから毎日島へ出て、僕が耳で醫者にかゝつた時の、お金をとりかへさうと、一生懸命に働いたさうだ。僕が日に日に丈夫になつていくにしたがつて、三歳の六月頃には少しよちよち歩けるやうになつたさうだ。

この頃お母さんは毎日けがのない様に僕を氣をつけてゐたさうだ。

僕が歩き出すと寝たり、おぶさつたり、だかさつたりするのを、きらつて、たゞ歩きたがつてしようがなかつたから、お母さんはそ

の頃十三歳になる姉さんがゐたので、その姉さんに守をさせたさうだ。

#### 四 雷を太鼓だと思つてゐた四歳頃

僕が丈夫になつて、四歳となつた二月頃、よく雷がなつて、雨が

大變降る中で雷が大そうひどくなつたさうだ。

その時は雷だといふ事をしらないから、雷を太鼓と思つてよく姉さんに、

「太こ見にい、太こ見にい」といつてうるさいくらゐせちがつたので、お母さんが「それじゃすゞ代雷の音をきかせておやり」といつて姉さんに僕をおぶはせて、基ちゃんとの、あぜまで姉さんが雷の音をきかせる爲に出たさうだ。

その時僕が雷を、

「たいこは何處たいこは何處」といつて姉さんをひどく困らせたさうだ。僕はしきりに「たいこはどこ、たいこはどこ」といふが姉

さんは雷がこはくて、いな光がひどく光ると急いで家へとびこんで、「お母さん私こはくてしようがないも」といふと、お母さんが、

「むりはないわ一人で雨の降る中で見せてゐるのだものもういよ」といつて、僕をおろしてごはんをたべる所のえんがはで、雷を見せられる事にしたさうだ。

又其の後も僕は雷がなる度に姉さんにおぶさつては、基ちゃんの所の田のあぜできかせてもらつては、一人でニコニコ笑つてゐたさうだ。

ほんとに僕が雷を太鼓だといつて、喜んだのは不思議だ。それから五六日たつて僕はお母さんと姉さんとで、島へ朝早くい

つた時は姉さんにおぶさつてお母さんの後をついていつた。

お母さんはこし前といふ島につくとすぐ大根の根の所を少し掘り、こやしをいつかけてもよい様にしておいて、小豆のみのつたのを一々小さなかごの中へ入れては、一通り見て歩いた。

僕と姉さんはやはらかい草のぼしや／＼はへてゐる所へすはり、半間位前にある松の葉をとつてくさり形になつて僕の首の廻りへつるさげては、僕を喜ばせてくれたさうだ。

お母さんは二通目の小豆を見て廻つて、ゐたが、

「すゞ代ももうお晝になるからあなた方は一足先にお歸り、お母さんは後から行くから」といつたので、姉さんは僕をおぶつて、そのこし前の島の前の小道をおりはじめた。僕はさつきやはらかい草の上でこしらへてもらつた、松の葉をいじくつて、一人で姉さんの背の中の上で、喜んでばた／＼して、何度も姉さんの、背中から落ちさうになつたさうだ。

それから家へついて姉さんがお湯をわかつてお母さんの歸るのをまつてゐた。

やがてお母さんが歸ると姉さんとお母さんとで楽しくおぜんについてごはんをたべはじめたのだつたが、その時僕がおちやわんを箸でた／＼と、

「てん／＼」と音がするので面白がつて、うるさい位やたらにた／＼廻つたさうだ。

又晩の御はんをたべる時には僕が茶碗と茶碗とで、「がちゃ／＼」とやつて、となりの家でやかましい位た／＼いた、いふことだ。

僕は四ツの終りまで乳をのんださうだ。

#### 五 赤い鼻緒のすきだつた五歳の頃

こんな風に遊んだりたべたりしてやがて五ツになつた。

五ツの初めの四月頃おほくきの山へ姉さんとお母さんといつしよにわらびとりについた時、姉さんは僕をおぶつて、あぶなくない所のわらびを取つてゐたが、姉さんは少しあきたと見えて、僕をおぶつて、わりに深い谷間の小道をつたつて谷へおりていつた。

その時ははのがかはいてゐたから姉さんの背中へ、ないてあばれたらきのふ買つて来てもらつたばかりの草りを、少し深い谷間の穴に落してしまつた。

姉さんはその草りをひらをうと思つて、穴をのぞいたがあまり深いので拾ふのをやめて、谷間の小道をのぼつてお母さんの所へいつて、

「お母さん隆ちゃんの水をほしがつてあばれたので谷間の穴へ草りを落してしまつたよ」といつたらばお母さんが、

「馬鹿だれえそんな所へいつて、水を見せるからだよ、まあいよよ、又あした買つてやるからいよよ」といつて又相變らずわらびを取つてゐる。

姉さんはしよんぼりとして、僕をおぶつて一とこばかり見つめてゐる。

僕はきのう買つてもらつたばかりの、草りを落したので、姉さんの背中をやつきりまぎれに、あばれてやつたが、どうにもしようがない。



姉さんは時々僕を力まかせにぐいとゆるす、その度僕はひどくわん／＼泣くのでとう／＼姉さんは僕を、土の上におろした。僕はうれしかったので、そこらのたんぼや草をむしるにむ中になつてさつきのきげんはどこへやら。

姉さんはいたどりを取りにいってぬない。

僕はそれでも平気で、草をむしつたりして遊んだ。

やがて姉さんがいたどりを取つて来て、僕にたぶきせてくれた。

僕はいたどりがうまいので、二三本もたべた。お母あさんは二ツのふるしきにわらびを一ぱいに、とつたので僕を姉さんにおぶはせた。

姉さんと僕は先に山の坂道を氣をつけながらおりて来た、

お母さんはわらびを背中につけておりて来た。やがてお母さんと

一しよになつて、わらびの話や僕の話をして、楽しく山の小道をおりて来た。さか川までくると、水がきれいだったので僕の顔をお母

さんが洗つてくれた。

それから僕ははだして一人で歩いて家まで来た。

家へ来るとすぐ御はんにしてたべた。

ほんとに御はんがうまかつた。

ごはんがすんでおちつくくと山でなくした赤緒のぞうりが馬鹿にお

しくなつた。

その頃の僕は赤緒がすきでぞうりもげたも赤緒ののをいつも買つ

てもらつてゐた。

かうしてだん／＼丈夫になつてやがて六ツになつた。

## 六 いたづらだつた六、七歳の頃

六ツになつた十月大きくおちきのお年忌だつたので、僕はおあさんにつれられて、おほくきにいふた。

その時僕は少し頭がいたかつた。

歸りがけおほくきの、おくらの前まで来ると、清作さんが

「隆ちゃん柿を持つておいでなさい」といふた。

僕はほしくてたまらなかつたが、お母さんが

「頭がいたくて、たべる氣がないだらうから今度いたゞきます」といふて僕の手をひいて大通へ出た。僕はほんとに六つ頃はイヤし

んぼうだつたんだ。

それから五六日たつて、佐次郎さんと、いなごをつかまへにい

た時、佐次郎さんが

「隆ちゃん方にやあ親類があるか」といふたので、

「あらんぢやい」といばつた日ぶりといつたら、佐次郎さんが、

「そいぢやあいくつある？」といふたので、

「二十あらい」とうそ出まかせにいふたら、

「馬鹿野郎そんないあるもんだへおらん方だつて五ツきしじやん

か、そんないあつてたまるもんかへ」といふたので僕はやつきりし

て、

「何こきやん佐んじい」といふたら、

「ふんこきやあむけらあ、」といふたので僕が佐次郎さんの頭をげ

んこでなぐつたら、佐次郎さんが、

「いたかあないはあ、そんなやつはありんどにけられて死んじま

へ」と、いつたからこんどはほうたんを、力一ぱいなぐつたら、

「わーん」と大きな聲を出して泣いて自分の家へとんでいつてし

まつた。

僕は佐次郎さんのお父さんがおこるかと思つて帽子で顔をかくし

て、家へとんで歸り家の中でびく／＼しながら、

「おこつちやこんかしら」とむねをどき／＼させて、柱のそばで

立つてゐたら、お母さんが、

「何をしてゐるのだね」といつたが、しかられるかと思つてだま

つてゐたらお母さんは、

「馬鹿だれえ」といつてどこかえいつてしまつた。

僕は夕方までびく／＼してゐたがだれもこなかつたのでやつと安

心して、外へ出て、となりの信ちゃんをよんで来て、おんばごつこ

をしはじめた。

僕が見さん、信ちゃんが弟になつて、一しよに、鐵砲をもつて、

「二人で鳥をうつたらえ物があるなあ」と僕が、いばりかあつて

いつたら、信ちゃんが

「こんな、へばかりゆうどぢやあ、じつとしてゐる五百貫の石だ

つてあたりやあせまアハ、ハ、ハ、」

と大きな聲で笑つた、僕は「だめだいそんな事をいつちやあおん

ばんごつこにや、なりやせんじやないかそんな事いいなあ」と僕は

すましていつたような氣がした。

少したつと、

「こんなこんは、やめざあ」と信ちゃんがいつたので、僕も

「やめざあ」といつて二人でやめてしまつた。

## 七 學校へあがつた八歳の頃

八ツになつたらお母さんが、

「隆もうあと三月たつと學校に行くだよ」といつた。僕が

「學校つていゝ所かれ悪い所ならいやべーだ」といつたら、

「そりやあいゝ所だよ先生が毎日山へ遊びにつれていつてくれる

よ」といつたので、僕はなんだか、いゝ所の様な氣がしたから、

「ふんそんないゝ所？うれしいな」といつてざしき中とび廻つた

ら、

「そんなにとぶとごみがたつてたまらないよ」といつたからやめ

て、今度は昨日靜岡で買つてもらつた、新式の汽車のおもちやをし

きいの上へもつて来て、機關車のぜんまいをまいて、しきいの下を

はしらせたら、うまく走つたが、しきいからとびだして障子にぶつ

かつて障子をやぶつて庭へとび出してしまつた。

急いで障子をあげたら機關車はちやんと、ころばつて、

「ざーざー」とぜんまいを、ほどいてゐる。僕は急いで、それを

手で、とめて箱の中へしまつて、たんすの上へおいた。だん／＼月

日がたつた。九月十六日の朝おきるとすぐよつちやんが、

「隆ちゃん、あみをうちにくか」といつたので眠いのもわすれ

て、とび起きて僕はバケツをもつて、能つちやんの後からついてい

つた。

間もなく川につき、よつちやんが投網をうつ用意をした。

僕は後の河原で

「どうか鮎がはいればよいがなあ」とだまつて見てゐた。

やがてよつちやんが、とあみをうつた。

間もなくそろ／＼とあみを引き上げはじめた。



たまにはヤツあみの目からとび出て、水に入つてしまふのもある。上げて見たら赤土とはや六匹とふな十二匹とずいご二十三匹入つた。

よつちやんはほほえんで、

「隆ちやん朝は入るなあ」とうれしきうにいつた。

僕も、

「朝の方がづつとはいるなあ」とうれしまぎれにいつた。

又能つちやんがとあみをうつつた。

こんどは鮎の七寸位の大きなやつと、ボト八匹とカニが一匹と、ずいごが十五匹はいつた。能つちやんは五六度あみをうつつた。

家へ歸つて数へて見たら皆で百十三匹だつた。

お母さんは澤山とれたのを喜んでゐた。

僕がはらはたを出して能つちやんは、串に魚をさして火でやいた。

中々いゝ匂がする。やがてやけた。

僕と能つちやんとて鮎の一匹の二ツに切り御はんのおかずの醬油をつけてたべた。

非常にうまかつた。

少したつと能つちやんは、中學校へ自転車に乗つて行つてしまつた。

僕は一人で後の残りのさかなを手でむしくつていゝみだけ醬油をつけてたべた。

お母さんも少したべたけれど、僕は一人になつた上、遊ぶ人がないので佐次郎さんをよんで遊んだ。

お母さんに

「これはなんだね」ときくと、

「それは悪い友だちが犬をいぢめてゐるのを見た一人の子が、

『かわいそうだから、犬をはなしておやり、又學校がおくれるよ』

といつてやめさせてゐる所だよ、」といつたが、僕はその時餘りよく話を知らないから唯、

「うん／＼」といつてゐた。

僕はそれよりあした學校へいくのがうれしくてたまらんなんだ。

夜になつてもろく／＼寝られなかつた。

朝は早くから學校へ行くしたくをして昔んなの來るのを待つてゐた。

やがてみんなが來たので一しよにいかうとすると、お母さんは、

「隆をおたのみ申します、學校の事もまだよく知らないから」

といつて僕をみんなの仲間へ入れてくれた。

僕はツツクやくつの新しいのを買つてもらつてうれしのでツツクのはしをいじつたり、くつのヒモのほどけるのを結び直したりしては歩いた。

間もなく學校へ來た。

教室へ入ると何處へツツクを置いていゝのかわからないから、宮村の五年の一郎ちやんにきいたら、

「机の横へ掛けておきやあいゝよ」といつた。

僕は言はれた通りに机の横へ掛けて置いた。

りんがなつた。

女の先生が來た。

學校へ上る五六日前お母さんは、僕を本所の伊達さんといふ醫者の家へつれていつた。

そして左の手にほうそを六ツうゑて貰つた。僕はその時いたい

かと思つて、目をつぶつてうゑる所も見ずじつとしてゐたら、お母

さんが

「そんなに目をつぶらなくても、なんにもいたくないよ」とい

つたが何んだかいたさうなので、そんな事は耳にもかけずたゞ目

をつぶつて、靜かにしてゐた。

うゑてしまふとそつと着物を左の手にかぶせて、そつとげんくわ

んを下りた。

家へ歸る時何んだか手がちく／＼するので大變弱つた。

間もなく家につき着物をそつとつて見たら、もう少しうんでゐ

た。

僕は何んだかいたさうでしようがない。

「ほうそうつていたいもんだね」とお母さんにきくと、

「お母さんなんかほうそをうゑる時少しもいたくなかつたよ、隆

は男のくせに弱虫だね」

といつた。僕は

「そんなに弱かあないわ」といつておこつてやつた。

それから四日程たつたので學校へ行つて石板や本を買つて家に歸

つた。

家にかへつて、修身を見ると子どもが二三人で犬をいぢめてゐる

のが目にはいつた。

みんな一所になだれをうつて教室へ入つた。間もなく男の先生や

女の先生が八九人はいつて來た。ひげを鼻の下へはやした、ゑらそ

うな先生が

「梅葉隆さん」と大きな聲でよんだ。

「ハイ」と大きな聲で返事したら、

「えらい／＼大きな聲で返事をしてえらい」とほめて呉れたので、

うれしくてたまらなかつた。

又三度よんだがやはり僕が大きな聲で返事をしたので、大變にほ

められた。

そしてその日は、返事のならい方で終つた。

そのあくる日は今度は女の先生が一人來ただけであつた。

「私は川島先生です。みんなわすれてはいけませんよ」といつた。

僕らは大きな聲で

「はい」の返事したら、

「昨日いつた先生の言葉を忘れませんね」と言つてほめてくれた。

その日は、ハナ、ハト、マメ、とおそはつて歸つた。

歸るとすぐ、

「お母さん今日川島先生といふ先生に、ハナ、ハトとおしへても

らつたよ」といつたら、

「そうそれはよかつたね」といつて僕の頭をなでてくれた。

そしてお母さんに今日ならつた所をおそはつた。

そのあくる日はひげをはやした先生が來て、

「みんなたんぼゝを石板にかこう、よく出來た人には、赤い〇を

あげるよ、みんなよくかきなさいよ」といつて、僕ら一同をおだて



た。

僕がかき上げたら、  
「隆さんのたんぼはよく出来たがじくには出来てゐなくてはたんぼにならないよ」

といつて一ツ〇をくれた。

僕は「せつかく出来たのに一ツか」とやつきりして皆消してしまつた。

「今度はおそなへをかいて御らん」といつた。僕は小さいあんもろを一ツ書きその下に大きなもちを一ツかき又其の下に板をかいた。

そしてだまつて机の上へ手をつけてすましてゐたら、又校長先生が来て、

「今度はよく出来た」といつて石板に大きな〇を三ツくれた。

僕はそれを大事にツツクの中へしまい、静かにしてゐたら鈴がなつた。

運動場へとび出して、土の上に大きくハナと書いたら、高等二年の男の衆が、

「隆ちゃんうまいなあ」といつた。

おだてにのつて又ハナ、ハナとかいたら、高等二年の衆が、

「隆ちゃんはほんとにうまいなあ」とほめてくれた。

僕はほほゑんで東の方へとんでいつた。

又教室へはいつたら、今度はさつき川島先生が来て手工を教へてくれた。

その手工は機の花で、なか／＼折り方がむづかしかつた。

よう／＼折れた。

次には切り方をおそはつたから先に鉛筆ですじをかきそのすじをつたつてはきみてそろそろすじの後をきつて、

「どんなもんだへ」と思つて開いて見たら、機の花が出来た。

畫用紙にはつてその横へ、

「榛葉隆」とかいて出したら、

「隆さんのはよく出来たね」といつて、花の横へ甲上とかいてくれた。

それを修身の本の間へさげて、大事に家へもつて行つてお母さんにほめてもらおうと、楽しんで机上へ手をつけて、足をびんとしてゐた。

先生が、

「お行儀のいゝ人から早く歸らかすよ」といつた。

みんなは一どに兩手を机の上へのばしてびんとしてしまつた。

川島先生が、

「みんなよくなつて早く歸らかす人がないね、ちや早く出ましろ」といつて立たせて出はじめた。僕はうれしのでこ／＼しながらみんなの後からついていつた。

僕があんまりだまつてゐたのでみんなが、

「隆しさん馬鹿にだまつてゐるなあちつたあものをいえやいおらがさびしいなあ」といつた。

僕はしかたなしに

「おほそいじやあしてやらあ」といつてまただまつてゐた。

僕はうれしくて早く家へかへりたいたのでしらす／＼だまつてしまつたのだ。

家へついてしゆ工の花を見せたらお母さんが、

「おほよく出来たえらい／＼」といつて大へんほめてくれた。

それから僕は一人でその甲上をもちつた、機の花びらを見つめてゐたが、手工をお母さんのたんすの引出へしまつてだまつて笑つた。

それからちきに宮の前の人達と仲が悪くなつた。

或る朝宮の前の良平さんと廣ちゃんとが宮の前の衆に手で肩につかまらせ向いの川のしゆうを間に入れないう様にして来た。

僕は、はいつてもいゝのだらうと、思つてはいたら、利いちゃんが、

「出よ／＼馬鹿野郎」といつて一旦龜ちゃんの後へはいつた僕を

つき出した。

やつきりして、又はいつたら良平さんが、

「陸つかあ出よつていつたら出よ」といつて、僕を石垣の方へつき出した。僕は

「變なやつだ。おらが何もしないのに何もいゝなし僕等を八分に

しやあがつて」と思つたが、口に出すとひどいめに合ふからと思つてだまつてゐた。

宮の前の衆は、

「がや／＼」いひながら僕らの方を見ながら行つてしまつた。

田中のまあちゃん

「いゝはあいつらはいいつらでならんでいつたで、おらもおらで

ならんでいかざあ」と僕らをならばせてくれた。

龜ちゃんが宮の前のしゆうといつてしまつたので僕がせんとろになつてしまつた。

僕は

「あの衆等がどこにかくれてゐてとびだすかも知れない」と思ひながらまがりやの所まで来ると五條橋の下に赤い帽子が見えた。

僕は思はず聲をあげやうとしたがやつとがまんした。

おつかなくて思ふやうに足が出ないが、うんと力を入れて歩いて

やつた。

後の方で、

「がや」と人聲がするので振り向いて見たら、まあちゃんや、安

つちやんが良平さんとけんくわをしてゐた。

良平さんは、

「おりやは今年でできがるだでうんとけんかをせにやあ気がす

まなへ」と悪言をいつてゐる。まあちゃんや良平さんにぼはれてど

ん／＼鹽井川原の方までいく安つちやんは、その後から良平さんを

ぼいながらついていく、やつとやつちやんが良平さんにおつつか

かと思ふと急に良平さんが後をむき、

「やい安つちやんよくおれをぼつてきやあがつたな」といゝなが

らいきなり安つちやんをどこかの家の石だんの上へくみ伏せた。

安つちやんは手早く先のとがった、石を拾ひその石で良平さんの

ほうたんをかした。

見てゐる中にそこがはれ上り間もなく血がぼたり／＼とひつきり

なしに落ち初めた。

良平さんは石でかちられた所がいたので血が落ちだすとすぐ、



「やいまいつたか」といつた。やつちやんは、

「ちきしよあやまらんぢやい」と大きな聲でどなつた。

良平さんはすぐ安つちやんのむねから手をはなして、すうと立つて信ちやんの所へ行き、

「やい紙があるか」といつて紙をもらひ、そのかみてほうたんの血をふき、

「やいお前らよくなればよ」といつて、並ばせてすぐ行つてしまつた。

僕らはまあちやんが、

「よくならんでいけな」といつたので出来るだけよく並んだ。

お店の前まで来ると宮の前のしゆうがおひな様を見てゐた。

まあちやんも一寸見てゐた。

僕は小さな、ちんころ犬のひな様にばかり氣をとられて見てゐたらまあちやん達はもう七八間前についてゐた。

學校へ来たらまあちやんが

「あしたはみんな隆ちやん方へ集れよいか忘れちやいかんぞ」といつた。

二時間けいこをしてかえつた。

かへりがけ僕とかあちやんはいつも一しよだのに、今日は朝良平さんたちがけんかをしたので僕等も別になつてびく／＼しながら東海道を歸つた。

家へ歸つて朝けんかをした事や、宮の前の衆が並ばしてくれなんだ事も一ツ残らず話したら、お母さんが

「ほんとに良平さんといふ子はらんぼうでしようがない去年能つ

ちやんもひどく良平さんにやられたよ」といつた。

次の朝は、まあちやんのいつた言葉を守つて家に入りつてゐた。直に道場の基つちやんや、しげちやんや、田中のまあちやん達が来た。

基つちやんや重ちやんはこはいひので、

「まあちやあ寺ヶ谷の方の近道を廻るか」といつたがまあちやんは、

「いよあいつらがいつちやつてからで澤山だ。學校の時間がおくれるかもしれないがまんしてもらう」といつてゐる所へ、宮の前の衆が僕の家の前を通りかけた。

まあちやんは、

「みんな静かにしてゐよ、又ひどい目にあふぞ」といつて僕等に言ひ聞かせた。

「うん」と力のない聲で、返事をした。

もういつてしまつたと思つて来たたら、高橋の長田といふ家の松の木のかげにかくれてゐた。こはくてしやうがないが、後でまあちやんが、

「隆ちやんどうでもいよで、どん／＼いつてしまへ」といつたので僕は横を見ず、どん／＼いそいだら後で、

「まあちやあ、はあけんかはやめざあ一しよにならんでいかざあ」と僕等を一所にならばしてくれだ。

僕はうれしくてたまらなかつた。

そして宮の前のしゆうと一所に話をしながら、楽しく學校へ来た。かへりには龜ちやんと手をつないで、今日おそはつた事や、東海

道の松の枝振りのいよのや、悪いのを數へたりしてかへつた。

能つちやんに、

「はあこないだしたけんかが、今日やうやくをきまつた。そりやうれしくてたまらなんだつけ」と能つちやんに話したら、

「そうかそりやあよかつたなあ、おれも時々見ておつかなく感じた。まあ伸直りの出来たのは何よりだ」といつてくれた。

それから恐いといふ事を感じない様になつた。

十一月の中頃になると生れてから一度もしなかつたはしかに掛つた。

お母さんは、

「隆、はしかはうつる物だから學校へいつて、友達にうつると大變だから學校へいきたからうが直るまでは靜かに寝ておいで」と度々いふので、

「今日まで一日も休まず、出席したのに」と思つたがもしひどくなつて死ぬと二度と學校へいけないと思つて、お母さんの言ふ通りにしてふとんをして、おとなしく寝たが熱が日に／＼増し、三十八度位まで上つた。

熱くて／＼しようがないので、ふとんをぬごうとしたら、お母さんが

「そんなにふとんをぬぐと餘計ひどくなりますよ」といつたので、顔や汗水だらけて、とても氣持の悪いのを我慢してゐた。

四日目にやつと熱が少し下つて、體が涼しくなつたが、まだ起られなかつた。

いよ加減には床から一べん位出して涼まかしてくれてもよかりさ

うに思つたがさう思ふように行かなかつた。

が六日目にはもう熱が何もないといつてもよい位になつたので大變うれしかつた。

七日目に起きてみたらもうどこへさはずとも何もいたくも、いかくもなかつたが、昨夜の八時頃から降り出した雨の、やむのをまつてゐたがやみそうもないので、小さなマントを着て家を出ようとしたら、お母さんが

「からかきを上手にさしてなるだけ體がぬれないようにするだよいよかれ」といつた。

僕はなるだけぬれないやうに上手にさして歩いた。

ころびそうでしようがなかつたが、ようやく學校へ来た。

始る前、川島先生が

「隆さんどうして學校を休んだの」といつたので

「はしかで休だも」といつたら

「そうはしかなら誰でも生れてから一べんはやるから休んだとならないからいよよ」といつた。

その日歸つてお母さんに話したら、お母さんが

「それはよかつたねお母さんも今朝いつて元氣を出させようと思つて外に出たがあなた方がぬなかつたのでお母さんはやめたのよ」と言つて僕を喜ばせてくれた。

いよ／＼めんじやう式の日になつた。

僕等は一番前で大きい衆がめんじやうをもらふのがよく見えた。僕の番になると佐藤先生が、榛葉隆何々と呼んだ。

僕ははじめになつて先ずお客さまにあいさつし、先生方にあいさ



つをし、校長先生の所へ五六歩進み出たそこで校長先生におじぎをして両手で半紙一たばれで十帖もありさうなのを六ツもらうてさがり校長先生にあいさつをした。

腰を掛けてよく落着と何だか忘れた様な気がする、よく／＼考へてみるとお客さんと先生方とのあいさつを忘れてゐるのだ。

僕はもうおかしくてたまらなかつた。

ふと何げなく顔を上げて見たら、川島先生が一々下を向いて、「くすくす」と笑つてゐる。

僕は餘りおかしくてだまつて、笑つたので、顔が熱くなつた。

早くお母さんにほめられようと思つて、直君と二人で、

「こんなにたんともらやあ此の學校さがるまで字が習へるなあ」と喜びながら學校の門を出ようとしたら川島先生が僕と直君の名まへをよんだので、僕は何んだらうと思つて、いつて見ると先生は笑ひながら、

「其れを持つて行くとなとの人がなんにも貰へなくなるよ、それはいみなあなた方にあげる物じやないよ」と笑つた。

僕と直君は互に顔を見合せてあつてに取られてしまつた。

#### 八 二年の頃

二年になつて二三日たつと、僕らを教へてくれた川島先生が、此の東山口の學校をお下りになるといふうはさを聞いた。うはさはうそではなかつた。

代りの先生は洋服をきた。活潑な北川先生だつた。

二年の受持にきまつた。

教室へ入ると北川先生は、

「よく出来さうね」といつて僕等の顔一般を見廻した。

そして、

「あなた方はどこを習ひました。」

といつた。

「一、お祭です」といつたら

「あゝさうですかよくはつきり答へましたね」とほめた。僕はなか／＼先生だと思つた。

#### 九 三年の頃

三年になつたら齋藤先生といふおとなしい男の先生に代つたが五日でおさがりになつてしまつた。

「今度は東山の落合先生が上るそうだ」といふ事が、耳にはいつたがその落合先生は七月時分でなければ上らないといつてゐた。

その間僕らの組は校長先生が教へて下さる様になつた。

「校長先生はきびしいで、おつかないぞ」口々にこんな事をいつてゐた。いよ／＼校長先生におそはる日が来た。

一時間目丁度算術だ。

校長先生が来た。

級長がれいをかけた。

「算術は今どこだへ」と顔に赤いすじを入れて僕等の方を見た。

僕はほんとにこはかつた。

「加法です」といふと

「何え」とにがい顔をした。

もう一べん、

「加法です」といつたら、

「そうかえよし／＼」と苦い顔をしていつた。

又だまつてゐると、

「何頁の何番だえ」と今度はニコ／＼した顔で、いつた。

「八頁の三番です」と答へたら、

「あゝさうかへ」とさつきよりもちつとニコ／＼した顔で返事をした。

僕も其の時うれしかつた。

出てからみんなで

「わりにおつかない校長先生だな」と話しあつてゐた。

僕はその時は黙つてみんなの話をきいて、靜にして一人で色々な事を考へてゐた。

その日から毎日校長先生におそはる事になつた。

或時各部落の競走があつた時僕と榮ちゃんとして二人用の腰掛をもつて運動場へ出た。

少し見てゐると、校長先生が、

「みんな教室の前へ集る」といつたので、いかうとしたら、

「腰掛も一所にもつておいで」といつた。

榮ちゃんがもどつてこないで、大きな聲で

「榮ちゃん／＼腰掛をもたにやあおえんじやあないか」といつたら校長先生が、

「隆何をいふ一人で腰掛の一ツ位何んでもないじやあないかそこに少し立つてゐなさい」

といつてすた／＼教室へいつてしまつた。「立つてゐよ」といはれたが、一人ではさびしいので、腰掛をも

つて教室の前へいつたら

「隆誰がはいれといつたえ」といつた。

だまつてゐたら、

「これからしちやあいかんにえ」といつて許してくれた。

僕はそれから言葉を／＼しむ様になつた。

その中にお祭が来た。

「今年はお祭を出して聲をからしてやらうかと思つて、屋臺を引く時大きな聲でやたらに、

「ひつちやこら／＼」と聲を出した。

あしたの學校へいつて聲を出す時あんなりのぼせたと思はれてとてもつらかつた。

#### 十 其の後

四年になつてどなた先生が僕等を受持つてくれるかと思つたら兵士にいつてゐる大石先生だが九月頃でなければかへらないので

その間又きらいな校長先生におそはらなくてはならないやうになつた。

× × ×

五年になつたら大場先生におそはる事になつたが大場先生は七八日僕らをおしへて下さつてこの學校をおやめになつてしまつた。

其の代りは荻野先生だつた。

先生は僕等の組をもつて下さる先生だつた。

× × ×

體はわりに小さいが年は十三、六年になつた。なか／＼學校の仕事も家の仕事も多くなつて来た。







へかへるのだ。このことを考へると、胸も張りさけるやうだ。弟の顔が目の前へまぼろしとなつてうかぶ。この時はもう涙で目はおぼつた。「いや泣くな〜」と思へば思ふほど涙がこみあげてくるばかりだ。

ぼた〜顔をすべる涙は地にちた……。

うしろから伯母さんが「どうしたの」と聞いた。涙をかくして「なんでもないよ。」と僕は答へた。伯母さんは目の赤くなつたのをごらんになつたと見え「泣いてはいけません。忠彦とわかれるのがつらいでせう。又いつかはあへる時があります。」僕は「わつ」と聲を上げて泣いてしまつた。

自動車が来たので乗つた。だが忠彦が見えない。僕は弟を見付けるやうに窓の外に頭を出した。おばあさんが忠彦を抱いて自動車の所まで来て下さつた。たゞ忠彦の顔をしゆん間見たゞけであとは顔や手でおぼつてしまつた。伯父さんが「泣くな〜」となだめて下さつた。泣くのはよさう〜と思へば思ふほど涙は込み上げてくる。やうやく忘れることが出来た。顔を上げて見た。自動車はしづかに田圃道を走つてゐた。

なにかの希望をもつがごとく……。

土浦驛へ、土浦驛へと自動車は急ぐ。

## 錢入を落して

滋賀縣栗太郡志津尋常高等小學校

尋六 高岡良輔

夏休みに京都から歸りの出来事である。

日は西の山にはいつて、邊一面はぼうとした夕方に、汽車は草津驛に着いた。僕は荷物を持つて汽車から降りた。

人々に交つて棧橋の所まで来て、知らず〜服のポケットに手をあてた。何だか錢入が無さそうだ。驚いて再びポケットに手をあてる。錢入はやつぱりない。「しまつた。」と思つて荷物を其の場に、投げやるやうに置いてすぐ汽車に飛び乗つた。乗つたわごは僕の乗つたわごと違つたのか、僕の側に坐つてゐた人がゐない。それですぐ飛び降りた。「今のわごは違つた。大てい次のわごだらう。」こう思つてすぐ次のわごに飛び込んだ。夢中になつて人々をかき分けて、僕の坐つてゐた場所を探したが、中々見つからない。ふと見ると僕の横に坐つてゐたおぢいさんが目にはいつた。其のおぢいさんの横に坐つてゐたのである。引きつけられる様に、其所へ行つてよく〜探して見たが、錢入は見つからない。「どうしよう、あの錢入の中には汽車の切符や自転車の切符もはいつてゐるのに……」こう思ふと胸がどき〜する。もう一度探して見たがやつぱり見つからない。仕方なく汽車から降りやうとし



た。同時に汽車の汽笛が「ピーーツ」と發車をつげた。と後の方で「ぼんぼん。」と呼ぶ聲がした。僕は其の方を振り向いた。其所には四十五、六歳位の顔の黒いひげの少し生えて人が僕の錢入を持って立つておられた。其の時の喜びは一通りでなかつた。本とうに嬉しかつた。夢中で走つて行つてだまつて引張るやうに貰つて、汽車から降りやうとしたが汽車はもう大分動いてゐる。飛降りなければならぬ。『飛び降りする時は汽車の進んでゐる方へ飛ぶと大したけがない。』と前に聞いた事を思ひ出して、錢入をしつかり握つて思ひ切つて汽車の進んでゐる方へ飛んだ。足をくねつてうつ伏に、ブラットホームに倒れた。其のまゝ上を見ると、さつきのおぢさんが窓から顔を出して僕の様子を、じつと見てゐらしやつた。荷物はそのまゝ待つてゐてくれた。

棧橋を渡りながら「あの錢入がなかつたら、自轉車も貰へないし、驛から出る事も出来ないのに……ほんとうにあのおぢさんは親切な人だつた。何所の人だらう……」こんな事を思ひながら今の汽車を向いて御禮した。あたりには人の影も見えない。汽車はもう見えない。

### よき御代に生れて

岐阜縣羽島郡竹ヶ鼻小學校

尋六 木村みち子

今年の十一月には、京都紫宸殿で御大禮の御儀式をお舉げになります。そして我が國では、國を舉

げて此の御大典を、お慶び申し上げるのであります。

我が國では此の様に平和の慶びに満ちてゐるのかへて、隣國の支那では南北戦争が起つたり、馬賊がおそつて來たりして、國民は各其の職業に安心して勵む事も出來ず、夜もおち／＼眠れないといふ様な有様です。

それであるのに、我が國では、一天萬乗の天皇陛下がましく／＼て、私等國民を我が子の様にお慈み下さるのであります。

家のおばあさんは、今年天盃をいたゞかれます。おばあさんはよく「ほんとに有難い御代になつた」と涙をこぼしておつしやいます。おばあさんのお話によれば、昔は天皇陛下を禁裏様といつて「禁裏様を拜むと目がつぶれる」といつたものださうです。しかし今では、おそれ多くも有難い天皇陛下が東京へまで行けば、折々拜む事が出來ます。

思へば此の様な平和なよき御代に生れた私等は何といふ幸福な事でありませう。

### 松虫取り

長野縣東筑摩郡今井小學校

尋六 鹽原恒一郎

リーン／＼と美しい聲を立てて、虫がないてゐる。今度こそ取つてやらうと足音を小さくして、聲



のする方へ近よつた、聲は急にやんだ、逃げたとは思つたが、じつと立つてゐると又なき出した。聲はすぐ足の下です。そつとすはつて、見ると、草の中ではねこをこすつてゐる、くいつとざるを伏せた。「うまい」と弟がいつた。ざるのすみの方を少しあげた。松虫がそこから顔を少しだした。そこをつかまへ家へ持つて歸へる途中指の間からそつと見ると、不思議さうに長いひげをうごかして居た、僕は嬉しかつた。

## 私 の 家

宮城縣宮城郡福岡尋常小學校

尋 六 山 口 金 兵 衛

私の家は田舎にあります、山の間にある家ですから戸をあけてみると西も東も南も北もみんな山ばかりです。山の中の家といつた方がよいのです。

しかも私の家はごくそまつな家です、皆さんに見られたら笑はれることだらうと思ひます。小さくともそまつでも私の家です。私はこの家に生れてこの家で育つてもう六年生までになりました。

南國に櫻がさく頃になつてもこの山の家にはまだ雪さへ残つてゐることがあります。私の家に春が來てくれるのはずつと後のことです。それでも家のまわりには梅も桃もすもももあります。それらがかはるゝに咲いけると私はほんとうにうれしくなります、静かな家で花をみるのは非常にたのし

いものです。こればかりは南國の人にもじまんしたい程です。

やがて夏が來ます。うらの谷川ではつりも出來ます。小川ながら水浴も出來ます、家の前の井戸には魚を二三十匹ばかりかつておきます、小さいのも大きいのもゐます。

それから秋のもみぢ、冬の雪景色みんなよいものばかりです。殊に私はそりが大好きです。後の山から切つた木でそりを作つてみんなでかはるゝに引いたりします。しかしつらいこともあります。寒い冬の日に小さいあばら屋を風に吹かれることです。家の中にゐても寒さが身にしみます。雪が二日もつづけば身動きも出來なくなるではないかと心配する時もあります。

私はそんな時學校に來るのがつらいのです。けれどもまだ學校を休んだことがありません。もう私も六年生です。來年の春はこの學校を卒業します。そうしたら大いに働いて大きな家をたてたいと思つてゐます。

## 兄 さん の 歸 省

福島縣大沼郡西方尋常高等小學校

尋 六 小 松 禮 三

士官學校の兄さんから

メウ九ヒノザハニツク



と電報が来た。僕は小踊して喜んだ。翌朝四時に起きてK姉さんと迎へに出た。三里餘の途も遠い感じだにせず、停車場についた。暫らく待つて居ると見さんに乗せた汽車は黒煙を吐きごう／＼と走つて来てプラットホームに止つた。

軍服姿の見さんは見るからに愉快さうである。視線は忽ち僕を射た。

「禮三よく早く来た。」

僕は元氣百倍した。三人が停車場前の小店で支度を整へ、荷物を皆見さんと姉さんが持つた。僕の持ち物は僕におみやげに買つて来て下さつたラケットと帽子だけである。帽子はさつそくかぶつてラケットはさげた。

見さんはたくさんの荷物を持つて拍車のついた重さうな長靴を軽るさうにはいて平氣である。途中興津海水浴の面白いお話など色々聞きながらゆるり／＼歩いて来た。

村境の峠を下りる時、

兄「もう西方だ只見川はいつ見ても美しい。」

僕「山河秀麗の地偉人を出す。」

兄「西方からも野口英世博士のやうな偉人を出したい。」

それから兄と姉で會津出の偉人のお話を初めたので、僕はだまつて聞いて来た。

家についたのは丁度お晝でお母さんは門口に出て待つていらつしやつた。見さんは父母にあいさつしてみたまやを拜した。

おみやげ開きに僕が一番珍しかつたのはバナナであつた。お晝を食べてから見さんと一しよに氏神様に参詣した。

## 湧水

岩手縣盛岡市仙北尋常小學校

尋 六 中 村 キ ミ

此の頃のやうに暖かくなると思ひ出されるのは彼の畠のそばにある湧水です。

湧水は明治橋から二十四五町を下つて右がはに古い柳が澤山あり、さも涼しさうな所にあります。向ふには梁川橋が見えてゐます。湧水の右には一面に畠があり、畠の土手の下の大きい柳の根から砂をうごかして、もれ／＼と清い水が湧き出て居ります。柳の根のひらく出ばつた所には椀が一つそなへられてあります。畠で働いて汗をふき／＼彼の古い椀で此の水を呑む人は何とも言はれない感じがするのでせう。私もお父さんと一しよに畠に行く度にしばらく水の湧き出すのをながめます。そして古い椀で口をすゝいだり、呑んだりします。時には用意して行つたサイダーびんに、清い此の冷たい水を一ばいにして畠まで持つて行きます。汗をふき／＼此の冷水を呑む時の心をばどうしても忘れる事は出来ません。



## 少年赤十字團御親閲の所感

青森縣西津輕郡向陽小學校

尋六 竹内みづ子

木造を出發する時には、氣づかはれた天氣も、青森に到着して見れば、からりと晴れ、澄渡つた大空には、ただ二三の雲が流れて居るばかりであつた。驛を出て一同整列し、練兵場に急いだ。練兵場には早や他校の團員は一つばいになつてゐた。私達の整列場所に着き、今か今かと閑院の宮様の、お出でをお待ち申して居た。

しばらくすると一發の花火と共に、殿下は、自動車に召されて、練兵場へお入りになつた。急に場内は森とした。

五月十五日。今日は私達團員にとつて、かぎらない名譽と、喜びとにあふるゝ日であつた。やがて「氣をつけ」のラッパと共に一同は、帽子をとつた。殿下は一段と高い坐にお上りになられた。我々は殿下に對して、敬禮をすればおそれおほくも、答禮を遊ばされた。

やがて、おごそかな、「君が代」の音楽が廣い練兵場に、ひびき渡つた。一同は拍子に合はせ、眞心をこめて歌つた。宮様は私達の列の前を御通りあそばして、御親閲下さることになつた。

前方の列から順に御覽なられて、私達の列の近くにお出でになつた時、私達は一番よい態度をして、

殿下のお氣ざはりにならない様にしなければいけない、などと思つてゐる中に、もうついそばまで御出でになられた。

あまりおそれおほくて、たゞ固くなつて頭を左から右へ廻したが、自分の所から一二間もお通り過ぎになつた時、始めて、しかと、お顔を拜した。嚴しいお顔、お立派なお體格。

そして團旗の前までお出でになると、いち／＼答禮をなさる。ありがたさ、もつたいなさ、しみじみ感ぜられた。

それから宮様の御言葉を奉戴し、團歌を歌ひ、萬歳を唱へて式は終はつた。

五月十五日、私は此の日程緊張した事はなかつた。紀念のお菓子を戴き練兵場を出て、町を見物し、午後六時三十九分發の列車で、青森を後に木造へ歸へつた。

えらいと思ふ人

秋田縣鹿角郡大湯小學校

尋六 山本一司

僕がえらいと、思ふ人は澤山ある。すぐ思ひ出す人は乃木大將、楠正成、廣瀬中佐、外國では、ナポレオン、ワシントン、リンカーン、ムツソリニーなどがあるが此の様な人は、皆んなの人に、知られて居る偉人である。



僕が今書かうとする人は、不老倉の私の家の近所の、お爺さんである。此のお爺さんの家は、不老倉でも金持な家である。息子も立派な學校を卒業して今では會社に勤めて澤山の俸給を取つて居る。だからお爺さんは近所の人から大變敬はれて居る。又工夫のうち、役員にするものを、選ぶ事になると何時でも當選する。

然し僕が感心するのは、そんな事ではない。此のお爺さんの考へたり、行つたりしてゐる事である。此のお爺さんは今年六十で頭には白髪が一ぱいである。腰も少し曲つてゐる。けれども大變元氣である。そうして何時でも、何か仕事をしてゐる。金持の上、選舉する時には何時も當選するので近所の人から、「旦那さん」と呼ばれて居る。お爺さんは、鑛山へ行つて働く、又島に行つては、草を取り種をまくといふ様に、何時も働いてゐる。近所の人が「もう旦那さんのやうに物持の方がその年で働かなくてもようござんすのに、」と言つたら、「いやそうでない、俺は、働かなくても食つて行けるが丈夫人人は、働くのが人間の義務だと思ふ。」と言つて笑つてゐた。お爺さんは何時もそう言つては一生懸命に働いてゐる。

僕はそれがえらいと思ふ。

大ていの人なら六十にもなつて、物持だら、いんきよして、ぶら／＼してゐるのであらうが、此のお爺さんは働くのが人間の義務だから、働くといふのである。

これは普通の人間では出来ないと思ふ。

## 兎の行方

福井縣遠敷郡小濱尋常高等小學校

尋六 山下マサエ

一  
六月の始めのことです。お父さんが田舎へ行きなされた時、可愛い、可愛い、野うさぎを一匹、もらつて来て下さいました。

そして金あみを買つて来て、あたたかな兎の住む箱をこしらへて下さいました。それから此の野うさぎを私一人の手で、育て様と思つて大事にしてやりました。

その兎は目も毛も茶色で、まだ子兎でしたから名を茶子とつけてやりました。その夜はよく眠る様にと思つて、手ぬぐひを箱の上から、そつとかけてやつて、私のよく見える所に置きました。

皆が深き眠りに入つて、あたりが静かになつた時、茶子は急に親がこひしくなつたのか、かなあみをしきりにちやり／＼かいてゐます。耳にさはつて眠れないから「シツ」と言つてしかると、おとなしくやめますが、又静かになると始めます。お母さんは其の夜は茶子がかなあみをちやりちやりかくので氣になつて眠れなかつたと言つておられた。

二



あくる朝、いつもより早く起きて妙興寺へ行つて、おいしさうなたんぼぼの葉を取つて来てやりませう。

「茶子食べな」と言つても知らぬ顔。「茶子々々」と言つても、知らぬ顔。

じれつたくなつたので、かなあみをちやりちやりかいてやると、驚いてねる所へこそくゝと入つてしまふ。歸るまでに食べてゐるだらうと思つて、たんぼぼの葉を箱の中へ入れておいて學校へ行きました。

學校から歸つて見たが、葉は箱の中でしほれて居ました。何をやつても食べない。その夜も何一つたべません。それが四五日續きました。私の世話がたらないかも知れない。私もさびしくなつて來ました。

お父さんやお母さんは「きつと茶子は親がこひしいのだらう。」とおつしやつた。それから二三日たつた時、お父さんがもとの村へおいでになつたので、山へにがしておやりになりました。茶子は今頃どうしてゐるでせう。——七月三日——

## 虫おくり

石川県河北郡種谷尋常高等小學校

尋 六 中 川 辰 子

八月二十三日、朝からあやしい空模様。おひる頃から細かい雨が降りだした。「虫おくりは止めになるかなあ」と誰かゝ話して通る。外に出て見ると男の子達が雨の中を、手に手に家々から集めた藁や豆がら等を、わい／＼さはぎながら道に運び出してゐる。北の空が少し明るくなつてきた。夕飯頃には雨が晴れた。御飯をすましてから母とお隣の庭先に出て見る。近所のねえさん達が二三人、ネンネをおんぶして團扇づかひで、面白さうに話して居られるので私も仲間入りをする。皆虫おくりの火を待つてゐる。そこを出て橋の上まで來る。此處が村中で一番眺望のよい處なので、もはや大勢の人達が集つて居られた。村の東北、湯屋の後の小高い山手に虫おくりの火が暗い闇の空をこがしてゐる。花火の様に火の粉が散る、火の燃えるにつれて火を圍む人達が笛と太鼓で面白くはやし立てる。暗い夜空に火の燃え上る有様は美しいが何だかものすごい。その火の周圍におどる人の影も何となく氣味が悪い。

山の火も餘程勢が衰へてきた。子供達があつたを振りかざしながら下りて來る。橋のそばに太鼓を下ろして、又一しきり笛と太鼓ではやしだす。今日村に宿り合はせた古手屋さんが太鼓を



打ちながらおどる。其の身振りや手つきが人々をどつと笑はせた。かうして橋の上は夜おそくまでにぎやかであつた。

## 盆踊り

石川県河北郡津幡尋常高等小學校

尋六 中村 豊枝

お暮参りの時間も近づいた。今夜はあの盆踊りもある。去年のを思ひ出すと又行つて見たくなる。おいしく夕飯をいただき居た頃から盆踊りの太鼓が聞える。太鼓の音の間に、笛や拍子木の音もする。

家を出て見ると、村のお宮様には三ヶ所に大かきりを焚いて、其のかきりに照らされながら踊子が踊つてゐる。笛と太鼓はかきりの上に立てた高いやぐらの上で音頭を取つて居る。

踊子は手ぶりしなやかにまげたりのはしたりする。調子はゆるやかなもので風に柳のなびく様である。足の運び方を見ても何れもきちん／＼と揃ふ。振袖の長いのもあれば編笠を着けたものもある。中には紫袴をはいたものもある。何れも十二三の子だ。赤い帯や袖の動くのが火に映えて美しい。初めて繪になる盆踊りを見た。長圓形をした踊子は次第に火の側を廻つて行く。

「今はまだ小さい小供だけであるが、おい／＼大人も出てくるね。」

等と話して居る中に編笠をかぶつた同じ様な七八人連の女があらはれた。すぐ調子に乗つて踊り出す。編笠の耳で結んだ真紅の緒が、一様に左へ向き右へ向きしてゐる。場中に一異彩をはなつと見る間に、黒い頭巾で頭から顔へ包んだ他の五六人連もあらはれる。着て居る物は思ひ／＼だが赤と白とを染め分けた帯代りのしごきが、ふさ／＼と後にたれるのが目に立つ。踊り盛りの足拍子、やがてぞろ／＼と聞える程になつた。くまないかきりに彩色をした長蛇の陣は七夕竹が風に吹かれるやうに動いて居る。

## 古馬車と自動車

富山縣下新川郡泊小學校

尋六 上杉 きく

鳥田店の横通りに昔を偲ばせる古馬車が、これはかゝつた車體を半分溝の中へ入れて、往來の片隅にほつたらかされてある。之でも昔は、たくさんの人をのせて、一かどの用をたしたのであらふが、今では、かへり見る人さへない可愛さうなものだと思ふ。

今は此のペト馬車の時代が過去つて、自動車王國の時代となつた。私はまだ自動車にのつた経験が少いので有難味はわからないが往來を通つてゐる時など、思ひがけなく後の方で「ブーツ、」といふと、びつくりして片隅へよる、そして自動車王でもお通りになつたやうに、遠慮なく通り越すのを見



送る。こんな時にはほんとうに自動車はつらくにくいやうに思ふ。殊に雨の日汚い泥汁を無遠慮に往來の人にとばして行く時なんか、餘り横暴だと思つて見送る。

## アメリカ人形

鳥取縣日野郡溝口尋常高等小學校

尋六 深田利子

遠くうなばら越へて来て  
私の學校につきました  
かみはちびれのブラウンで  
おめくはまるくすきとほり  
ねんねをさせるとつむります  
りんごのやうなほつぺたに  
小さな糸くぼができていて  
ねんねをさせると目をつむぐ  
おてくはまるまるまんまるで  
ねんねをさせるとめをつむぐ

丸く太つたからだには

きぬの洋服青帽子

ねんねをさせると目をつむぐ

## 小犬

鳥根縣松江市白潟尋常小學校

尋六 大川久子

「あ！ 犬が。」  
突然大きな兄さんの聲がした。驚いて見ると、白と黒のかはいい犬が歩いてゐる。兄さんが手を出して、「ここ……。」と呼ぶと小犬は、ちよこくと走つて来て、その手にだきついた。

兄さんはすぐその犬をだいて、裏の方にまはり、繩を持つてこられた。犬の好きな私は、繩でくくるのがかはいさうな氣がしたが、犬を拾つた喜が胸一杯になつて、どうする事も出来なかつた。けれど又其の一方には、すぐに心配がもち上つて来た。あの犬の大嫌なお母さんは、何とおつしやるであらうか、私は心配でくたまらない。兄さんに言ふと、

「なあにかまふもんかい。」

とぞんさいな言葉。そこに弟がやつて来た。すぐに犬をみつけて、



「やあ、犬が……お母ちゃん、見さんが犬をひろつてきてるよ。」  
と言った。臺所で、朝御飯の用意をしてゐらつしやつたお母さんは、ふとこちらをふりむいて、犬を見るより早く顔をしかめて、

「あら、又小犬をひろつて来たの、いやな兄ちゃんね。保ちゃん姉ちゃんに『犬を捨てゝきな』と言ひなさいな。」と言つたまゝ、臺所の方にむいておしまひになつた。

「それ始つた。」と私は思はずつぶやいた。何も知らない犬は「くんく〜。」と鳴きながら私にだきついた。私が静に背をなでてやると、さも嬉しさうに尾をふる。弟は、

「姉ちゃん、捨てゝこいと言つたら。」  
と大きな聲でどなる。見さんは、

「久子、保を相手にしないで、こちらに其の犬をつれて来い。」

とおつしやつた。私は繩をひいて見さんの後に随つた。見さんは玄關のすどに繩をむすびつけ、

「こうしておけばよい。」

と言つて家の中にお入りになつた。弟も見さんに續いて家の中に入つてしまつた。すると奥の方からお母さんの聲がした。

「久子、いつまで何をしてゐるの、まだ犬をいらつてゐるの、いやな子だねえ、犬なんか捨ててしまひなさいと言つたら。早く家に入つてお手傳しないとイケないよ。」  
と言ひながら玄關に來られた。小犬を見つけて、

「きたな、此の子玄關になんかつないで何といふことをするの。」

と言つてすぐ下りて、小犬の繩をとかれた。

「さ、捨ておいで。」

と言つて私の手に繩をお渡になつた。私は、

「見さん、どうするの。」

と大きな聲で見さんに言ふと奥の方から見さんは、

「もう仕方がない、お母さんが嫌なら捨てといで、」

「だつて——」

私は口ごもつた。

「もういゝ捨てて来い。」

もう仕方がない。弟は犬をつれて、しほ〜と門を出た。(親には別れ住む家もなく折角拾はれゝば又捨てられる。ほんとに此の犬はかはいさうだ。)

こんな事を考へてゐる中に草むらに來た。繩をといてやると、犬はぢつとしてゐるのかない。私はどうしても、小犬と別れる事がつらかつた。けれどどうする事も出來ない。思ひ切つて歸らうとする。やはり犬はちよ〜ついで來る。私はどうしてよいかさつぱりわからなくなつた。又犬をだくと捨てた繩を拾つて犬をく〜つた。そしてそばの松の木にく〜つて、そろ〜歸り始めた。一足歩いてはふりむくと、犬は自由にならないからだを、私の後を慕つて、身悶へしてゐる。「あらかはいさう



だ。けれどあれをとくといけない。」と思ひかへし、今度こそはほんとうに思ひきつて、後も見ずに駆出した。

それから一時間程して、私がお家の御用をすませて、捨てた場所に来て見ると、小犬は誰につれられて行つたのか、松の木に取残されてゐるのは、繩ばかりであつた。

## 或る夜

廣島縣佐伯郡中村小學校

尋六 高橋アサヨ

夕飯をすましてから表に出た。お母様もお父様も二人の姉さんも今晚はお揃ひで御寺に参られて私と妹だけで淋しく留守番をしてゐた。妹はアイウエオ、カキクケコと字を書いてゐる。私は表の障子にすがつてしいんとした静かさを雨の爲にやぶられてゐる眞暗な外を見つめてゐた。何だかおそろしいやうな淋しいやうな氣持で私の胸は一つばいだつた。

私はふと招魂祭に参つた時見た、哀れな乞食の事を思ひ出した。「あつそうだ。あの乞食は今どうしてゐるだらう此の雨の降るのに、家もなくてさぞ困る事だらう、いやあの乞食だけではあるまい日本中には何十人何百人あんな哀れな人が居るかもしれない。それに較べれば私達はどれ程幸福だかわからない。それなのに小言を言つたり、腹を立てたりするのは餘り我がまゝすぎる」私は私の心を叱つ

た。

「ほんとうに哀れな乞食と私達の生活とは全く地獄と極樂の差があるに違ひない。」と思ひ續けてゐると妹が奥の方から「こまい姉さん寝よう」と言つた。「え、寝よう」と返事をして二人は淋しく床に就いた。すると妹がふところをござ〜いはせてキャラメルを出して「お姉さん上げよう」と小さな手に五つおせて私の方に差出した。それは妹のきげんを取る爲めにお母様が下さつたのだらう。私はその聲に今まで思ひつゞけてゐた乞食の思ひ出を破られ「え！おほけに」と言つて貰つた。私は一口に入れた妹も食べた。

やがて私は妹とお話しようと思つてそつとひいちやんと呼んで見た、けれども妹はキャラメルを口に入れたまゝすや〜と氣安げに眠つてゐる。私も眠ろうと思つたがどうしても乞食の事が氣にかゝつて眠れない。

私はもう一度起きて表に出て見た。外は前より一そう雨がはげしくなつてゐた。あの乞食はどうしているかしら……。



## インキの思ひ出

山口縣佐波郡華浦尋常高等小學校

尋六 古 谷 茂

はつと思つた時はもうおそかつた。疊の上に流れた黒インキはだん／＼と領地を廣めて、や／＼へこんだ所に集つた。

「お父さんにしかられる。」

と思ふと、氣が落着かない。どうしてよいか／＼名案が、頭に浮んで來ない。あたりを見廻してゐる中に、兄さんの机の上に置いてあつた吸取紙が目につつた。

「これでふき取つてやらうか。」

と思つたけれど、兄さんのだから後がこわい。やうやく僕の机の上にあつた半紙でふき取つた。惜しかつたがこれより外に、良い方法がなかつた。

足音が聞える。どうやらお父さんらしい。僕は疊の上のインキをかくさうと思つて、其の上にあふむけになり、そばの雑誌を取つて讀んでゐるふりをした。半紙でふき取つた後に、インキがまだ残つてゐたと見えてせなか／＼どうやら冷たい。

間もなくふすまがかりりと明いて、にっこりとしたお父さんの顔がのぞいた。

「茂、夕飯だ。うん其の手はなんだ。は、あインキをこぼしたな。後からさつとふいて置くんぞぞ。」と、言ひすて、奥の間の方に行かれた。あ、何といふやさしいお父さんだらう。お父さんがふすまを明けて來られた時、びく／＼しないで

「お父さん。僕はインキをこぼしました。」

と、なぜ正直に告げなかつたであらうか。僕はお父さんに對して、「すまない。」といふ一念が心の底からわく／＼と起つて來た。其の時、僕のまぶたには何時の間にか涙が宿つてゐた。

これは五年生當時の春の出來事である。インキは今も尙僕の勉強の疊の上になすく残つてゐる。

## 榮え行く御坊

和歌山縣日高郡御坊尋常高等小學校

尋六 楠 富 雄

「中町へ行けば自動車を見られる。」といつて見せ物でも見る様に珍らしがつたのは、僕が幼稚園へ通つてゐた頃だつたと思ふ。和歌山、田邊を通ふ白濱自動車がその頃はまだ町はづれであつた紀小竹に小さいバラック建の營業所が出來て、自動車が二三臺休んでゐたことをおぼへてゐる。

それが今では日高小型、日高タクシー、西島など立派なベンキ塗の營業所が出來て或は山路或は比井港へ道成寺へ波止場へと縦横に走つてゐる。



自動車に乗るといふと鬼の首でも取つた様にいばつたものだが今では私達でも年に二三回は乗る。内のお父さんなどはよく田邊へ用たしに行くが晝すぎに内を出たと思つたら夕方すました顔で歸つて居る。荷物をうづ高く積んで勇ましくしつ走して来る貨物自動車が目につき出してからまだ一年とたぬぬのに丸太・丸二・丸三などの運送店や商船・片倉の會社が我も我もと走らせる様になつた。それがどれもみんな貨物の山で、通りすぎるときなどなんだか氣味のわるいほどだ。よくもかう貨物があるものだと思ふ位だ。僕達は自轉車でいつたり遊んだりするのに随分困るのだが便利なることはこの上もない。内の姉さんが田邊の高女へ轉校した時など机や本箱そのほかいろ／＼な荷物を家の前から一のせにのせて走り去つた時など何んと便利になつたものだと思つた。

紀南の人は「汽車を見たいだらう。」と笑はれて來たが十月中旬に由良驛は開通する御坊へは來年だ。もう由良トンネルも出來、小松原の御坊驛は丸山のふもとに廣い敷地をこしらへて汽車の來るのを待つてゐる。日高平野を北から南へ一直線に堤防のやうに道路をつみ上げてゐる。レール丈しけばよいのだ。御坊驛が開通するとそこから熊野街道を横ぎつて町の西北を西川に沿うて八幡宮の裏を通り川口に出る臨港鐵道を敷設しやうと言ふ計劃さへもあるさうだ。かうして御坊ははてしなく發展する。

## 瓦 焼 く 家

和歌山縣日高郡鹽屋尋常高等小學校

尋 六 木 村 ヨ シ エ

私が五つ六つの頃町はずれの私の家から少し離れた畑の中に一軒の瓦屋がありました。友達のない私はよく其所へ行きました。いつも土だらけの着物を着た夫婦は毎日せつせつと唄も歌はずに土をこねたり瓦の形を作つたり列べたりしてゐました。暑い日には二人とも裸になつて働きました。そして雨さへ降らねば大抵一日おきに圓い土のかまどから瓦を焼く煙が上りました。小父さんはいつも手先がよごれてゐるので虫等にさされてかゆくなつたりうるさく顔に汗が流れたりすると、むつかしさうに二つの腕でそれをこすりました。時には土だらけの兩方の手を中ぶらりんにぶらさげてお日様を仰いで大きなクサミをしました。其の恰好が餘り面白いので思はず私が笑ひました。小母さんは下を向いてやつぱり働いてゐました。其の頃やつと片言いふ様になつた男の子は何時もむしろの上に一人寢轉んで氣嫌よく遊んでゐました。それでも小母さんは氣になるやうに時々仕事の手を止めて何か物を言つてあしらつてゐました。時を見はかつてお乳をやると子供はあまりうれしので兩方の手で小母さんのお乳をつかみ足をむしろの上にとさん／＼といはしながらぐん／＼呑みました。一しきり呑むと又おとなしく遊びました。私が時々お菓子等をもつていつてあげるとウマ／＼と言つて本當に喜び



ました。それよりもつと小母さんの方が嬉しさうな顔をして何度も私にお禮を言ひました。その時の目は何だか涙がにじんである様な目でした。

其の頃その家の屋根は中の竹が見える程破れ果ててゐました。私は瓦を造る家のわら屋根といふ事が第一に不思議であんなにこはれてゐるのに何故たくさんある瓦で直さないのかといふ事が氣になつて仕方がありませんでした。今日直すか明日直すかと自分の事のやうに毎日待つたのですが仲々其の日は来ませんでした。きつと今度のお正月に直すつもりなんだからと思つてゐた。其のお正月が来て直しませんでした。私はがまんが出来ない程待ち遠しくなつて母にたづねました。母さん彼所のお家まで早く直さないの。さうねもつと立派なお家だつたが若い時あの小父さんがお酒を飲んでね、何故お酒を飲んだの、養母があまりひどい人だつたのでヤケを起したの、子供なんてそんな事聞く物じやないよ。母がいやな顔をしたので私は口をつぐみました。ヤケつてどんな物かしらん、お酒を飲んだら何故屋根が直せないんだらうどうしても私にはわかりませんでした。突然其の人達の姿は夜の中に見えなくなつた。私はあまり急なことなので、驚くよりもなまけなくなりました。私の心にはどうしたんだらうと思ふ不安と淋さがその後幾日も續きました。

ふるひつきたい程純白な五六歳の頃の事は私の生涯が始つて以來最も印象深い出来事となつて今でも頭にのこつてゐます。五年前にははされた瓦屋の後には何もしらずに黄金色の稻がみのつてゐます。

## 盆 踊 り

徳島市佐古尋常小學校  
尋 六 小 川 町 子

夏の日の景物として、阿波の盆踊りは各地方に知られてゐます。阿波の盆踊り！ 我を忘れて夢中に踊る。ですから狂踊と言ふのです。

軽い軽い調子で自由自在に踊つて行く姿を見ては、誰でも自然と浮き／＼した氣持になるでせう。それで盆踊りといふよりも、寧ろ狂踊りとして地方名物の一つに加つてゐる所以です。私がまだ名古屋に住んでゐた時から此の踊りの話をよくきかされたものです。

此の踊りのはじまりは、祖母の話によれば、蜂須賀侯入國の際から踊りだしたとか、それが今尙お盆の踊りとして續いてゐるのです。どのやうな踊りであらう。まだ見ぬ懐しい故郷、南國の徳島を憶れる時、盆踊りに色々な想像をめぐらしてみました。殊に毎年お盆を迎へる頃になると、「國ぢやもう三味線の音があらちちから流れて来る時分だね。」等と家の人達の話を聞き、さては踊りの繪葉書を見ては、ほんとうにみたくてたまらなくなるのでした。けれど三年前からは故郷の土を踏んで踊りの日を樂しむ事が出来るやうになりました。晝間の汗を洗ひ流してすつきりした氣持になり、父母に連れられて賑はしい新町橋のたもとまで人



ごみにおされつゝ見物に出かけて行くのです。

歸郷して初めてこれを見た時は、かねての想像以上に驚きの眼を見はりました。澤山の踊り子の一團が三味線笛太鼓鐘……等多くの鳴物に合せて町から町へ、すべてを忘れたやうに踊り歩いて行くのです。「踊る阿呆に見る阿呆同じ阿呆なら踊らな損ぢや」と、大きなおじさんがどら聲あげて廣い道を一ぱいに踊つて行く姿。その踊り方、その足どりは各地に知られてゐるだけあつて大それた面白味があるやうに思ひます。こうした大人達に交つて小さい子供が踊る。大人も及ばない手振り足どりで身輕に踊つて行くのも可愛らしいものです。大阪方面からも態々海を渡つて見物に来るといふ程なので、それがほんとに優れたものではないとしても、刺戟の少ない島國で生活する人々にとつてこうした年に一度の踊りに心を浮して踊るといふ事が非常に楽しみなのです。

畏くも此の秋には、千載一遇の御即位の御式を挙げさせられますので其の御祝として七日間踊りが許されて居ります。

誠心こめた徳島縣民の踊りが独特な味を持つて賑はふ事でありませう。

## 徳 さん

高知市第三尋常小學校

尋 六 島 崎 利 之

もう九月の下旬といふに、眞晝の太陽は石をも溶かす様な勢でカン／＼と照り付けてゐる。木々の緑が其れに反射してぎら／＼輝いてゐる。まばゆい。灼熱の最中、澄み渡つて大空に鋸の音がじやんじやん／＼と小氣味よく響く。と、音が止んで裏門の戸が開いてぬ／＼と體をかませて這入つて來た者がある。其れは大工の徳さんであつた。六尺もあらう大きな體、駝鳥の様に長い足、三星の法被を着て、勤勉其のものゝ顔が鉢巻をした帽子の陰にのぞいてゐる。日に焼けた赤黒い顔の中に鼻の下の筋が目立つ。

一昨日家へ來た時は、長いひざをかしてまらせて、卒直な口ぶりで何かお父さんに教へてゐた。僕は其の様子を見て眞先に此の大工さんは正直な人だなと思つた。徳さんが何處かの門を直した時、四十九圓五十錢もらふ所を勘定を間違へて四十四圓もらつて後で分つた時、氣の毒がつてよう言ひに行かなかつた程、徳さんは正直だとお母さんが言つた。だから其の時、徳さんが眞剣になつて話して居たから、僕は誠心誠意で話してゐるのだと思つた。又實際さうらしい。お父さんが言ふ時は、何時でもやあ／＼と賛成の意を表してゐるが、さい／＼反對して意見をして見る。其れも本當に此方のよい



様にして呉れるのだらうと感心してゐたのである。

僕は退屈になつたから庭へ出た。額がこげさうである。思はずまばたきする。垣の外に出て見るとテント代りの幕の下で柱に片端からのみで穴を明けてゐる。

こつ／＼と地味に仕事を運んで行く。黙々として一人で一心にやつてゐる。濃い空色は廣々と續いて日は未だかけらぬ。

又臺町の方へ這入つて行くと、一人の日庸さんが梃子で盛に臺所を打ちこわしてゐる。ぱり／＼めりめり、小氣味よくこわして行く。徳さんが這入つて來た。

「よう出來たぢやいか。うん、え／＼。其れから此奴をぶち切れ。ねや、此奴が支へちゆうきんねや。」と、言ひ乍ら柱を軽くたいてゐる。

「それから其の石ころをのけて此所へ入れてつけや、ねや。」

何でもねや／＼と言ふ。妙におかしかつた。徳さんは眞面目な顔で言つて出て行つた。徳さんが出て行つた後で僕は日庸さんの態度に氣を付けた。と言ふのは彼の日庸さんは徳さんと反對に背がずんぐりとみじかい。太い胴廻りが妙にかしい。のみならず其の顔といふが、何だか奇妙に見える。こんな言ふと日庸さんの悪口になるが、さうだから仕方がない。だからあんまり敬意を持つてゐない。其の時徳さんにほめられたからおだつたのだらう。其れも悪くなるが。急にせいせい仕事をしだした。僕は其れを見て不思議に思つた。大人でもこんな人がゐるんだらうかと。

日庸さんは地つきを始めた。き／＼と悲鳴が聞えてどぶ鼠が飛出して逃げた。日庸さんはにやに

や笑つた。

やがて二人は歸つて行つた。日庸さんは徳さんの後へくつ／＼いて道具をさげてのこ／＼歸つて行つた。僕は徳さんに何といふさまつた感じはないが彼を見る度に何ともいへない一種の感じがする。

## 子供のけんくわ

熊本縣天草郡柳浦尋常小學校

尋 六 山 田 好

午後である。

秋だとは言ふものゝ、まだやはり暑い。

とん／＼、と、とん……。ちやうしのよい音が僕の家の下の方に聞える。僕が行つてみると、をけ屋のをぢさんが一生けんめに汗を流しながら働らいて居られた。をけがりつばに修ぜんされてゆくのを見てゐると大へん面白い。

僕はそばの石にこしかけて、しばらく見てゐた。

をぢさんのそばでは、正男、光義といふ近所の家の子供が、をぢさんから木や竹の切れはしをもらつて、舟のやうなものをつくつて遊んでゐた。

二人とも同じ年の五つである。



僕がをぢさんの仕事を見てゐるうちに、どうしたはずみにか、今まで仲よく遊んでゐた子供がけんくわを始めた。

「こゝら、こゝら！ けんくわすんならでけんぞ！」と、をぢさんはおそろしいやうな顔をしてみせられた。それでも正男は光義に砂をどん／＼投げつけた。

「こゝら！ 正男！」

僕が丁度言はうとしたと同時に、をぢさんが今度は仕事をやめて又しかられた。光義は目に砂がはいつたので、「あん／＼」泣きながらうちへ歸つて行つた。正男は、その時はだかで居たのだが、着物はそこに置いたまゝ一散に家に逃げて行つた。

僕はをぢさんに、

「あゝ、子供のけんくわは面白かなあ——」と言つた。をぢさんは、もう仕事を仕上げてしまつて笑つて居られた。やがてをぢさんは、きれいにそこをかたづけて、道具をかついで歸つて行かれた。竹は大きな輪にして持つてゆかれた。

しばらくしてから、また正男がやつて来て、

「光義、あつばい」

と言ふと、そこのお母さんが、

「もう、けんくわすんならでけんばい。」

といはれた。正男は「あい」と言つてゐた。

そこへ光義がやつて来て、

「もうあいばん、あつとな……いかなか、うちなくんな！」

と言つた。光義は目を赤くしてゐた。

正男はさつきの着物をとつてきて、「ばか／＼」と言つて歸つてしまつた。

## 南洲翁の肖像

鹿児島縣薩摩郡龜山尋常高等小學校

尋 六 石 神 高 明

僕の内の表の間に四枚の額縁がある。

林檎や梨葡萄を集めた繪は、母が鹿児島へ行つた時の土産で、ミレーの穂拾ひの西洋畫は亡き父が京都へ居た時から持つてゐたもの、それに一番床の側のが修業といふ大字の額と南洲翁の肖像とである。

僕は何と言つてもあの南洲翁の偉大な肖像に引き附けられる。光り輝いた大きな眼玉、圓々と太い鼻、ムツと結んだ口、垂れ下つた耳そして豊かな頬からあご、角力の横綱のやうなデッブリとした體格、紋所の著るしく大きい木綿の羽織と堅く結ばれた紐。どこに一分の隙もない。翁の性格はこの肖像でよく言ひ表わされてゐる、といつてよい。



あの恐ろしい程光つた眼は百年の後の世まで見通された眼であつた。明治初年征韓論を唱へしも自分の主義が通されず、しかも自分の主張のためには、大臣大将の職をも惜しまず、遂に職を辭して薩摩に下られたが、翁の先見の明があつた事は、後に解つた。又引きしまつた口元は翁の果斷に富みたるを表はしてゐる。勝安芳との會見の時など、翁の果斷により江戸幕府は勿論、江戸市民は兵火に見舞はれずすんだ。あの時南洲翁が居なかつたら江戸はどんなに變化してゐるのであらう。

「高明何して居るか」と翁の眼や口が僕をしかりつけて居るやうにも思われる。しかしよく見て居ると又ほんとにやさしいおぢさんの様だ。

僕は向田のおぢさんから聞いたが、明治十年の西南の役の際、翁は陣中で緋の着物に大小をさして常に部下の辛苦を謝し、御苦勞！ 御苦勞！ と言ひながら巡視して歩かれたと言ふ。

又或時翁が狩場からの歸りに、立派な犬を見て「こん犬を呉れんか」と仰つたら主人は「イヤ西郷さんでなくては上げはならん」と答へたさうだ。

よく部下をいたはり下々の人民をも可愛がられたので部下の人々は翁と生死を共にし、又一百姓に至るまで先生を敬慕して居たことは、よく分る。僕は翁が一層すきになつて來た。

明治十年、翁は賊名をおひ、あの城山にはかなく露と消えられたが、維新の大業は多くは翁達の力によつて成し遂げられたのであつて、我國家のためには無二の忠臣であつたのである。

明治天皇は翁の功を賞し給ひ、賊名をとり尙ほ正三位を賜はつた。東京上野公園には犬を引かれた銅像が建てられ、我が鹿兒島浄光明寺は翁のたましいの永久に眠る處として縣民の建てたるものであ

る。

嗚呼稀代の大英雄南洲翁よ。何時までも僕をにらみつけて居て下さい。

## 火 事

北海道小樽市稻穂尋常高等小學校

尋 六 河 野 久 美

ジャン／＼と早鐘の音。「火事だ／＼」と近所の人々のさはぐ聲。ブウ／＼と自動車ポンプの走る音。彌次馬の走るさわがしい足音。火事は近くらしい。縁がはへ出て見ると近い所の沙汰でない。火はすぐそこに天をこがすばかりにもえ上つてゐる。全身に大そうあつさを感じた。家中思はぬ近火に仰天した。火事は八千代館の映寫室から發火したのださうだ。長い間の日照りに消防隊の努力するいとまもなくめり／＼と家々をなめた火の手は花屋にまでついた。

家のうらから出るとすぐ花屋だ。いくら大通があるとはいへきがきでなかつた。萬一の時の用意にお父さんやお母さんは大切な品を體につけ、様々のものを出来るだけまとめていつでも出せるやうにしてゐらした。私等は學用品のありたけをかばんにつめこみいつでも逃げられるようにした。お姉さんは子供等の着物をまとめてゐらした。

お母さんは私に今年三つになる末の妹をおぶさせて妹等をつれてやけないにもしろ一まづ親類に立



のかせた。私はすぐの妹とその次の妹に手をつながせ五つになる妹の手をひき、はぐれないようにして人々の間をくぐりぬけながら親類の家へ急いだ。せにいる幼い妹は鐘の音をきいて喜んでゐる。私は何もわからないものはしやはせだと思つた。一年生の妹は紙人形の箱までもつてきてゐた。親類の家へきてからもきがきでなかつた。縁がはへ出て火のまをうらに見ては又すはり立つたりすはつたり大そうきが落ちつかない。末の妹は何も知らぬかのやうに無邪氣に遊んでゐる。ちようど八千代館へいつてゐらした叔母さんが歸つてゐらつしやつて大へん心配して下さつた。叔父さんは私の家へいつてゐらしたのであるすであつた。妹等は今にも泣き出しさうであつた。私も一時は泣きたい程であつた。その中に煙がだん／＼白くなり見えなくなつた。もう火事はおさまつたが家はやけなかつたかしらと心配してゐるとお姉さんがむかへにきて下さつたのでほつとした。

## 旅の朝二題

北海道札幌市東北小學校

尋六 安 西 猛

### 一、温泉の朝

フト目をさました。川水の音が枕元近く、はつきりと聞える。しばらくは雨の音かと耳をかしげた

程であつた。札幌の家の事を夢に見てゐた僕はあたりを見まわして、一寸の間不思議な感じがした。此所はカルスの旅館の一室である。

ガバと夜具をはねのけ障子を明けて、ろうかに出た。もう雨戸が取られ、冷たい山の氣がひし／＼と身體にしみる。暖かい夜具から出たばかりの僕にはひどく冷たく感じた。

下から二階の軒にまで枝をはつた櫻の木の葉にはしつとりと露がおりて銀色につや／＼と光つてゐる。

向ひ側の旅館の雨戸は、はづされてのきにつるされてある幾つかのちようちんがゆらり／＼静かにゆられて居る。川ぶちのみやげものやの雨戸が今がら／＼と明けられて中から白髪のおばあさんが出て來た。

谷川をへだてた頭の上にかぶさるやうな山は身體を青黒くそめてふもとの方はうす絹のやうな朝もやに包まれてゐる。川上の方にはその朝もやから浮び出るやうに白樺の眞白な幹が二三本立つてゐる。スズを鳴らすやうな、せはしない、しかし快よい谷川の音がたえず耳にひびいて來る。東の方を仰ぐと空には一片の雲もなくはき清められてまた今日の暑さを思せる。中空には月が昨夜の夜を名ごりおしげに夢のやうにだん／＼うすれて行くやうに見えた。

温泉浴場は煙のやうな朝もやに包まれてぼんやり見え、川の岸からは眞白な湯氣がゆるやかに高く高く登つて行く。

僕は欄干にもたれて、自然の朝景色に見とれて居ながら、急に思ひ出したやうに手拭をさげ下に



りて行つた。自分の身に不似合な下駄を足にして旅館を出た。しつとりと露のおりた土の上をひしひしと冷い下駄の音をたてながら、浴場に足をむけた。

川の水は急に光り出した。地上にあるものが皆生きかえつた様に思はれた。

僕は暖い日さしを背に感じながら浴場に下りていつた。いつの間にか浴場を包んだもやもどこえやら消えうせて居た。

## 二、古城の朝

若松滞在三日目の朝である。僕達三人は起きぬけに外に出た。近所の家々ではまだびつしりと雨戸がしまつて居た。町中はしんとしてまだ眠つてゐる。兵隊さんだけが朝早く外出して町の中をこつこつと歩いてゐる。だん／＼行くと酒屋、味噌屋などが／＼と雨戸をあけ始めた。

昨日の雨の爲に草の葉の露が銀玉などのようにきら／＼光つて美しい。柿の木には青々とした實がすずなりになつてゐるのも珍らしい。

町を出はざれると廣い野がひらけてゐる。左手にはまん／＼と水をたたえたおほりがあつた。こちらには青々とした田んぼがどこまでも續いてゐて海のようなものである。先の方はきりにつつまれてゐる。田の中にぼつんと一軒藁ぶきの家もやの中にかすんで見える。

ほりの水からはかげのようなものがさかんに立ちのぼつて居る。高い石垣には、つたがはえつてゐて其のかげにはまだ暗がただよつてゐた。

お城の入口まで来るとおほりの中で大きな鯉が威勢よくぼんと頭を出して静かな水に紋をえがいて

た。入口の石垣はだいぶくずれて居た。此のどれにも青いこけがむしてゐた。

中はグラウンドになつて居た。僕位の子供がもうあつちにもこつちにも長い竿を持つてせみ取をして居た。

古いお城なので見上げるような杉の木が黒々とたくさんそびえてゐる。城は焼けて石垣ばかりであつた。石が焼けた爲黒くすすがついてゐるやうに見えた。

天主臺のあとに上つて見ると真中に大きな穴ぐら見たいものがある。塩ぐらで昔ここに食べ物や塩を入れておいたのだそうだ。

見渡すと若松の町はまだもやに包まれてゐた。そのうしろには飯盛山がもやの中に浮んで見えた。

昔白虎隊の人人があこの山の中腹から此の城の落いるのを見て切腹したのだ。

「あれあのあたり」と

指さされるあたりはかすかに松の木が見える。僕は朝もやをへだててあの松の木に相對した時色々昔の事がしのばれる。此の朝もやの中から今にも官軍のサンバラ髪や亂れかくる髪の毛をきりつとした白鉢巻とした血まみれの少年達があらはれて來そやうな氣持がしたり、今にもこのもやの底から鐵砲や大砲の音がひびいて來さうな氣持になつたりした。

そのこつちに小田山が見える。

すぐ目の前には練兵場がひろ／＼としてゐる。いつの間にか元氣よい兵隊さんが出て朝もやの中をちようしを合せて歩いてゐた。そのうちに若松の町の屋根がもやの間からかすかに見え出して來た。



朝日がまぶしく輝き出した。今日も天気であるうが空はからりと晴れて来た。遠い山の方から鳥が「カア／＼／＼」と鳴いて飛んで行く。お城の高い木の上からは「ギイ／＼／＼」とやかましくせみの聲が流れ出して来た。

ふと足もとを見ると草の上に置いた露が金の玉のように美しく朝日に輝いてゐた。

## 犬

沖縄縣中頭郡古堅小學校

尋六 安 森 静 子

或る日の夕方であつた。先生からいただいた宿題をやつてゐると、「静ちゃん石油がないから買つてきて頂戴。」ときこえるのはお母さんの聲だ。「はい」と宿題を中止し、石油びんを持つて出かけようとする。「石油代のお釣りがあつたらいいわしを買つてきてくれ」とおつしやつた。

石油といわしを買つて歸り道の事である。私が坂道をゆつくり歩いてゐると、何んでもかみ殺しさうな大きな犬が、向ふからやつてくる。私はもう「今日は此の犬にかみ殺されてしまふのだ。」と思つてぶるぶるふるへながら、小石をとつて投げて見た。すると犬は静かに橋の上にとまつて、何かさかして食べてゐる。ほんとにこわい犬だ。又小石を投げたらふんふん鼻音をたてて、そばの甘蔗畑にいつてしまつた。私はかくれてしやがんで、こんどはいわしの頭をむしりとつてなげてみた。私は松の

根本の方にかくれて、犬が出てくるのを待つてゐたのだ。やがて出て来た犬は、あちこちくる／＼かけ廻つて、とうとう私の投げたいわしを見つけ、口にくわへてあつちいきこつちいきしてゐた。こんどは私はどうなつてもいいと思つて勇氣を出し、先きよりも太い石を投げつけたら、石は犬の鼻先きに落ちた。犬はびつくりしていわしの頭をくわへたまま雲を霞と姿を消してしまつた。それから私は一散に家にかけてこんだのである。今までこんなこわい事はまだなかつた。

## 茅子さん

臺灣花蓮尋常高等小學校

尋六 守 屋 久

茅子さんはよく肥えて、目のくり／＼とした口のきりりと引きしまつたやさしい顔の持主でした。

お別れしてから二ヶ月位になりますが、今でも淋しい時にはきつと、茅子さんの事を思ひ出します。其の度にあの女らしい、やさしい言葉ではつきりとお話になる聲がまだ耳に残つてゐるやうに思はれます。

孝行な事弟妹をいたはる心はほんとうに、感心な程でした。茅子さんは又あはれみの深い人でもありません。或日のこと、私は茅子さんと私の家の前で遊んでゐました。其の時「あつ。」といふ聲が聞えたかと思ふと茅子さんは直ぐにかけ出しました。私も氣がついて、後から續いて走りまわりました。茅子



さんは自轉車に突きあたつて倒れた子供を直ぐ起しておやりになりました。子供をいろ／＼となだめて、泣きやんでから二人で子供を送つてやりました。

二學期も茅子さんと一しよに通學しようと思つてゐましたら家の都合でどうしても、茅子さんにお別れせねばならなくなりました時の悲しさはどんなでしたせう、お菓子をお母さんからいたゞいても一人で食わずに、二人で分けて食べるぐらゐでしたのに、又土曜から日曜にかけて泊り、明る朝はきつと朝御飯をいたゞいて来る程でしたのに、と思ふと眼から涙がとめどもなく出て來ます。

出發の前日にしばらくのお別れと、キュービーさんを下さいました。

いよ／＼出發する時には手紙で便りをするをかたく／＼約束しました。今でも月に二三度はきつとお便があります。時には面白いお便が、時には悲しいお便が、その度に私の心はなつかしい昔にかへるのです。

私は一度もお返事を出すことを忘れたことはありません。

## 山 羊

臺灣嘉義第二公學校

尋 六 胡 和 好

庭の隅にある芭蕉にしばつて置いた山羊がしきりに鳴きながら走り廻つてゐる。どうしたのだらう

か食べ物をやつたがちつとも食べない。こうして置くと苦しみながら死んでしまふかも知れない。

鳥の仕事をすまして歸つて來た父は晝食をすましたのだらう檳榔の團扇で扇ぎながら出て來たがふと此の山羊を見ると

「おやこれはどうした」と私と同じ様に驚いた。そしてなほ言葉を續けながら

「この山羊はもう七八年も育て、來たのだが、大分年をとつたからなあ。」

と言ひながら紐に手をかけたとたん突然

「蜂だ蜂だ」と叫んだ。

なる程芭蕉の枯葉の影に土蜂の巢があつた。

小屋へつれられて行つてからはもう鳴かなかつた。

父は又箆笠をかぶり肥桶をかついで天にも届く様な細長い檳榔の林の中を左に折れて田へ行つた。

此の頃は餘程涼しくなつて氣持のよい風がネムの葉を靜かに散らす。林の木々の間を縫つて銅羅の音が響いて來る。今夜はきつと隣りの庄で芝居があるのに違ひない。

西の龍眼林に日が入つてから父が歸つて來た。そして肥桶を下すとすぐ私に

「あの山羊は」と聞いた。

山羊は小屋で安らかに眠つてゐた。



## トラツクの雨

南洋廳トラツク尋常小學校

尋 六 柴 崎 勝 次

トラツクの雨は スコールといつてひどい夕立です。時にはジメ／＼した内地のつゆの様な時もある。スコールの時は涼い風をともなつて来るのでめつきり涼しくなる。一日中雨模様の時も涼しく、くらすことが出来る。四月頃から九月頃まで雨の日が多く雨期と呼んでゐる。降つた水が流れる爲に山の間には谷川が、澤山出来てゐる。島民が洗濯したり、身體を洗つたりする。島が大きくないから川も大きなのではない。川水は飲料にすることは出来ないが、外の用水には使ふことが出来る。何處の家も屋根はトタンでふいてあ。屋根の水を樋でひいてタンクの中に水を貯へる様になつてゐる。このタンクの水が我々邦人にとつては大切な飲料である。雨が續くと井戸の水はきたなくなるがタンクの水はこぼれるほどあるので、もう大がいやんでくれればいいと思ふが、雨が降らなくて水に不自由するときの苦しさはこんな島にゐるものでなくてはわかるまい。

## サイパン島便り(その一部)

南洋廳サイパン島サイパン尋常高等小學校

尋 六 笹 本 廣

しばらく御無沙汰致しました。皆様御變りもありませんか、私も元氣で勉強してゐますから御安心下さい。さてサイパンへ来てから、もう一年になるので土地の様子もたいがいわかるやうになりました。少し當地の状況を御報せ致します。氣候は年中内地の夏のやうですが何時も涼しい風が吹き通してゐるので内地の夏よりもづつと凌ぎ易く、雨も多いから野山の草木は青々と茂り何時もかも美しい花が咲き亂れてゐます。サイパンへ来て一番目につく物は植物と島民です。其の植物の中でも珍らしいのは椰子の木で、高さは十三四間もあつて幹の上方には鳥の羽に似た大きな葉が集つてつゝいてゐて、其の葉の根本には大人の頭ぐらゐの實がすゝなりになつております。實の中には白い肉があつて、其の中に水が入つて居るのです。